

京都府遺跡調査概報

第125冊

城谷口古墳群

2007

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、昭和56年4月の設立以来、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成17・18年度に実施した発掘調査のうち、南丹市の依頼を受けて行った、城谷口古墳群に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書を学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深めるために、御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査を依頼された南丹市をはじめ、南丹市教育委員会、南丹・京丹波地区土地開発公社などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成19年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 上 田 正 昭

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

城谷口古墳群

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	調査依頼者	執筆者
城谷口古墳群	南丹市八木町北広瀬	平17. 12. 5 ~ 平18. 2. 27 平18. 4. 10 ~ 7. 13	南丹市	中川和哉 高野陽子

3. 本書で使用している座標は、世界測地系国土座標第6座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の真北をさす。
4. 遺物の写真撮影は、調査第1課資料係主任調査員田中彰が行った。

本文目次

城谷口古墳群発掘調査概要

1. はじめに-----	1
2. 位置と環境-----	3
3. 試掘調査-----	3
4. 城谷口古墳群の調査-----	7
5. まとめ-----	67

挿図目次

第1図	調査地位置図および周辺遺跡分布図-----	2
第2図	城谷口古墳群地形測量図-----	4
第3図	土塁状隆起試掘トレンチ断面図-----	5
第4図	試掘第1トレンチ南壁断面図-----	5
第5図	試掘第4トレンチ西壁断面図-----	7
第6図	城谷口南向き斜面地形測量図-----	8
第7図	城谷口北西向き斜面地形測量-----	9
第8図	3号墳地形測量図および墳丘測量図-----	11
第9図	3号墳墳丘断面図-----	12
第10図	3号墳墳丘断面図・試掘第5トレンチ断面図-----	13
第11図	3号墳葺石実測図-----	14
第12図	3号墳出土遺物実測図-----	15
第13図	6号墳墳丘・第1主体部実測図-----	16
第14図	6号墳墳丘断面図・試掘第3トレンチ断面図-----	17
第15図	6号墳墳丘断面図・試掘第3トレンチ断面図-----	18
第16図	6号墳出土鉄器実測図(1)-----	19
第17図	6号墳出土鉄器実測図(2)-----	20
第18図	6号墳出土白玉実測図(1)-----	21
第19図	6号墳出土白玉実測図(2)-----	22

第20図	7号墳墳丘平面・断面実測図-----	23
第21図	7号墳出土鉄器実測図-----	24
第22図	7号墳出土玉類実測図-----	25
第23図	1号墳平面実測図-----	26
第24図	1号墳墳丘断面図-----	27
第25図	1号墳石室実測図-----	28
第26図	1号墳および周辺出土土器実測図-----	29
第27図	2号墳墳丘平面・断面実測図-----	30
第28図	2号墳石室実測図-----	32
第29図	2号墳2・3次床面実測図-----	33
第30図	2号墳1次床面実測図-----	35
第31図	2号墳石障内遺物出土状況実測図-----	36
第32図	2号墳出土土器実測図-----	37
第33図	2号墳出土鉄器実測図(1)-----	38
第34図	2号墳出土鉄器実測図(2)-----	39
第35図	2号墳出土鉄器実測図(3)-----	40
第36図	2号墳出土鉄器実測図(4)-----	42
第37図	2号墳出土鉄器実測図(5)・玉類実測図-----	44
第38図	8号墳墳丘平・断面実測図-----	46
第39図	8号墳石室実測図-----	47
第40図	8号墳出土土器実測図-----	47
第41図	8号墳出土鉄器実測図-----	48
第42図	9号墳墳丘平・断面実測図-----	48
第43図	9号墳石室実測図-----	49
第44図	9号墳出土土器実測図-----	50
第45図	10号墳墳丘平・断面実測図-----	51
第46図	10号墳石室実測図-----	52
第47図	10号墳出土土器実測図-----	53
第48図	10号墳出土鉄器実測図-----	54
第49図	11号墳墳丘平・断面実測図-----	55
第50図	11号墳石室実測図-----	56
第51図	11号墳出土土器実測図(1)-----	57
第52図	11号墳出土土器実測図(2)-----	58
第53図	11号墳出土土器実測図(3)-----	59
第54図	11号墳出土耳環実測図-----	59

第55図	12号墳墳丘平・断面実測図-----	60
第56図	12号墳石室実測図-----	61
第57図	12号墳人骨および装飾品出土状況図-----	62
第58図	12号墳出土土器実測図-----	64
第59図	12号墳出土鉄器実測図(1)-----	65
第60図	12号墳出土鉄器実測図(2)-----	66
第61図	12号墳出土鉄器実測図(3)-----	68
第62図	12号墳出土装飾品実測図-----	68
第63図	13号墳試掘トレンチ平面図および北壁断面図-----	69

図 版 目 次

図版第 1	城谷口古墳群全景(西から)	
図版第 2	(1)城谷口古墳群試掘トレンチ(上が北) (2)城谷口 3号墳試掘トレンチ(上が北)	
図版第 3	(1)城谷口古墳群南向き斜面(上が南)	(2)城谷口古墳群西向き斜面(上が東)
図版第 4	(1)土塁状隆起断面(北から) (3)試掘第 4 トレンチ(北から)	(2)試掘第 1～4 トレンチ(南東から)
図版第 5	(1)試掘第 2 トレンチ(南西から) (3)城谷口 3号墳全景(南から)	(2)試掘第 5 トレンチ(南西から)
図版第 6	(1)城谷口 3号墳西面(北西から) (3)城谷口 3号墳西葺石(南西から)	(2)城谷口 3号墳東葺石(東から)
図版第 7	(1)城谷口 3号墳南葺石(南東から) (3)城谷口 3号墳墳丘断面(東から)	(2)城谷口 3号墳北葺石(北東から)
図版第 8	(1)城谷口 3号墳墳丘断面(南西から) (3)城谷口 6号墳南葺石(南から)	(2)城谷口 6号墳全景(北から)
図版第 9	(1)城谷口 6号墳東葺石(東から) (3)城谷口 6号墳第 1 主体部遺物出土状況(南から)	(2)城谷口 6号墳墳丘頂部(西から)
図版第10	(1)城谷口 6号墳第 1 主体部遺物出土状況(南から) (2)城谷口 7号墳(南から)	(3)城谷口 7号墳(東から)
図版第11	(1)城谷口 7号墳主体部遺物出土状況(南から) (2)城谷口 7号墳主体部断面(西から)	

- (3)城谷口7号墳試掘トレンチ全景(北西から)
- 図版第12 (1)城谷口1号墳全景(南から) (2)城谷口1号墳墳丘(東から)
(3)城谷口1号墳墳丘(南西から)
- 図版第13 (1)城谷口1号墳石室(南から) (2)城谷口1号墳石室(東から)
(3)城谷口1号墳遺物出土状況(南から)
- 図版第14 (1)城谷口2号墳全景(南西から) (2)城谷口2号墳全景(北から)
(3)城谷口2号墳石室3次床面(南西から)
- 図版第15 (1)城谷口2号墳石室3次床面(南東から)
(2)城谷口2号墳石室3次床面遺物出土状況(南東から)
(3)城谷口2号墳石室2次床面(南西から)
- 図版第16 (1)城谷口2号墳石室1次床面(北東から)
(2)城谷口2号墳石室1次床面石障内人骨(北東から)
(3)城谷口2号墳石室1次床面石障内転用枕(北東から)
- 図版第17 (1)城谷口2号墳石室1次床面石障全景(北東から)
(2)城谷口2号墳石室1次床面石障内鉄鐸出土状況(上が南西)
(3)城谷口2号墳石室1次床面石障内鉄器出土状況(北東から)
- 図版第18 (1)城谷口2号墳石室1次床面奥壁遺物出土状況(南西から)
(2)城谷口2号墳石室羨道部(南東から)
(3)城谷口2号墳北側テラス試掘トレンチ(西から)
- 図版第19 (1)城谷口8号墳全景(南から)
(2)城谷口8号墳石室閉塞石周辺(南から)
(3)城谷口9号墳全景(西から)
- 図版第20 (1)城谷口9号墳石室(南西から) (2)城谷口9号墳石室(南から)
(3)城谷口9号墳遺物出土状況(南西から)
- 図版第21 (1)城谷口10号墳全景(南から) (2)城谷口10号墳石室(南から)
(3)城谷口10号墳石室(南西から)
- 図版第22 (1)城谷口10号墳石室(東から) (2)城谷口11号墳全景(南から)
(3)城谷口11号墳石室(南から)
- 図版第23 (1)城谷口11号墳石室(西から)
(2)城谷口11号墳遺物出土状況(東から)
(3)城谷口11号墳耳環出土状況(南から)
- 図版第24 (1)城谷口12号墳墳丘(西から) (2)城谷口12号墳全景(南から)
(3)城谷口12号墳石室閉塞石(南から)
- 図版第25 (1)城谷口12号墳石室(南から)
(2)城谷口12号墳石室遺物出土状況(東から)

- (3)城谷口12号墳奥壁部遺物出土状況(東から)
- 図版第26 (1)城谷口12号墳奥壁部遺物出土状況(上が南)
(2)城谷口12号墳石室閉塞石下層土坑(南から)
(3)城谷口12号墳耳環・玉類出土状況(西から)
- 図版第27 (1)城谷口13号墳全景(南から)
(2)城谷口13号墳主体部試掘トレンチ(西から)
(3)城谷口13号墳墳丘試掘トレンチ(西から)
- 図版第28 城谷口1・2号墳出土土器
- 図版第29 城谷口2・8号墳出土土器
- 図版第30 城谷口8～10号墳出土土器
- 図版第31 城谷口10・11号墳出土土器
- 図版第32 城谷口11号墳出土土器
- 図版第33 城谷口12号墳出土土器(1)
- 図版第34 城谷口12号墳出土土器(2)
- 図版第35 城谷口古墳群出土鉄剣・刀(2・6・7号墳)
- 図版第36 城谷口6号墳出土鉄器
- 図版第37 城谷口2号墳出土鉄器
- 図版第38 城谷口2号墳出土鉄鏃
- 図版第39 城谷口12号墳出土鉄鏃
- 図版第40 (1)城谷口3・6・7号墳出土玉類
(2)城谷口11・12号墳出土耳環・玉類

じょうだにぐち
城谷口古墳群発掘調査概要

1. はじめに

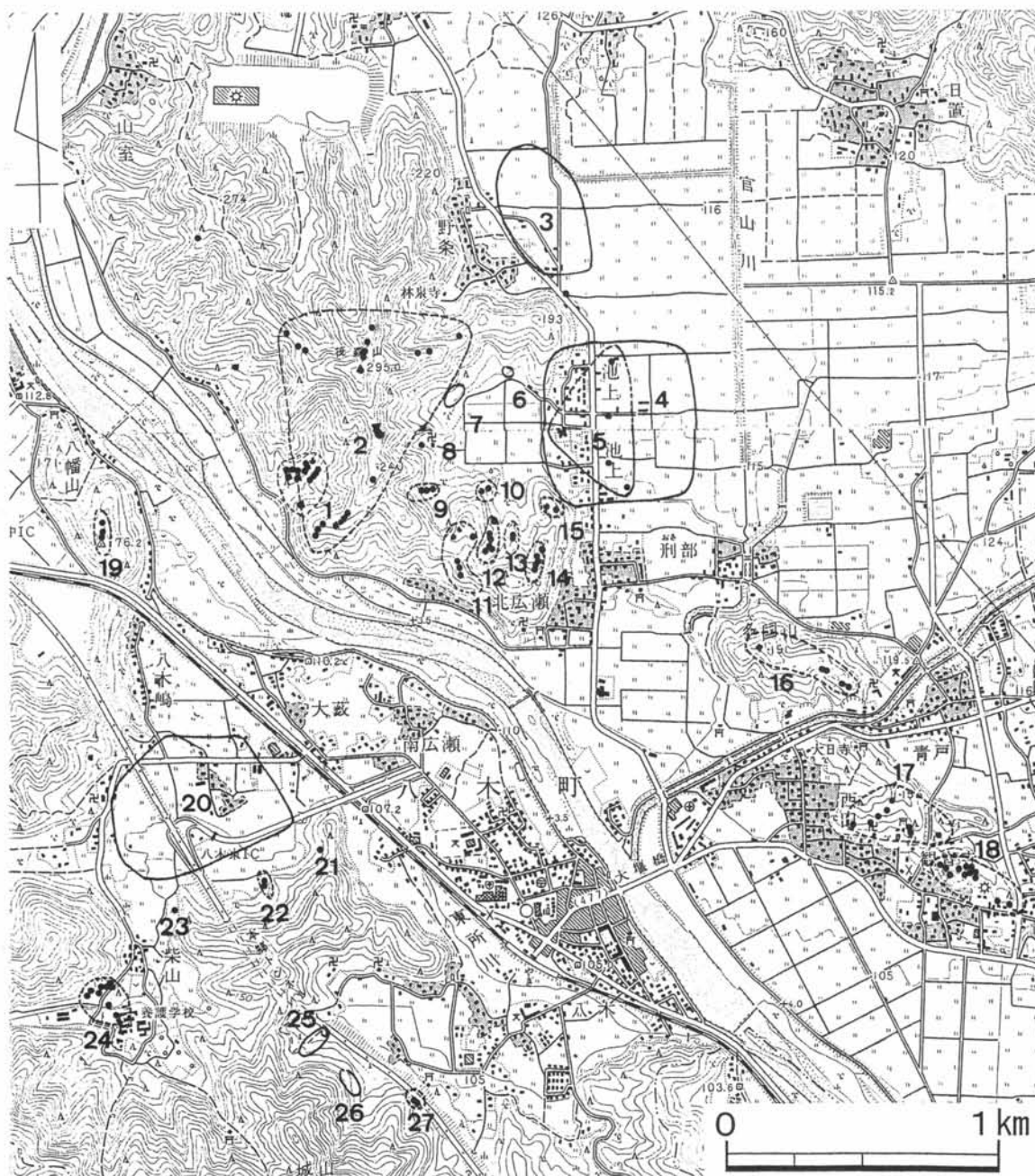
今回の発掘調査は、南丹市(平成18年1月1日合併以前は船井郡八木町)における八木工場団地北広瀬地区開発事業に先立ち南丹市の依頼を受け実施した。城谷口古墳群は、『京都府遺跡地図』第3版によると2基の古墳が確認されていたが、開発前の八木町・京都府教育委員会の現地立会によって大形の方墳の可能性のある方形土壇(3号墳)が確認された。また、4号墳の存在も同時に確認され、林道によって壊された部分から石室の存在をうかがうことができた。平成17年度の調査では以下の5つの目的が設定された。①1・2号墳の発掘調査。②3号墳が古墳であるかの確認調査。③開発区域内にかかる4号墳周溝部の調査。④3号墳と1号墳の間に広がる平坦面の遺構確認調査。⑤対象地内に存在する土塁状隆起が地名の城谷口にちなんだ城の施設であるかどうかの確認調査。

調査対象地のほとんどはヒノキの植林が成されていたが下草が繁茂し、笹や雑草によって近寄ることも困難であった。調査に入り雑草や樹木伐採を行ったことと、冬枯れのため視界が良くなり周辺に当初の数倍の古墳が分布する可能性のあることが判った。その時点で、調査目的を一部変更し開発対象地域の古墳状地形に対して試掘調査を実施することと成り、1・2号墳の主体部調査は、次年度に実施することとなった。その結果、13基以上の古墳の存在が確認できた。

平成17年度の試掘調査の期間は、平成17年12月5日～平成18年2月27日で、現地調査は調査第2課調査第2係係長奥村清一郎・同主任調査員中川和哉・同調査員高野陽子が担当した。

平成18年度は、開発予定地から古墳をできるだけ外し、保存を図るよう関係機関で協議が持たれ、大形墳である3号墳・5号墳、13号墳の主体部、14号墳などが現状保存されることとなった。平成18年度の現地調査は平成18年4月10日～平成18年7月13日の間に、調査第2課調査第2係係長奥村・同係長森 正(同年6月1日以降)・同主任調査員中川・同調査員高野で実施した。また、7月1日には現地説明会を開催した。概報製作に当たって鉄器を田中奈津子(京都府立大学大学院生)が主に、石室墳の墳丘・石室については主に高野が執筆した。その他の部分記述と田中・高野の原稿の補筆を中川が行った。

現地調査に際しては、地元北広瀬地区をはじめとする南丹市八木町の皆様、南丹市、南丹市教育委員会、京都府教育委員会の方々に大変お世話になりました。記してお礼申し上げます。また、現地において、石野博信・菱田哲郎・谷口悌・辻健二郎・都出比呂志・土井孝則・中村潤子・野島永・浜中有紀・門田誠一・和田晴吾の各氏からご指導いただきました。



第1図 調査地位置図および周辺遺跡分布図

- | | | | | |
|------------|------------|---------------|-------------|-----------|
| 1. 城谷口古墳群 | 2. 筏森山古墳群 | 3. 野条遺跡 | 4. 池上遺跡 | 5. 狐塚古墳群 |
| 6. 八幡宮古墳 | 7. 池上院北古墳群 | 8. 池上院裏古墳 | 9. 寺内古墳群 | 10. 寺内古墳群 |
| 11. 南尾西古墳群 | 12. 南尾古墳群 | 13. 南尾東古墳群 | 14. 北広瀬城古墳群 | |
| 15. 寺内東古墳群 | 16. 多国山古墳群 | 17. 住吉神社裏山古墳群 | 18. 池内古墳群 | |
| 19. 八幡山古墳群 | 20. 八木嶋遺跡 | 21. 鶴首山古墳 | 22. 森古墳群 | 23. 柴山古墳 |
| 24. 坊田古墳群 | 25. 堂山窯跡群 | 26. 小谷古墳群 | 27. 西所古墳群 | |

2. 位置と環境

城谷口古墳群は、亀岡盆地北端に位置する筏森山(標高295m)を最高所とする独立山塊から派生する西向きの谷部に展開する。谷の開口方向には、約300mはなれて桂川(河床面の高さ約105m)が流れている。現在の桂川は遺跡の所在する北広瀬地区と南広瀬地区の間を流れているが、江戸時代以前はより西側にあったとされる。

筏森山の東麓に展開する池上遺跡では、弥生時代中期になると集落が営まれるようになり、方形周溝墓については60基以上、100以上の主体部が検出されている。集落内では土器作りや石器作りの痕跡が認められる。石器作りでは粘板岩原石が弥生時代の遺構から発見でき多くの未製品や製品が発見されている。材料となる粘板岩は近くから運ばれたと想定されていたが、今回の城谷口古墳群の発掘調査によって、筏森山山塊が粘板岩とチャートで構成されていることがわかり、石器に適した石材も産出することが確認できた。弥生時代後期には集落の中心が西(筏森山寄り)に移っていく。また、弥生時代末になると池上遺跡は廃絶し、北側の野条遺跡に移動する。

古墳時代前期の集落の様相ははっきりしないが、池上遺跡は古墳時代中期に再び人が住むようになる。最初の古墳時代の居住者は韓式系土器や古手の須恵器、終末期の布留式土器などを使うとともに、鉄製コザネなども所有していた。集落が最も大きくなるのは6世紀初頭である。竪穴式住居跡は100基以上が検出されている。竪穴式住居跡のほかに独立棟持ち柱を持つ掘立柱建物2棟が検出され、1棟は6世紀末のものと考えられる。城谷口古墳群と桂川を挟み西に対峙する位置には、八木嶋遺跡がある。この遺跡からは4面庇の主殿と考えられる掘立柱建物跡や脇屋、柵などを持つ古墳時代後期の豪族居館跡が発見されている。この豪族居館の奥津城が坊田古墳群とされている。筏森山の山塊には城谷口古墳群だけではなく、尾根部に多くの古墳が築かれている。最も大きなものは筏森山の最頂部から南にやや下がった部分に築かれた約40mの前方後円墳である。筏森山の山頂部は平坦面があり一部岩盤が露出している。ここにも小形の円墳があるが最高所には存在しない、また神社の祠も平坦面を避けて作られており、神域として意識されていた可能性がある。また、現在は神社がまとめられているが、かつてな小さな祠が山腹に点在していたという。筏森山の丘陵に広がる古墳群の多くは池上の集落を中核とする人々の墓域であったと考えられる。しかしながら、城谷口古墳群のある谷は桂川に向かって開く。筏森山西麓には桂側との間に狭小な平地部しか認められない現在の地形からは集落があったとは考えられないが、桂川が現在より西に流れていたことからすれば西麓部に未知の集落があった可能性は排除できない。

3. 試掘調査

1) 土塁確認用トレンチ(第2・3図)

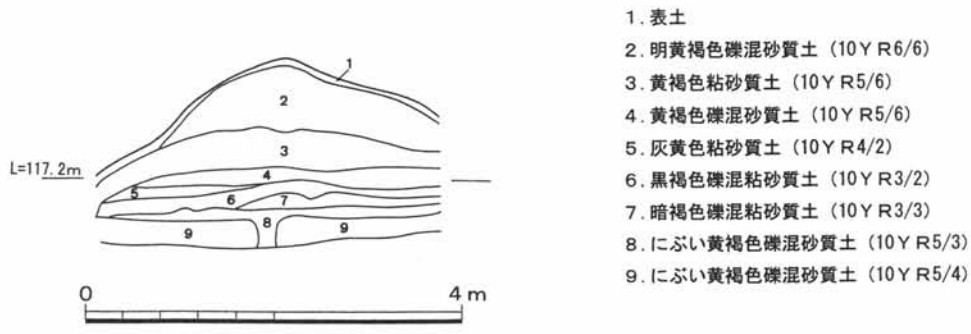
城谷口古墳群の点在する西向きの谷を横切るように高さ約2mの土塁状遺構が約40m存在している。また、土塁の中央部は平虎口状の土塁の存在しない部分がある。地名に残った城谷口の名から中世城館関連遺構の可能性が指摘されていた。一方、谷部の土塁内側は平坦で、谷奥から雨



第2図 城谷口古墳群地形測量図

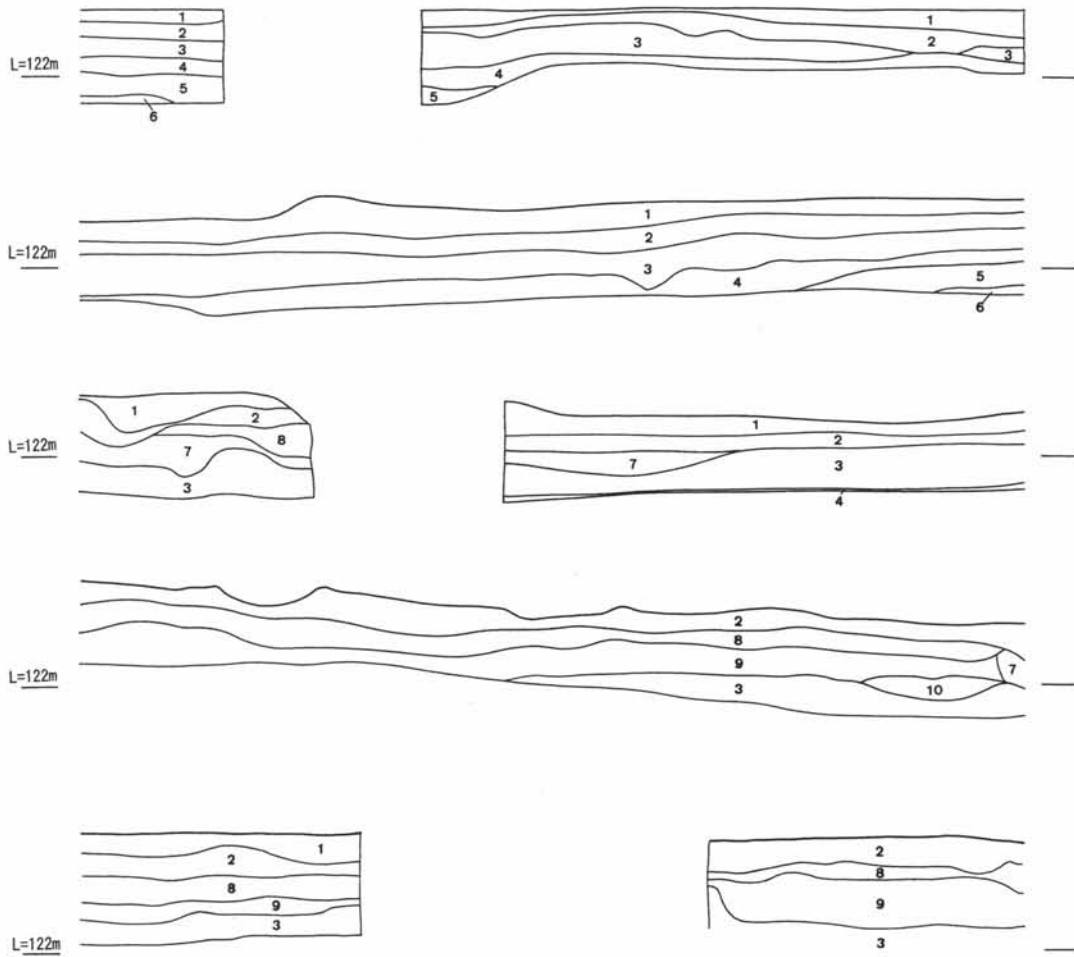
水が流入する構造をしていたことから、丹波地域で多く見られる谷部を堰き止めて造った灌漑用のため池の堤の可能性もあった。

遺構の性格を明らかにするために土塁に直行する形で試掘トレンチを設けた。その結果、水平の土層堆積を確認することができた。土層は締りのない粘板岩の岩片を含む砂質土であり池の堤として機能するほどの強度がないように感じられた。また出土遺物もまったくなかったため性格

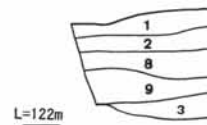


1. 表土
2. 明黄褐色礫混砂質土 (10Y R6/6)
3. 黄褐色粘砂質土 (10Y R5/6)
4. 黄褐色礫混砂質土 (10Y R5/6)
5. 灰黄色粘砂質土 (10Y R4/2)
6. 黒褐色礫混粘砂質土 (10Y R3/2)
7. 暗褐色礫混粘砂質土 (10Y R3/3)
8. にぶい黄褐色礫混砂質土 (10Y R5/3)
9. にぶい黄褐色礫混砂質土 (10Y R5/4)

第3図 土塁状隆起試掘トレンチ断面図



- | | |
|--------------|--------------|
| 1. 表土 | 6. 黄褐色粘質土 |
| 2. 褐色礫混粘砂質土 | 7. 明褐色砂質土 |
| 3. 暗褐色砂礫混砂質土 | 8. 暗褐色砂質土 |
| 4. 黄褐色礫混粘砂質土 | 9. 暗灰褐色礫混砂質土 |
| 5. 黄褐色礫混砂質土 | 10. 灰色粘砂質土 |



第4図 試掘第1トレンチ南壁断面図

は不明である。調査地全体においては瓦器碗の碎片が数片あるだけで、該当期の顕著な遺物は出ていない。推測の域は出ないが、平成18年度調査終了間際に集中豪雨が続いたところ、谷の保水力が限界を迎えると鉄砲水が出るのが判った。ちょうど土塁状遺構の切れたところに向かい深さ15cmほどの川状の流れができた。その結果土石が多く流され谷の下方にある道まで流れていた。この堤はこの土石流を食い止めるための砂防的な役割があったものと想定される。筏森山の西麓地域では、平野部が狭いため、広い谷部には民家が営まれているが、城谷口の谷では人家が認められない。このことは、谷の保水力がなくなると土石流が生じることを古くは知っていたことを示しているものと考えられる。

2) 試掘第1トレンチ(第2・4図)

3号墳の頂部から東方向に約65m、幅2.5mの試掘トレンチを設けた。このトレンチは後に発見される7号墳、8号墳のある斜面とは傾斜変換点を経て比較的平坦な緩斜面が広がる地域である。堆積層は腐食土層の下には、粘板岩の岩片を含む締まりの悪い砂質土および粘砂質土がほぼ水平に堆積している。6号墳の調査の結果、約1mは斜面からの流入土であることがわかった。出土遺物はまったく存在しなかった。

3) 試掘第2トレンチ(第2図)

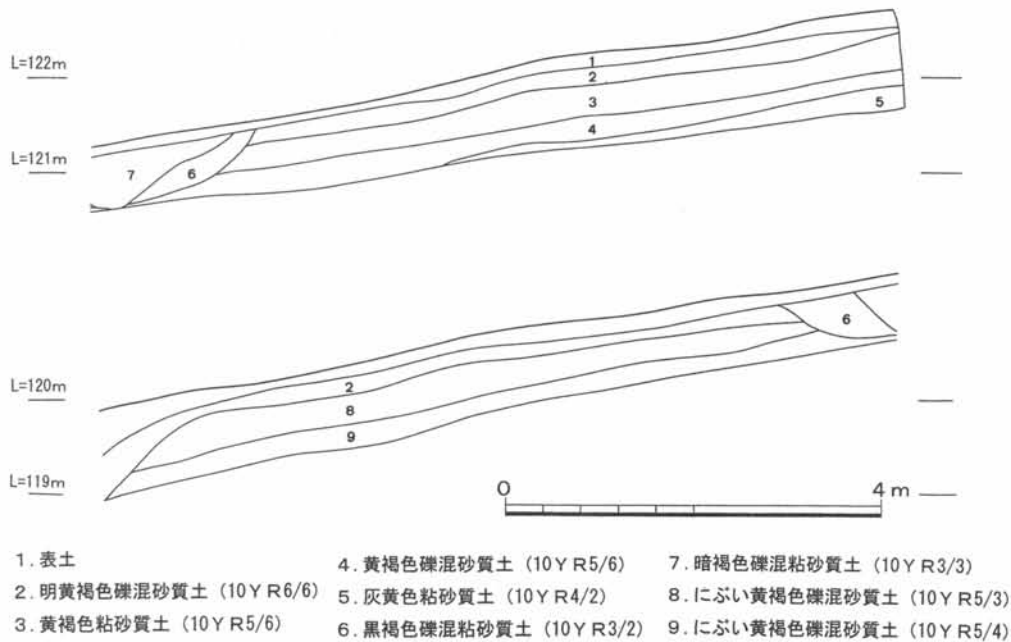
平坦地の遺構確認のために設けた調査地である。このトレンチでも平坦地を十字に切るように設定した。その結果こぶし大から人頭大の礫が斜めに面を成して並ぶ状況が観察できた。

4) 試掘第3トレンチ(第2・14図)

第1トレンチと直行するように南に伸び途中で十字に分かれる調査区である。これは地形で見られる平坦面が、中世城館の施設の可能性を確認するためのものであった。しかしながら、現地在住の方に聞き取りをすると、「この部分にはかつて砥石掘削のための作業場があったと聞いている。」と言う情報を得た。それを裏付けるように重機掘削中にはおびただしい数の粘板岩片が出土し起伏のある旧地形の谷部を埋めていた。これらの粘板岩には、金属による鑿跡や鋸の跡が残されていた。こうしたものの中には磨製石器に利用できる黒色の粘板岩が多数含まれていた。この調査の結果、6号墳の北側の葺石と周溝とともに、全長94cm(第16図3)の鉄剣1本が出土した。重機によって樹木の根を起こしながらの試掘調査であったため、鉄剣は原位置を失ったが、幸いにも刀のあった部分に錆が残り位置を復原することができた。刀の切先方向については重機の力の入り方と鉄剣の曲がり方から復原したもので信憑性は低い。

5) 試掘第4トレンチ(第2・5図)

3号墳確認調査中に弥生時代後期の土器片が出土したため、集落跡等の存在を想定し、3号墳に近い場所で第1トレンチから直行するように南に向け、谷の底部の平坦面に至る傾斜変換点まで掘削した。その結果、第1トレンチと同様にしまりの悪い粘板岩片を含む堆積層が確認できた第5図に見られる6・7層の落ち込み状の堆積は、遺物もなく風倒木の痕跡と考えられる。このトレンチにおいても出土遺物は1点も確認できなかった。この平坦面は3号墳を作るときに土取りされ形成されたものと考えられる。このことは3号墳の土層断面に現れた旧表土の位置から確



第5図 試掘第4トレンチ西壁断面図

認することができる。

6) 試掘第5トレンチ(第2・10図)

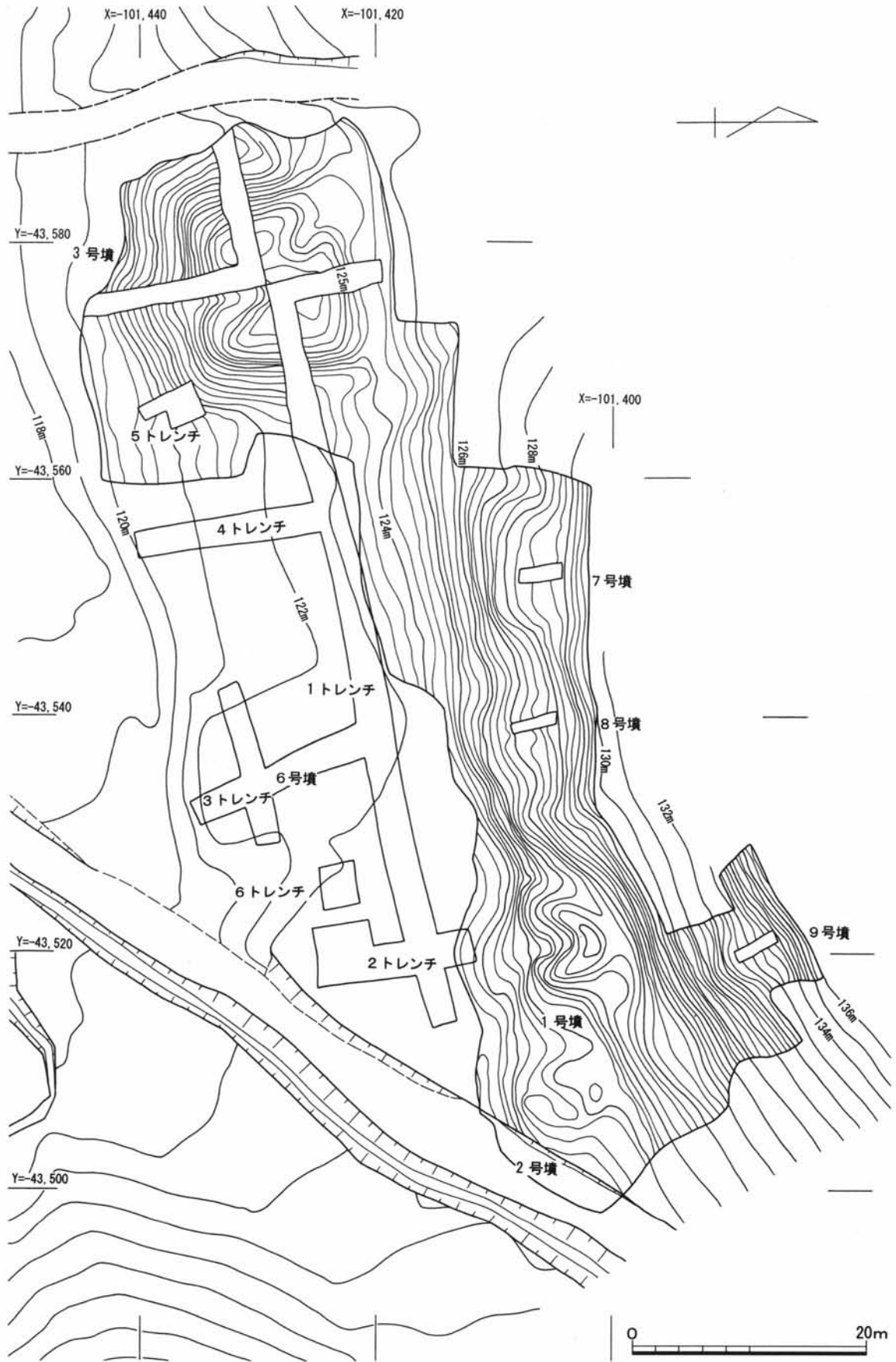
3号墳調査の初期段階に弥生時代後期の土器しか発見されておらず、葺石を持っていたことから、弥生墳墓の可能性も指摘された。四隅突出墳などの可能性を確認するため南東隅にこのトレンチを設定したが突出部や葺石は確認できなかった。

7) 試掘第6トレンチ(第2図)

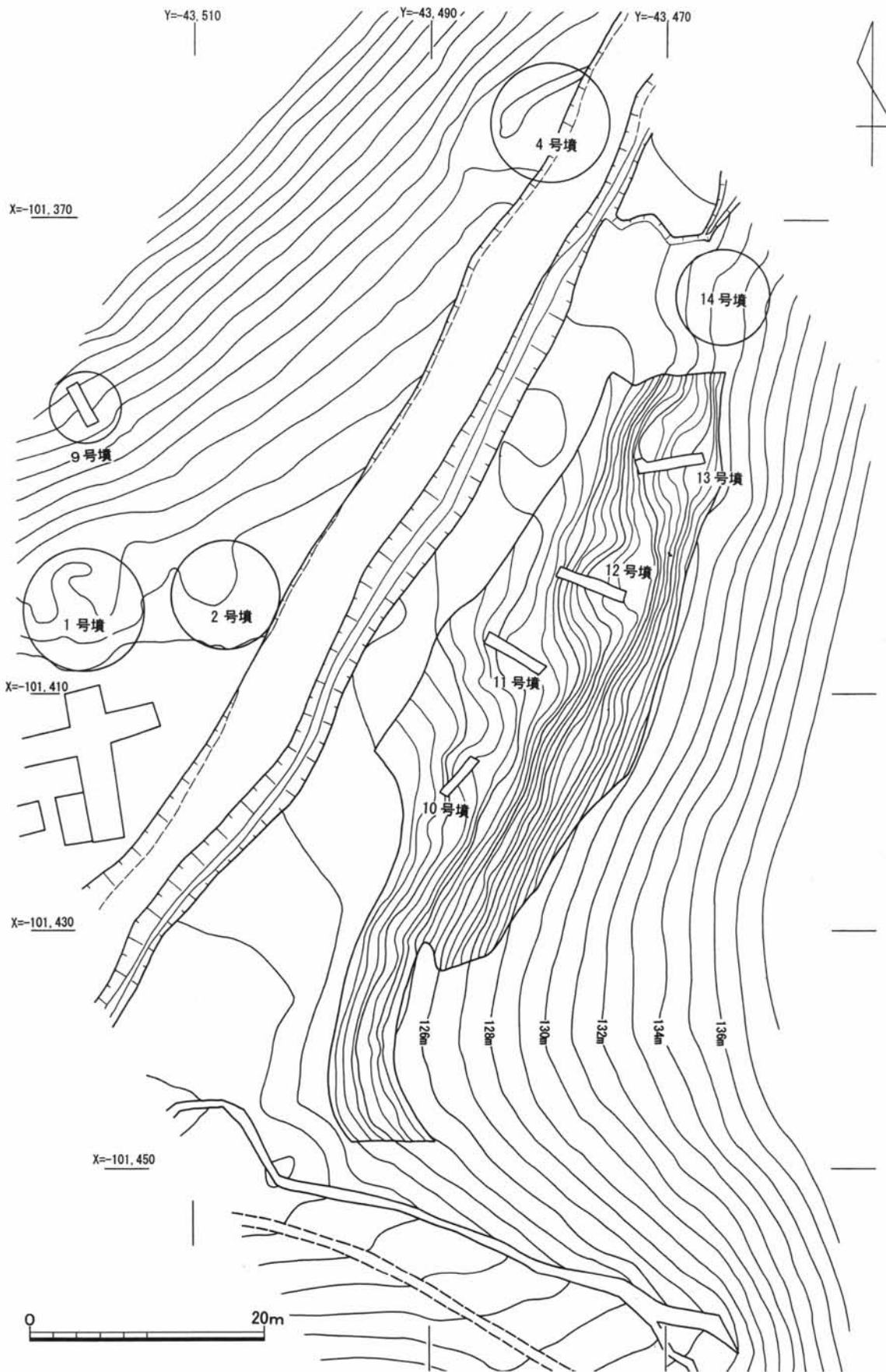
試掘第2トレンチで検出した石が散漫で、並びが悪かったため性格を確かめる目的で、第6トレンチを近接して設けた。その結果粘板岩の廃材堆積が非常に厚く、小面積で性格を明らかにするのが困難であった。18年度の調査で再度確認した結果、1号墳が壊されたときの石材が斜面に堆積していたことがわかった。それを示す特徴は大形のチャート石室に用いているのは1号墳だけであるが、その石材と同様の大きさのチャート礫が斜面に堆積していることが確認できた。

4. 城谷口古墳群の調査

城谷口古墳群は現在16基が確認されているほか、古墳の可能性のあるテラス状地形が少なくとも4ヶ所以上ある。谷の入口には、3号墳とその斜面後方にはほぼ同規模の5号墳が存在している。また、現林道を挟んで3号墳西側には、方墳の可能性のある地形が残されている。また3号墳対岸の斜面には3号墳と同等またはそれ以上の規模を持つ方墳が存在している。この古墳の斜面上の尾根には、10基程度の方墳を主とする古墳が点在し、筏森山古墳群の一部となる。谷からの比高差が大きく、尾根に近いことから、尾根上の古墳群に含める考え方もある。3号墳の東側には、周溝をもつ6号墳があり、5号墳東側には7号墳が存在する。方墳はすべて谷の開口部付



第6図 城谷口南向き斜面地形測量図



第7図 城谷口北西向き斜面地形測量図

近に点在している。調査は3・6号墳と7号墳の一部について行った。

石室墳は谷を挟んで南向きの斜面に1・2・4・8・9・15号墳、対岸に10～14号墳が築かれている。このうち調査区に含まれる1・2・8～12号墳の調査と、13号墳の墳丘調査を実施した。谷奥部に築かれた4号墳は墳丘の3分の1程度が現有の林道で破壊されており、その破壊された部分から石室墳であることがわかる。この古墳の周溝部にあたる斜面部分での整形の規模が大きいことや、他の古墳とはなれて造られていることから城谷口古墳群における石室墳築造期の最も古い年代があたえられると考えたい。4号墳について2号墳、1号墳が築かれ、次に対岸の10～14号墳が築かれる。南向きの斜面に移り1・2号墳よりも標高の高い場所に8・9号墳が造られる。15号墳については古墳の規模と立地から8・9号墳と同時期のものと考えられる。

2号墳、11号墳、12号墳の立地する斜面上方にはテラス状の平坦面が認められる。2号墳上方のテラスは開発区域内であったため調査を実施した。その結果、表土層直下から須恵器の甕の体部が出土したが遺構は見つからなかった。以下、中期古墳から古墳番号順に説明を加えていきたい。

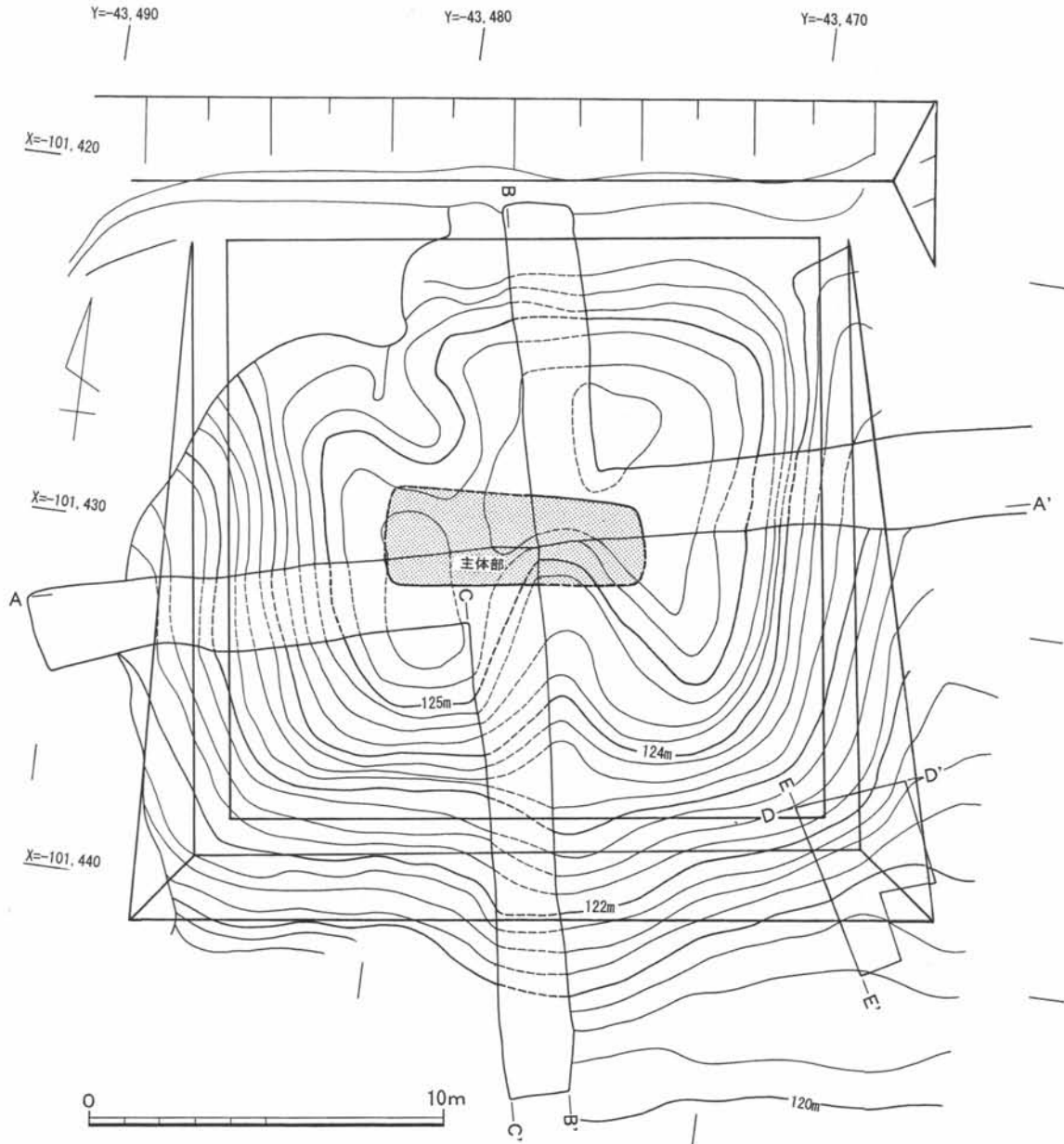
(1) 3号墳

1) 墳丘(第8～11)

3号墳は開発前の八木町・京都府教育委員会の現地立会によって大形の方墳の可能性のある方墳土壇として確認された。この古墳は植林されずに残されており、調査前は笹や雑草がうっそうと茂り、分布調査で確認できなかったものと考えられる。樹木伐採の結果、南側では約5mと高く、1辺20m以上の規模の方墳の可能性が指摘できた。墳頂部では南側と北西側に盗掘坑状の掘り込みと土を掻き出した高まりが地表で確認することができた。墳頂部中央を基点に方墳の軸にあわせて東西南北に十字の試掘トレンチを設けた。城谷口古墳群では例外なく天井石を持ち去ることを目的に石室墳が掘削されている。こうしたことから、3号墳は当初石室墳と考え、南側のトレンチを深く掘り石室の検出に努めた。しかしながら石室は確認できなかったため墳頂部の掘削を行い、木棺直葬の主体部を検出した。

墳丘部分では、4方向すべてに葺石が確認できた。西側と北側の残存状態が比較的よく基底石のみがやや大形のもので直線状にそろえられていた。南面の試掘トレンチの範囲では盗掘によって多くが失われているが残存している部分では、大形の基底石が用いられていた状況を窺える。東側の葺石は崩落が激しく、他の葺石のような基底石が明確ではなかったが、1石目が直線状に並んでいた。

南面は葺石から平坦部がありまた斜面へと移行していく。この斜面中から弥生時代後期の竪穴式住居跡を検出した。墳丘構造は旧地形を利用し扇形になる1段目の上に正方形に近い葺石を持つ2段目がのりという2段築成の古墳であることがわかった。墳丘の規模は南面下段で約23mで、2段目の東西方向は17m、南北方向は16.5mである。第8図は墳丘の復原線を入れたものである。調査対象地外であったため確認調査は行っていないが、北側の斜面には傾斜変換点が存在することから、堀状の切り離しがあったと考えられる。また、その肩部の東には屈曲部があり、図化し

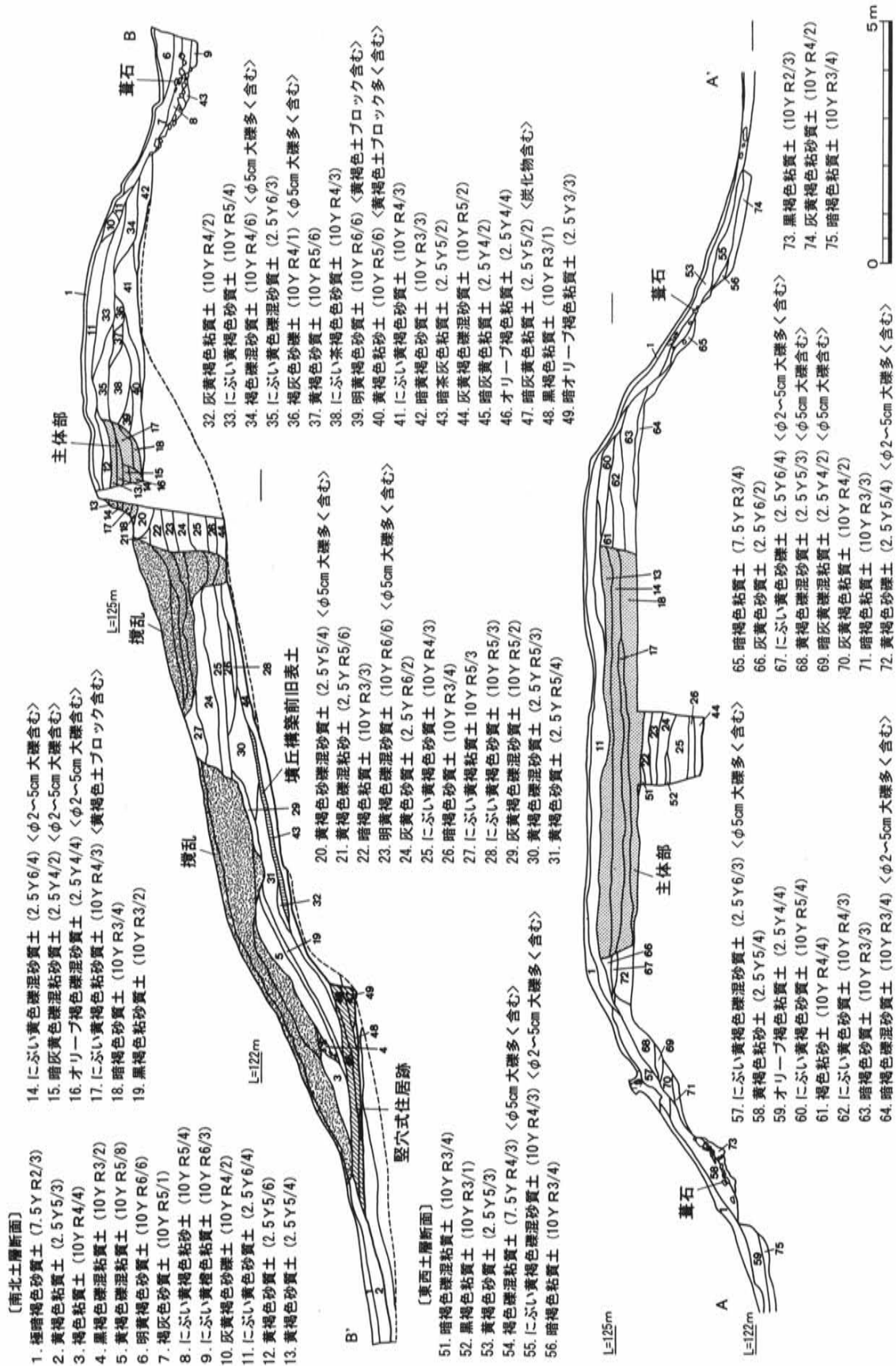


第8図 3号墳地形測量図および墳丘測量図

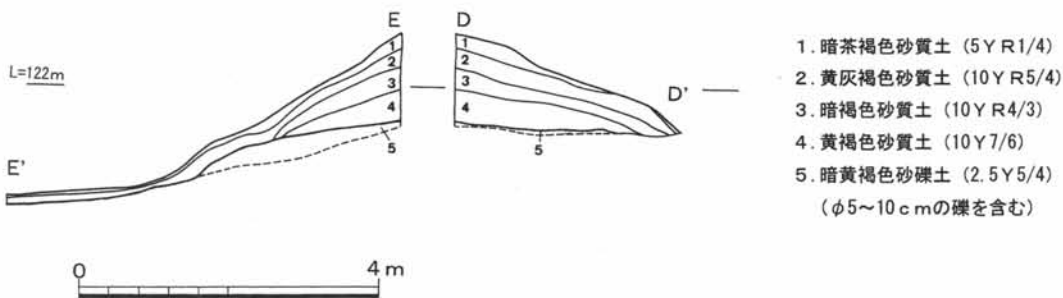
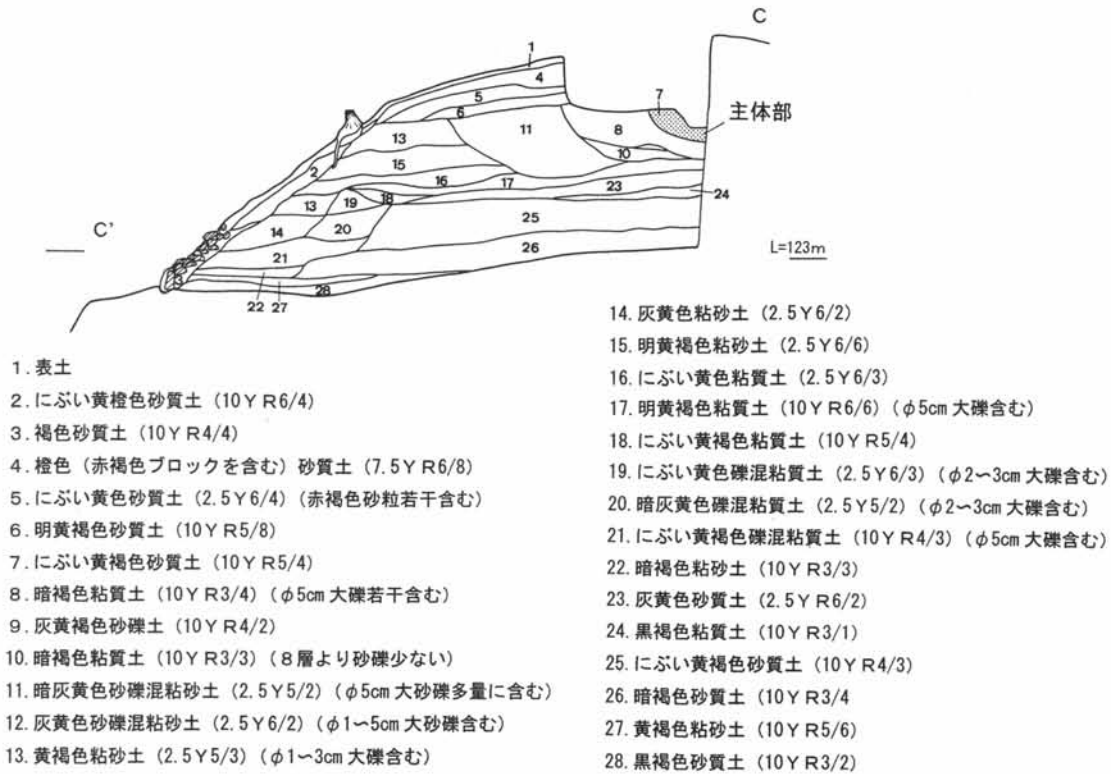
たように鍵状になっていたと考えられる。西側については現在利用されている林道が存在するため確認することができなかった。同じ理由で調査できなかった墳丘西面の1段目は平野部に向いているため図化したように対象形にはならず南面と同じように作られていた可能性もある。

墳丘の構築方法は、1段目は地山整形を主体としているが、2段目はすべて盛土である。城谷口地域の土壌が粘板岩の風化粘土や礫片であるため高い墳丘を造るには不向きであると考えられる、墳丘は第9図の13・15・16層に見られるような比較的良質な土を墳頂部周辺に盛り、その中にやや大きな岩片を含む粗い土(11層)を充填していることがわかる。調査当時、墳丘内の石室を確認するため、ピンポールを刺し石の確認を行ったところ、片手で刺さる状態であった。葺石の角度が急勾配で、上部が大半消滅していることは多くの部分が崩落したことを示している。

2) 主体部(第8図)



第9図 3号墳墳丘断面図



第10図 3号墳墳丘断面図・試掘第5トレンチ断面図

前述したように木棺直葬である。主体部埋土もやはりしまりの悪い土で、墓壙の確認が平面的には困難であったため断ち割りを設け規模を確認した。全長約7.4m、東短辺約3m、西短辺約2.5mに復原できる。確認調査の途中、保存が決定したため主体部内部の調査は行わなかった。

墳丘は、葺石部分を土納で保護しその他の部分を掘削土で埋め戻し現状保存を行った。

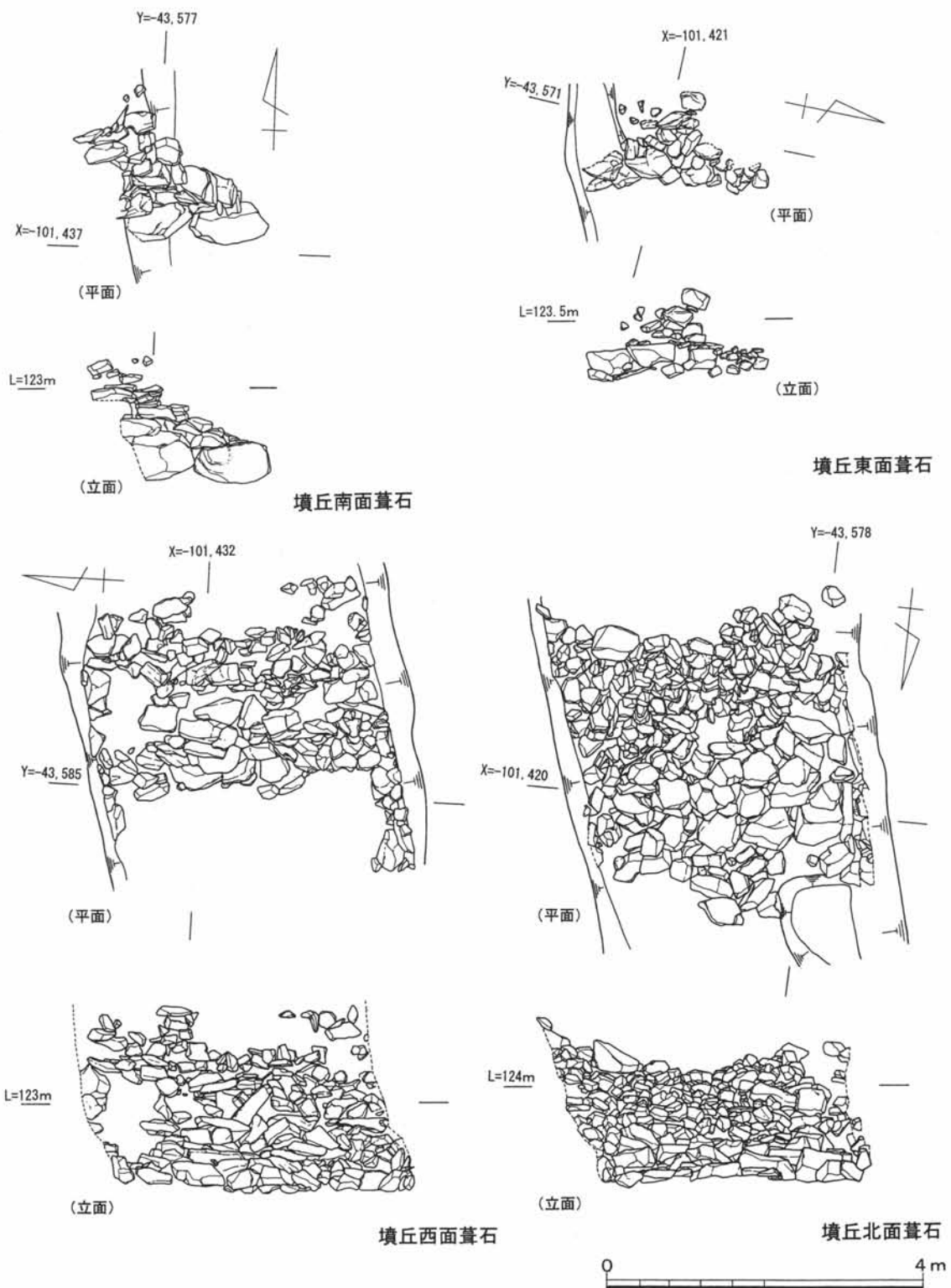
3) 出土遺物(第12図)

a. 土器

第12図は弥生時代後期後葉の土器である。図化したものはすべて墳丘南面の住居跡から出土したものである。1は受け口状口縁を持つ甕の口縁部である。口縁内外面はナデ、体部外面はタタキ、内面はナデである。2・3は甕の底部である。外面はタタキ、内面がナデである。4は高杯の脚部で内外面ナデ調整である。

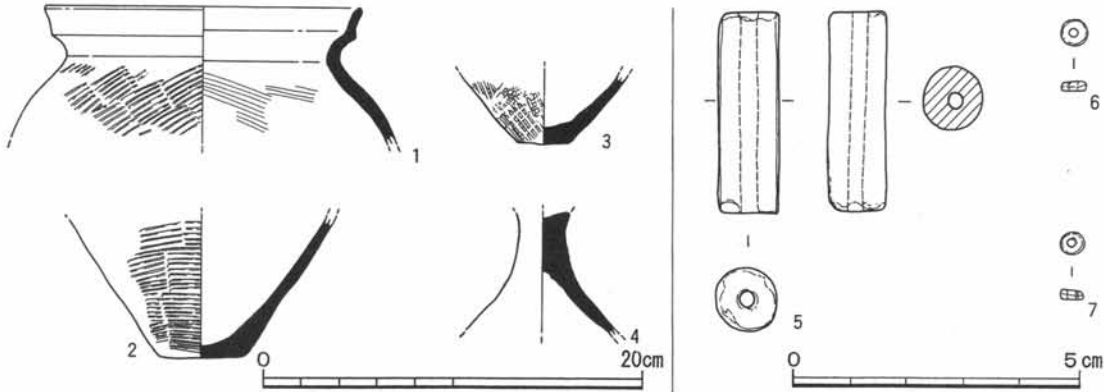
b. 玉類

古墳に関連する遺物は断ち割り部分から淡い緑色を呈した碧玉製の管玉(5)1点と掘削土洗浄に



第11図 3号墳葺石実測図

よって検出した滑石製白玉2点(6・7)である。いずれも主体部にあたる部分からの出土である。5は片面穿孔で小口面には整形時の剥離痕が完全に磨かれずに残存している。長さ3.4cm、直径1.1cmを測る。白玉は全体的にいていねいに研磨が施されている。これらの特徴から5世紀前半の古墳と推定される。



第12図 3号墳出土遺物実測図

(2) 6号墳

1) 墳丘(第13・14図)

試掘第2トレンチで確認した4方に葺石を持つ古墳時代中期の古墳である。墳形は南北約9.5m、東西約12.5mの規模を持つ長方形墳である。東・西・北側には約4mの周溝が残されていた。南面については墳頂部南辺が傾斜変換点になり古墳の斜面の角度で谷部の平坦面まで斜面が続く。南面の葺石は他の辺のものと同様高さがあり、それより下には続かない。これらのことから本来は南側にも溝が続いていた可能性も否定できない。葺石は拳大から人頭大までの礫が用いられていたが、北面には斜面上方から滑り落ちてきたと考えられる長さ40cmを超える礫も存在していた。葺石の検出中には石の間から器壁の薄い土師器片が出土している。周溝部分からは5世紀代の須恵器や6世紀末の須恵器が出土しており、斜面ではあるが6世紀末までは周溝が存在していたことがわかった。溝内に崩落していた葺石の数は高い墳丘を持ち、全面に葺石があったと考えられるほどは多く検出できなかった。墳丘は比較的良かったと想定できる。墳丘頂部や斜面で見られる土坑状の攪乱は、近世以降のもので中には砥石の未成品が数多く含まれていた。

2) 主体部(第13図)

主体部ははっきりと断定できるものは1か所である。東側が試掘トレンチと攪乱で規模がはっきりしないが、木棺直葬の主体部である。木棺部の幅約0.8m、残存長約3m、墓壙の幅約1.6m、残存長約4.6mを測る。

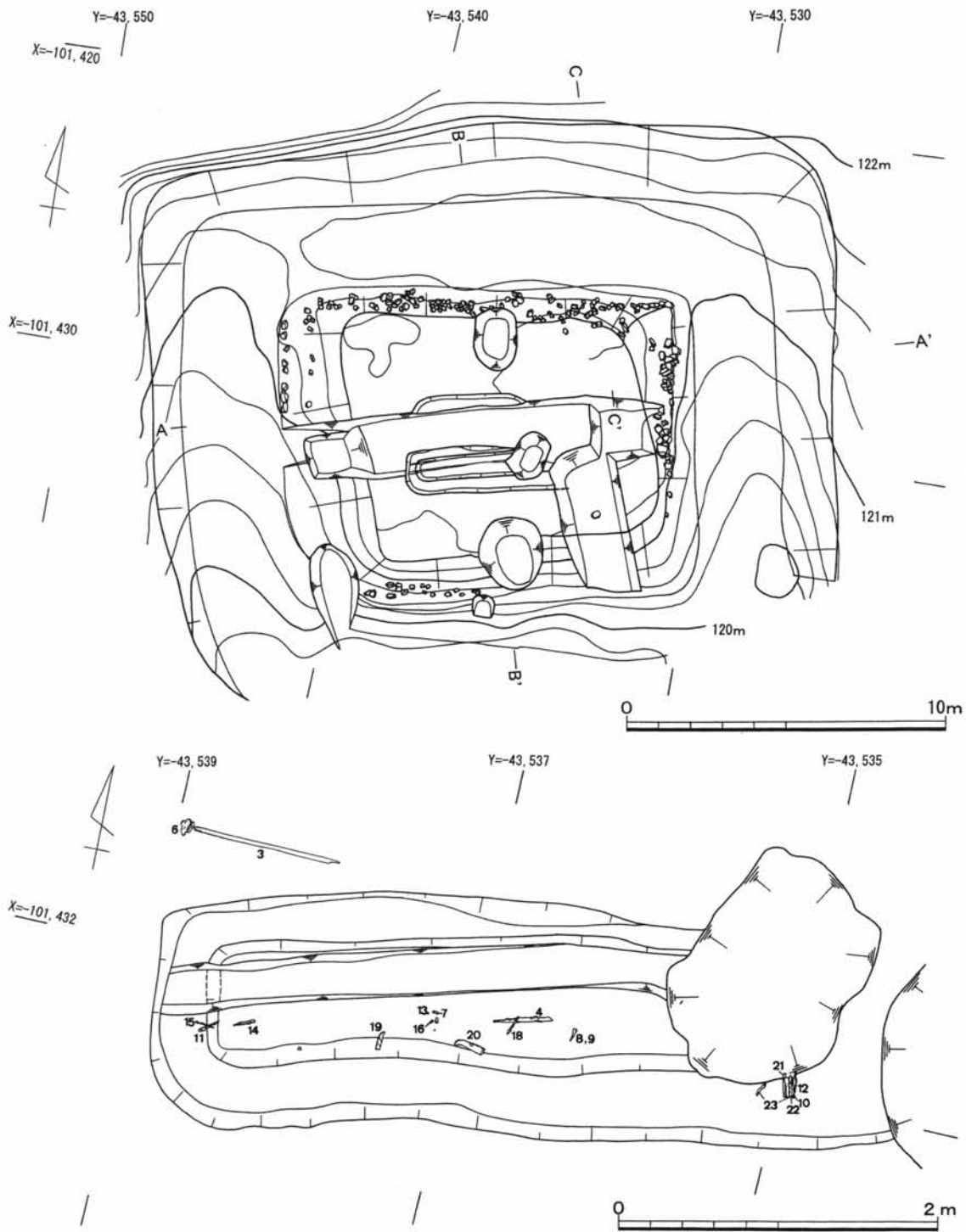
試掘第3トレンチ掘削時に、鉄剣と鉄刀子を検出した。その位置は第1主体部の北側で墓壙内からは外れる。しかし、その検出位置は墳頂部西側に偏っており、墓壙の推定が難しい。

もう1つは、試掘トレンチ断面で確認した底部が「U」字状になる土壌の痕跡である。第14図の東西方向の断面の22番の土層が埋土である。南側半分が試掘トレンチによりなくなるが、復原すると割竹形木棺あったようにも見られるが、出土遺物はまったくなかった。

3) 出土遺物

a. 土器(第15図)

第15図1は東側周溝の底部付近から出土した須恵器の礎である。口縁部は欠損しているが特徴から5世紀後半のものと考えられる。2は7世紀の須恵器の杯身である。



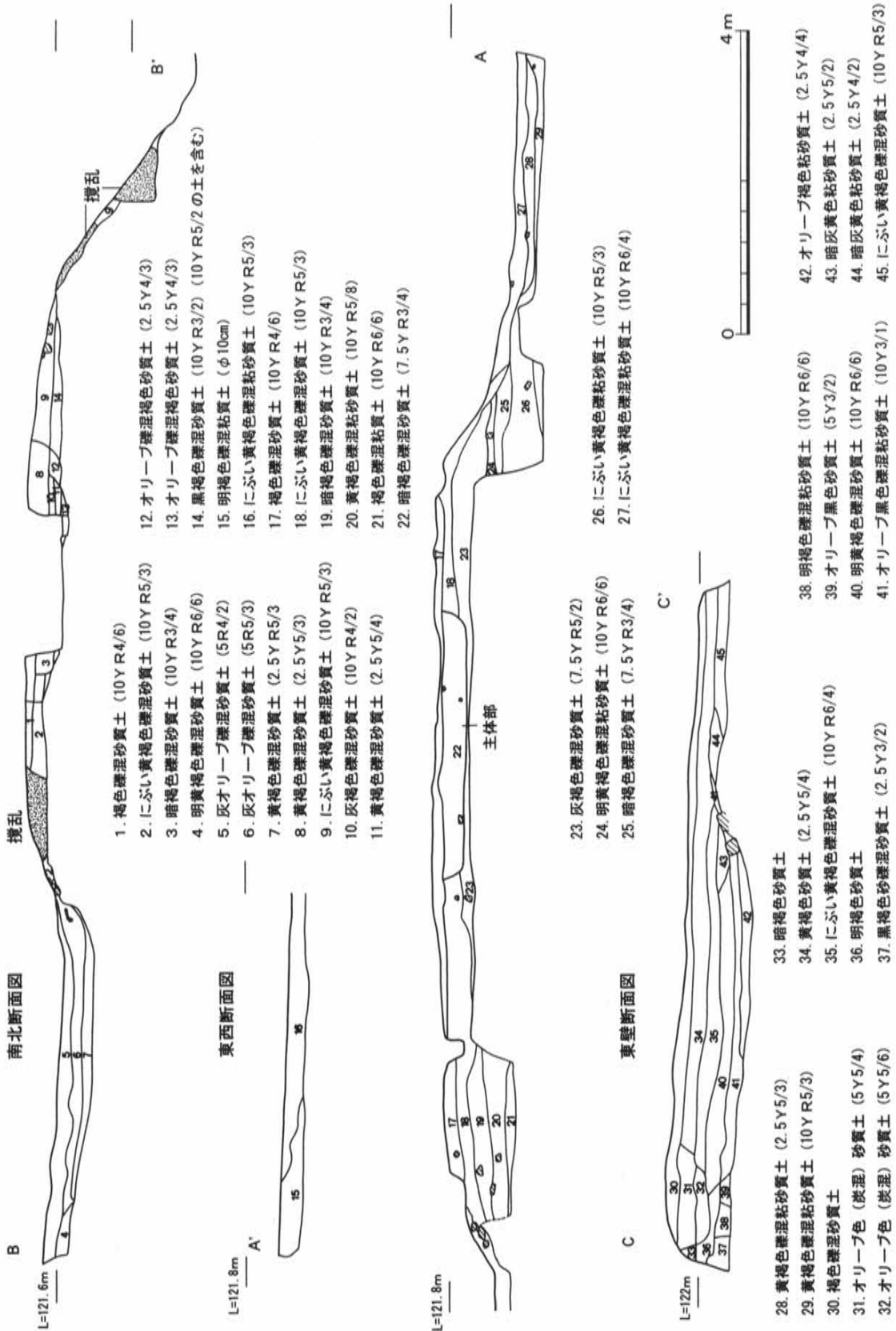
第13図 6号墳墳丘・第1主体部実測図

b. 鉄器(第16・17図)

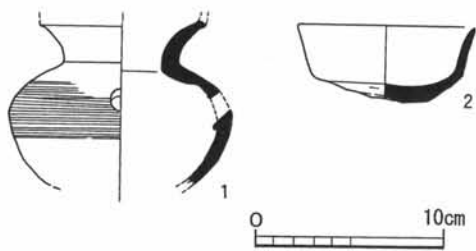
鉄器は試掘調査時出土した鉄剣第16図3・6以外はすべて主体部1から出土した。出土位置は攪乱によって破壊された東側長辺北部の農具類の一群と、長辺中央部、南部に大別される。

①木棺東側長辺北部：刀子3、鉄鏃1、鏃1、鉞2が出土している。

刀子(8~10) 8は関部で、9は茎の一部である。残存長は6.2cmだが、現状では接合しないがその出土状況から同一個体と思われる。10は差込式であるが柄は遺存していない。



第14図 6号墳墳丘断面図・試掘第3トレンチ断面図



第15図 6号墳出土土器実測図

身部の断面形は長方形である。22は刃部の平面形は三角形、刃部には峰があり断面形は台形である。身部の断面形は長方形である。

鉄鑿(23) 刃部にかけてひらく平鑿で、角のない撫闕がつくもので全長23cmの完形品である。

②木棺東側中部：鉄刀1、鉄鏃3、刀子1、鉄鎌2、不明鉄器1が出土している。

鉄刀(4) 完形の状態出土した。闕は刃部側にのみ付き、茎には目釘穴がある。刃部両面および峯部に刀の長軸と同じ方向で木質の繊維が残ることから鞘があったものと考えられる。

鉄刀子(7) 刀身の切先のみが出土。

鉄鏃(13・16・18) 13の身部断面は三角形で頸部断面および茎部断面は長方形となる。頸部の闕は台形闕である。茎部に木質が残るが、矢柄構造は不明である。16・18は茎部のみで形態は不明である。

鉄鎌(19・20) 大形、小形各1点ずつ出土していて、ともに曲刃鎌である。19は小形で、基部には木質が残っており、切先には布片が付着している。19・20ともに折り返しは基部全体を直角に折り返すもので、その着柄角度はほぼ90°である。20は刃の切先が欠けているがほぼ完形品である。刃を手前、折り返しを右に向けたとき、折り返しが上を向く甲技法(都出1967)に属する。

不明鉄器(17) 碎片であるため器種同定不能である。

③木棺東側南部：刀子1、鉄鏃3が出土している(不確定含む)。

鉄刀子(5) 切先のみ遺存である。

鉄鏃(11・14・15) 長頸鏃の一群のうち、11・15の身部断面は三角形で頸部断面および茎部断面は長方形となる。頸部の闕は台形闕である。11の茎部は繊維状のものをまいた後に矢柄の木質で包み込みその上から樹皮を横方向に巻いて仕上げています。14は刃部幅が身部幅より広く、平面形は柳葉形である。刃部には峰があると思われ、断面形は三角形を呈する。身部の断面形は長方形で、茎部に樹皮巻きが遺存している。

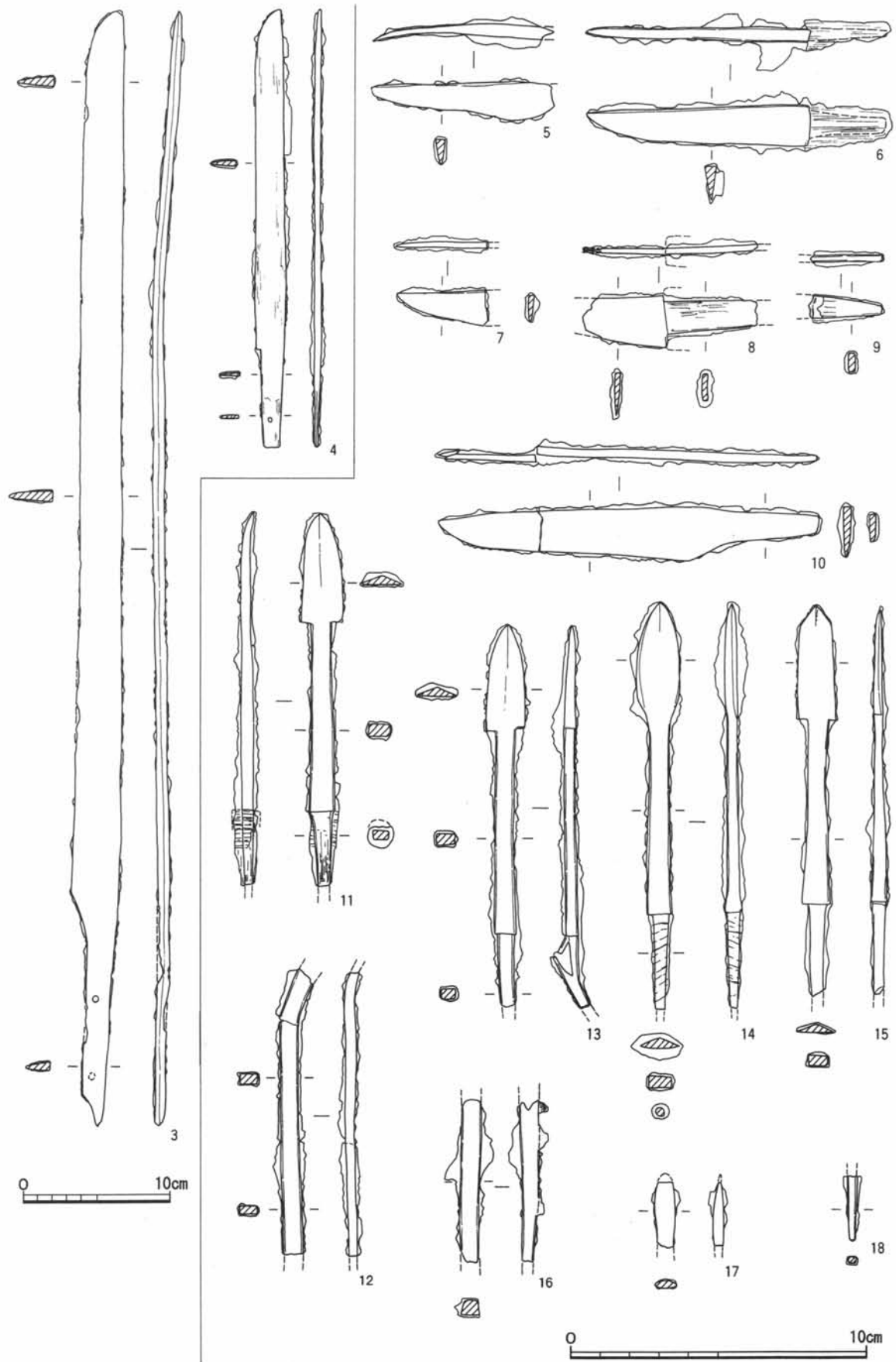
④第1主体部以外

鉄刀(3) 長さ94cmの大形の刀で、目釘穴は2か所である。

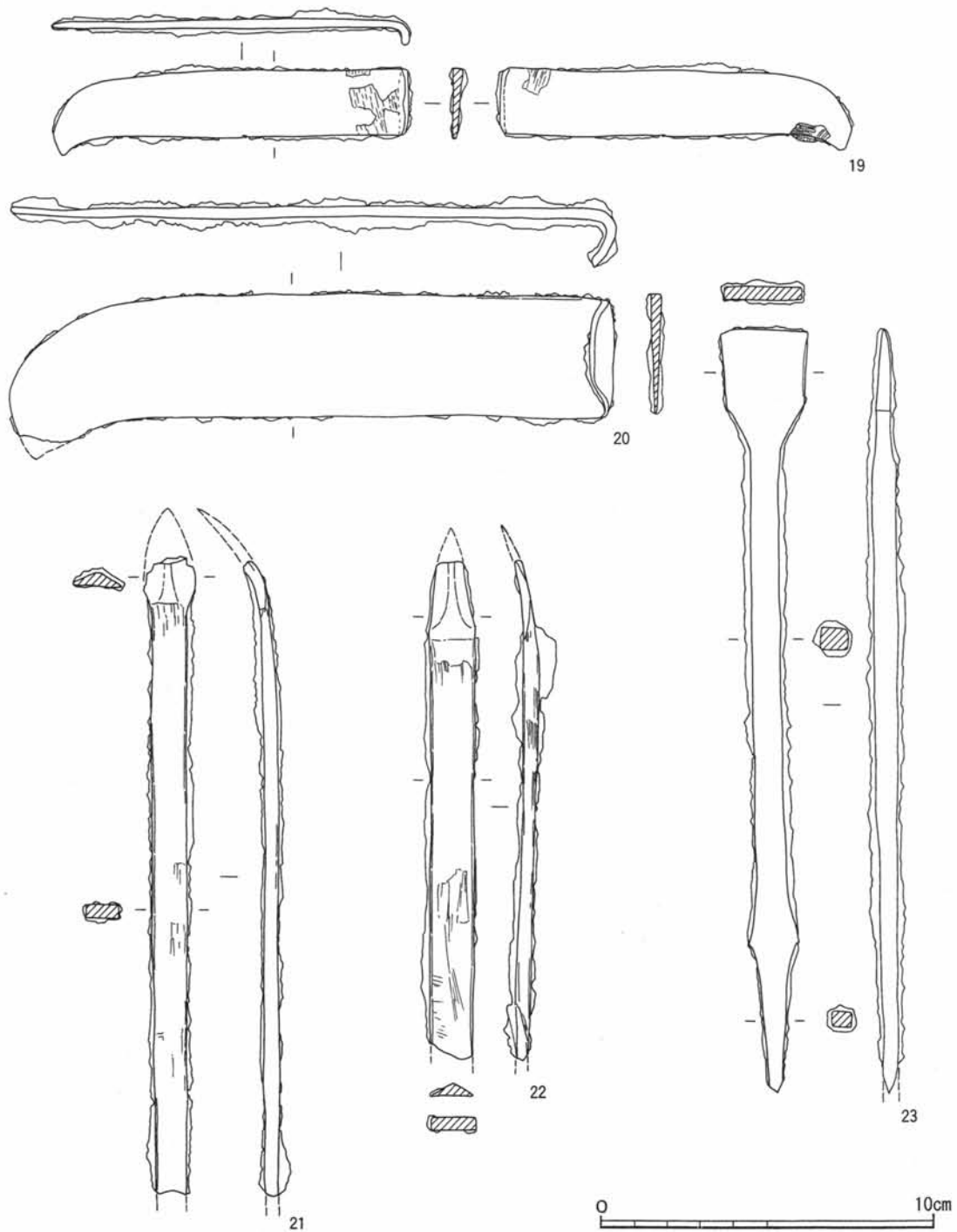
鉄刀子(6) 小形のもので完形品である。身部は切先に向けて幅が徐々に狭くなる。闕は両闕、茎部には全体に木質が残っている。

c. 玉

白玉(24~222) 出土した白玉は滑石製で、ほとんどがていねいに研磨されており、5世紀代の



第16図 6号墳出土鉄器実測図(1)



第17図 6号墳出土鉄器実測図(2)

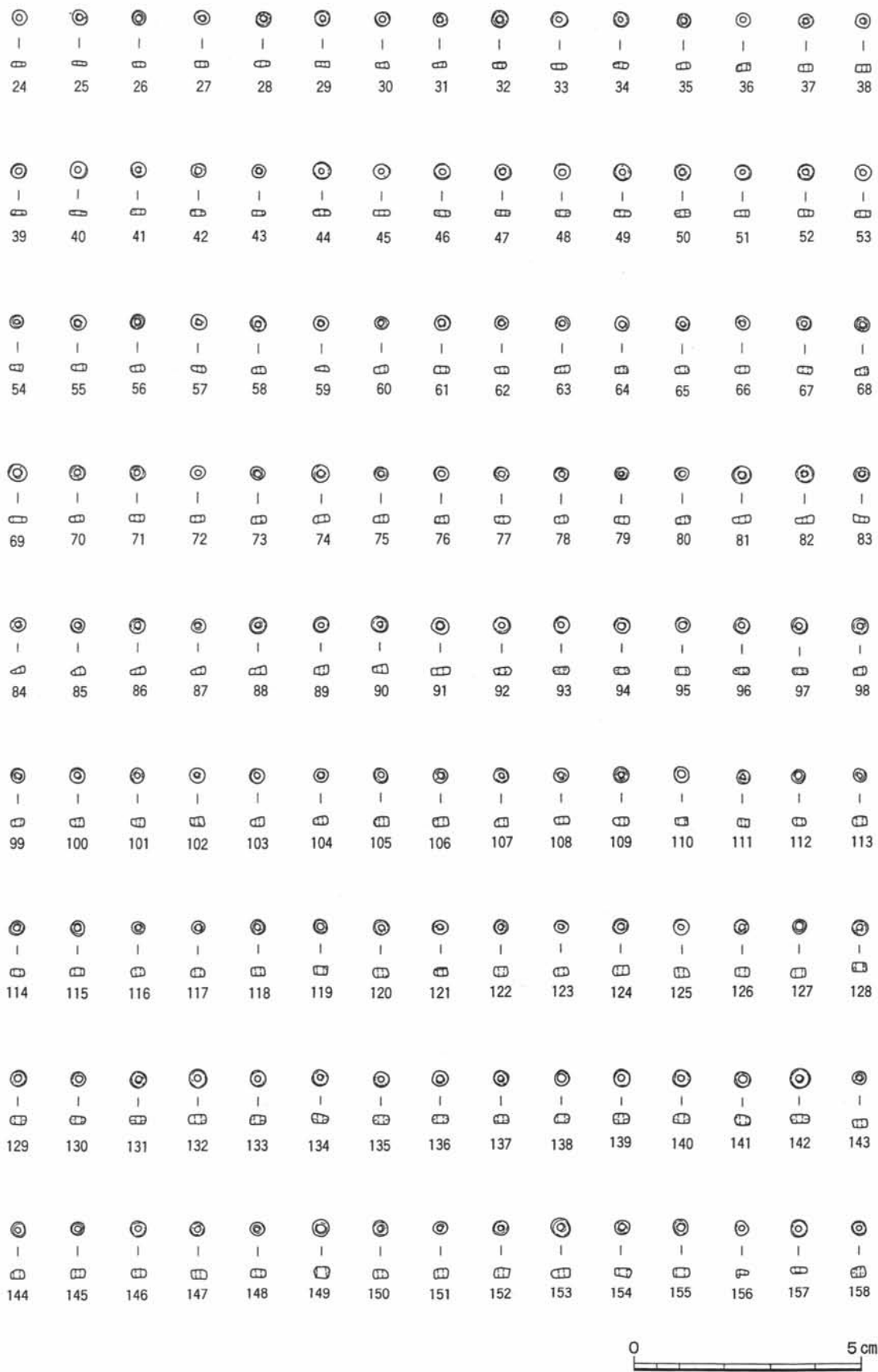
遺物と考えられる。65点は原位置を記載して取り上げることができたが、残りは掘削土の洗浄によって発見したものである。白玉のすべては第1主体部検出のものである。

ガラス玉(223・224) いずれも青色を呈するガラス玉である。

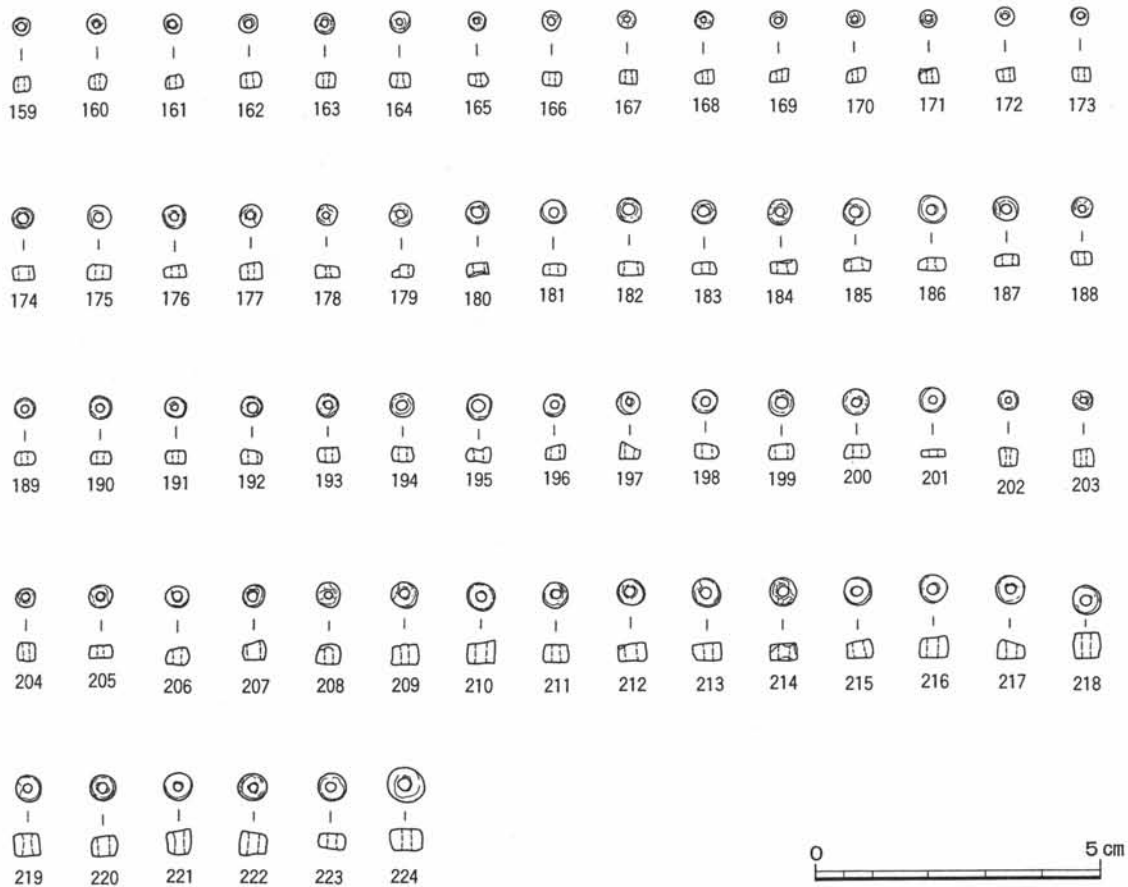
(3) 7号墳

1) 墳丘(第20図)

平成17年度 of 古墳確認調査で検出した古墳である。主体部の一部を確認したことから、工事計



第18図 6号墳出土白玉実測図(1)



第19図 6号墳出土白玉実測図(2)

画ではこれを開発対象地から外し保存されることとなった。18年度は南側斜面および東側斜面の調査を主に実施した。調査の結果、南側、東側に葺石を確認することができた。南側葺石の最下段は高がそろっており、それを基準に葺石が施されたことが判る。東側の葺石は南に比べ積み方が乱れている印象を受ける。墳形は墳頂部が長方形であるが、斜面を利用して墳丘を作っており平面形は南へ向かって開く台形状を呈する。この形態は3号墳の1段目の形態と同じであり、同様の形態で葺石を持つ事例としては同じ南丹市の徳雲寺北古墳が挙げられる。復原できる墳丘の規模は南面の1辺が約13m、南面からの奥行き約6m、北側の幅約8mを測る。古墳北側は山の斜面を削り形成されているが、明確な溝は回らない。試掘の結果北側の斜面は粘板岩の岩盤であることがわかった。この墳丘も多くは粘板岩の岩片を含む締りのない土で構成されている。

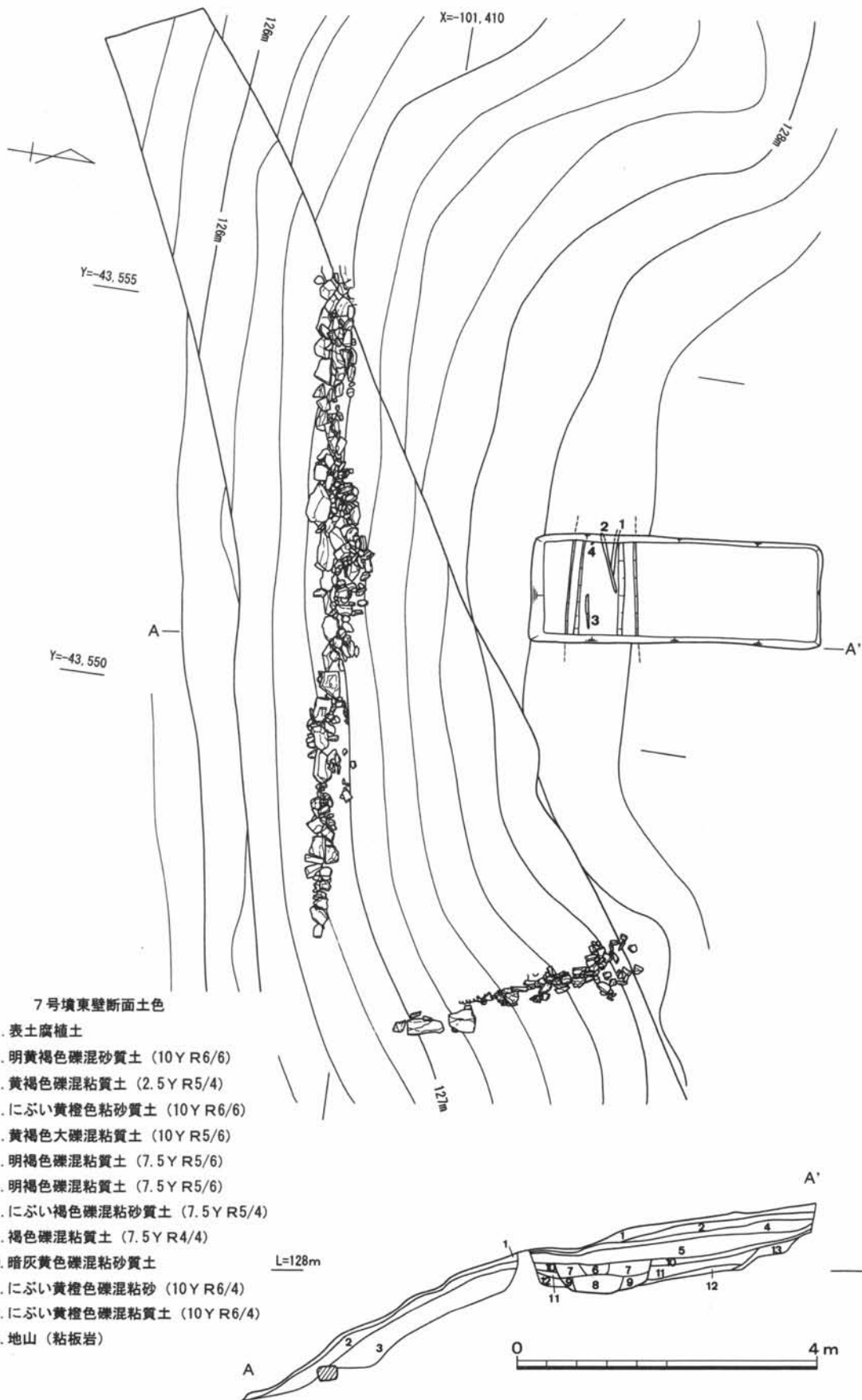
2) 主体部(第20図)

主体部は平成17年度の試掘調査トレンチと直行して検出された。主体部は長方形を呈する墳頂部の長軸と平行する木棺直葬である。長さは確定できないが、幅は約1mを測る。刀剣類の切先方向から西頭位と考えられる。

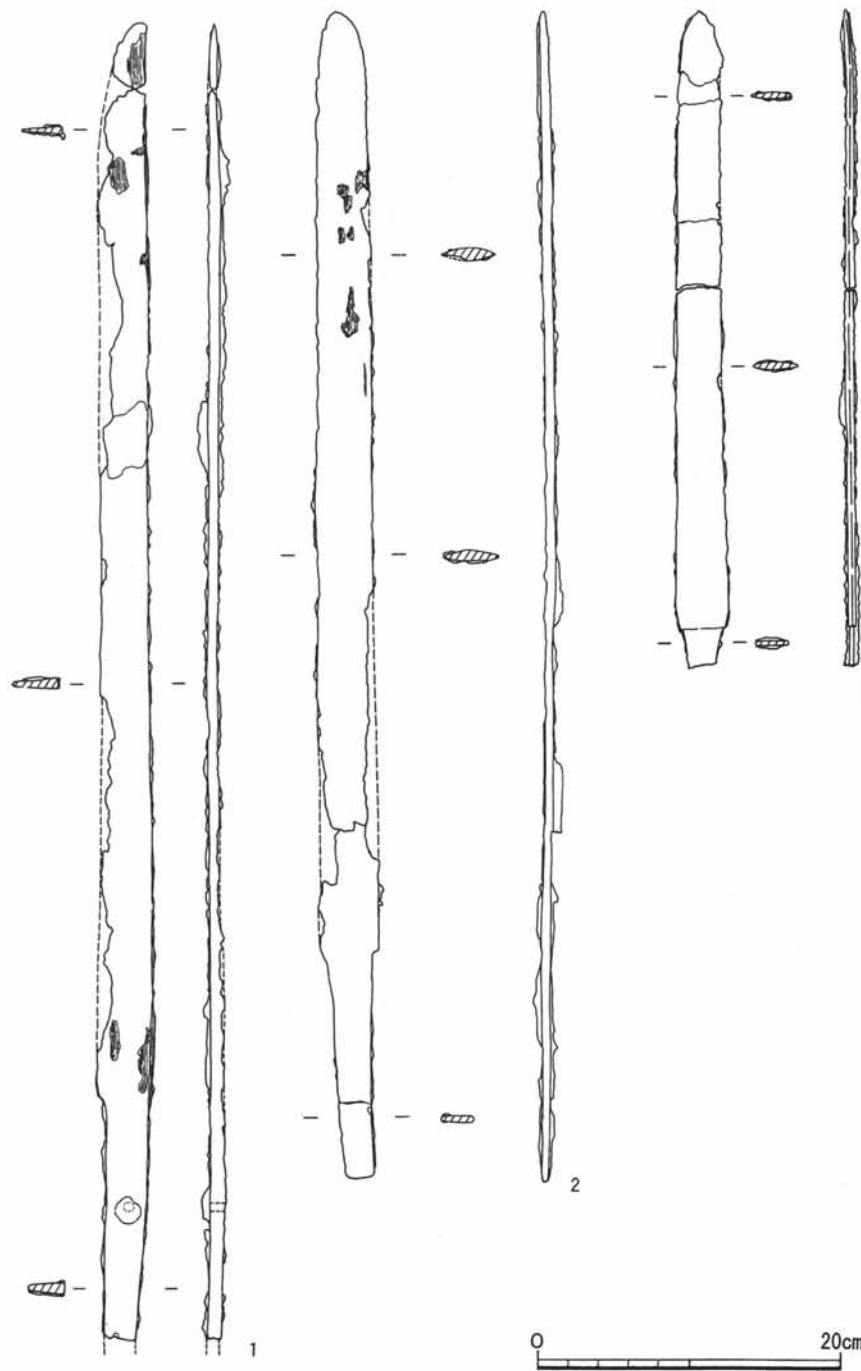
3) 出土遺物

a. 鉄器(第21図)

鉄刀(1) 試掘トレンチ内で検出した主体部北長側辺から切先を東に向け出土した直刀である。劣化が著しく、1/3程度は西壁内であったが、一部拡張し鉄器のみ取りあげた。



第20図 7号墳墳丘平面・断面実測図



第21図 7号墳出土鉄器実測図

鉄剣(2・3) 2の剣もまた主体部北長側辺から切先を東に向け出土した。1と2は交差していた。3の剣は主体部南長側辺から切先を東に向け出土した。

b. 玉類(第22図)

管玉(4) 淡緑色を呈する軟質の石材を用いた管玉である。

白玉(5~65) すべて灰色の滑石を用いた白玉である。白玉はすべて主体部埋土の洗浄によって発見された。

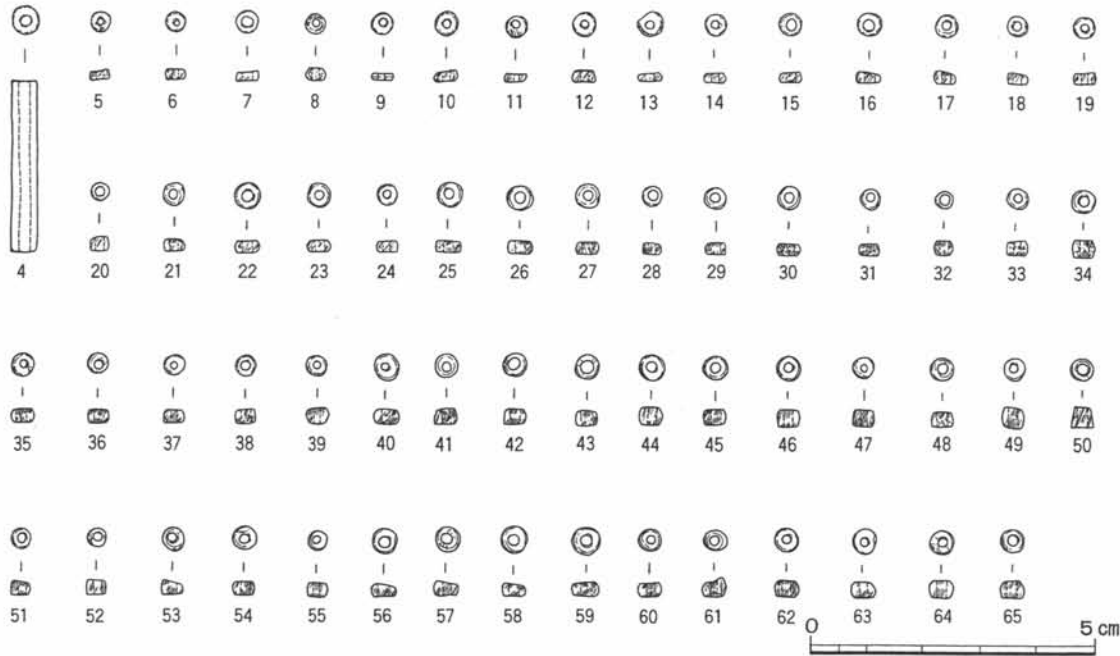
(4) 1号墳

1) 墳丘(第23・24図)

1号墳は、山腹の西側斜面に立地し、2号墳の西に隣接して築かれている。城谷口古墳群の横穴式石室墳のなかで、最も大きな墳丘規模を

有する。墳丘規模は、直径約12mを測る円墳で、高さは約2.5mを測る。墳丘斜面には人頭大程度の円礫あるいは垂角礫の列石が少なくとも2段以上回る。石材にはチャート・粘板岩・砂岩などがある。

墳丘は、後背丘陵を幅約20mにわたって大きく半円形に削り出し、後背地形を整形したうえで、ゆるやかな円丘状をなす造成面を確保し築成している。後背丘陵との間には、半月形状の周溝が掘削されている。墳丘の断ち割り調査によって、墳丘の約1/2が盛土によることが判明した。墳丘頂部は、調査前から、盗掘および石材の抜き取りによって大きく陥没していた。また前庭部は、



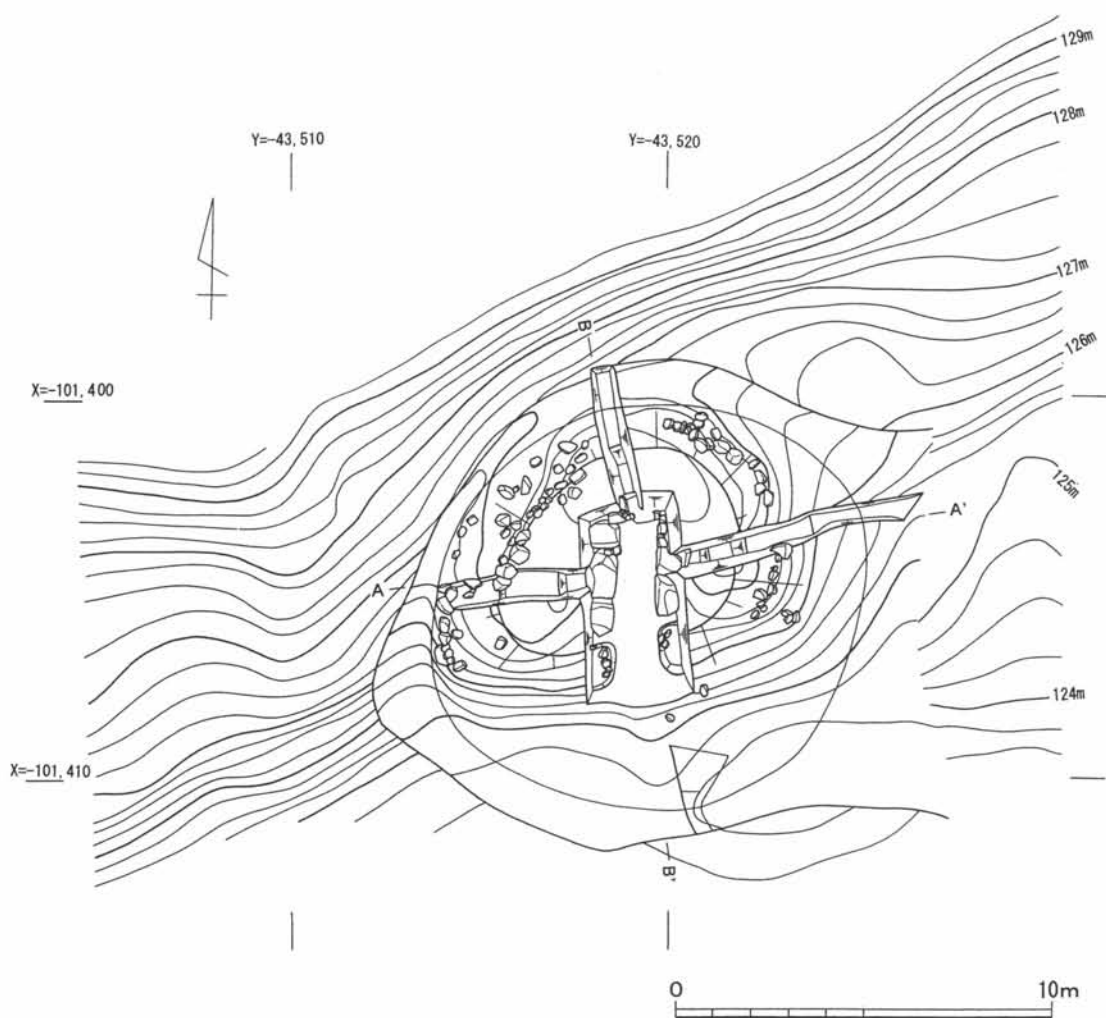
第22図 7号墳出土玉類実測図

石室の主軸に直行する方向に直線的に削り取られている。その面に対して石材抜き取り時の廃土が堆積していることから、墳丘の改変は石室解体以前と考えられる。墳丘周辺からは、2号墳との境をなす周溝を中心に須恵器が出土している。

2) 石室(第25図)

1号墳は、ほぼ南に開口する無袖式の横穴式石室である。推定全長4.1m、奥壁幅1.2mを測る。石室の主軸は、座標北を基準として $N1^{\circ}E$ をなす。石室は、削り出した地山面を約1.2m掘り込み、奥壁・側壁とも大形の基底石を据える。右側壁の基底では、3石の石材が縦位に積まれるが、奥壁側に残る2段目の石材は横位に積まれ、基底石と2段目以上の石材の積み方が異なる。左側壁も、右側壁と同様、大形で厚みのある石材を基底石として用い、遺存している部分はすべて縦位に配置される。奥壁は、左側壁側に高さ1.2mの大形の石材を縦位に置き、右側壁側の空隙を、まず基底石を縦位に、さらに2段目を横位に積むことによって、目地を通して。基底石の数は、石材の抜き取り穴から、左右側壁とも、さらに2石が南側に並び、石室の全長は、約6.5mになるものとみられる。石室に用いられた石材はチャートの角礫である。チャートは城谷口古墳群のある谷奥の急斜面(通称立岩)に露出しており、入手可能である。

石室床面は、玄門部周辺に石材が並べるように配置される。石材は、およそ約0.4~0.6mの大きさのものからなり、厚さ0.2m前後の厚みのある石材の上面を揃えて並べていることから、礫敷きの一部と推定される。石材は黒色の粘板岩で、片理が真直ぐな良質な石材が厳選されている。奥壁から中央付近までの床面は、石室構築時に削り出された地山面まで後世の削平がおよび、この部分の礫敷きは完全に削平されている。地山面直上には薄い腐食土層あるいは炭泥じり層があり、ある時期に開口していたと考えられる。そのためほとんど遺物は存在していなかった。出土遺物はわずかに奥壁付近で高杯、杯身が数点出土したにすぎない。



第23図 1号墳平面実測図

3) 遺物

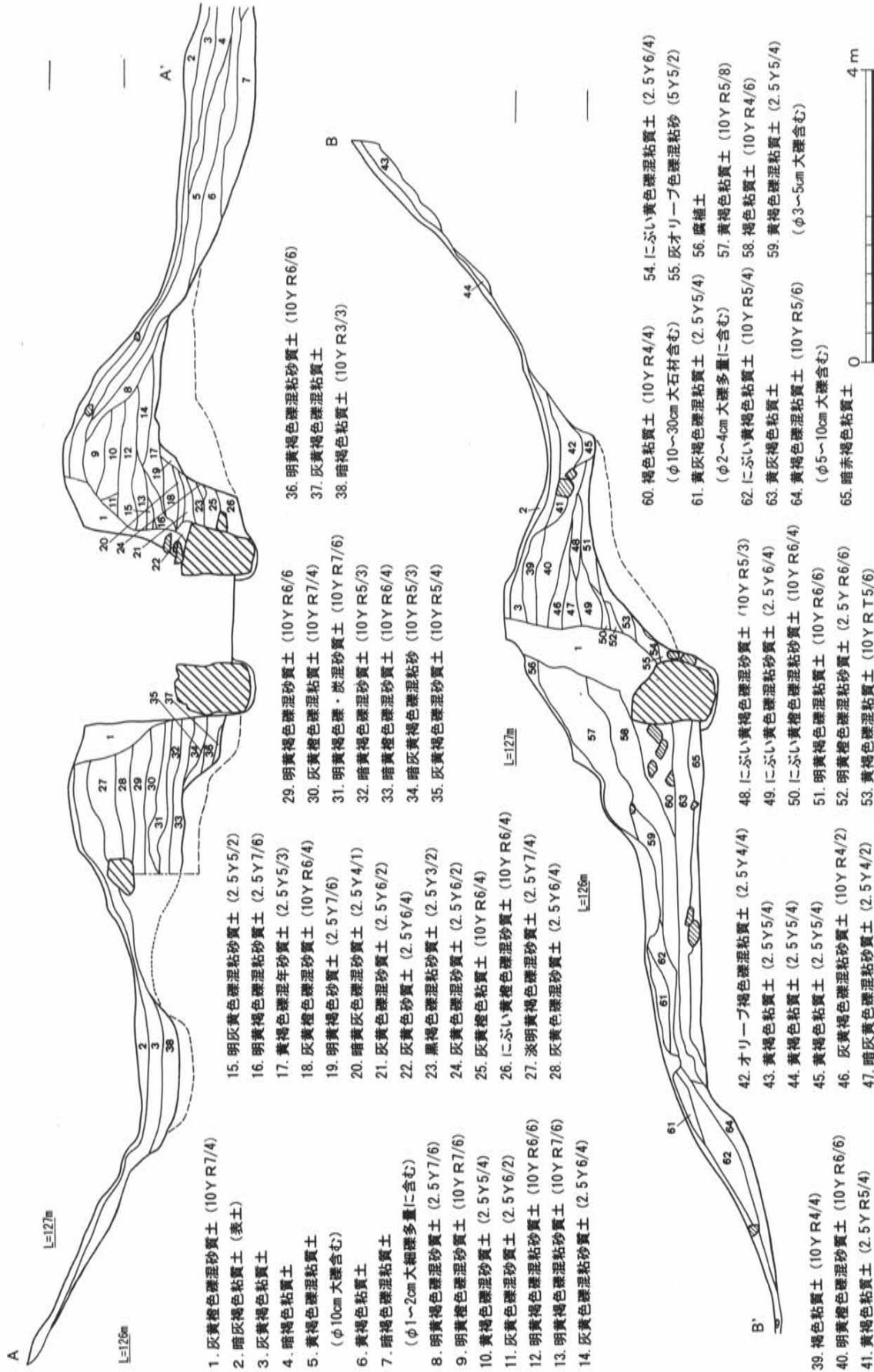
a. 土器

1～3が石室奥壁付近から出土した須恵器である。1は天井部にヘラ記号が見られる。須恵器は陶邑TK43型式とTK209型式におおよそ位置づけられるものであり、この遺物から古墳は6世紀後葉以前の築造と推定される。陶邑TK209型式に相当するものは追葬に伴う遺物とみられる。4は後背丘陵を半円形に削り出した地形の肩部から口縁部は欠くが体部は無傷で出土した。1号墳上方にある9号墳からの崩落である可能性もある。5～8・13・14・19は1号墳と2号墳間の溝内から出土した。その他のものは2号墳に盛られた築造以後の客土中から出土している。この客土は墳丘破壊後に盛られたものである。2号墳は石室の左側壁側をのぞくとその床面がパツされ遺物が保護されていたが、土器量が少なく、杯身・杯蓋が大半であり、客土中の遺物には1号墳のものも存在すると考えられる。6・20が土師器である以外すべて須恵器である。

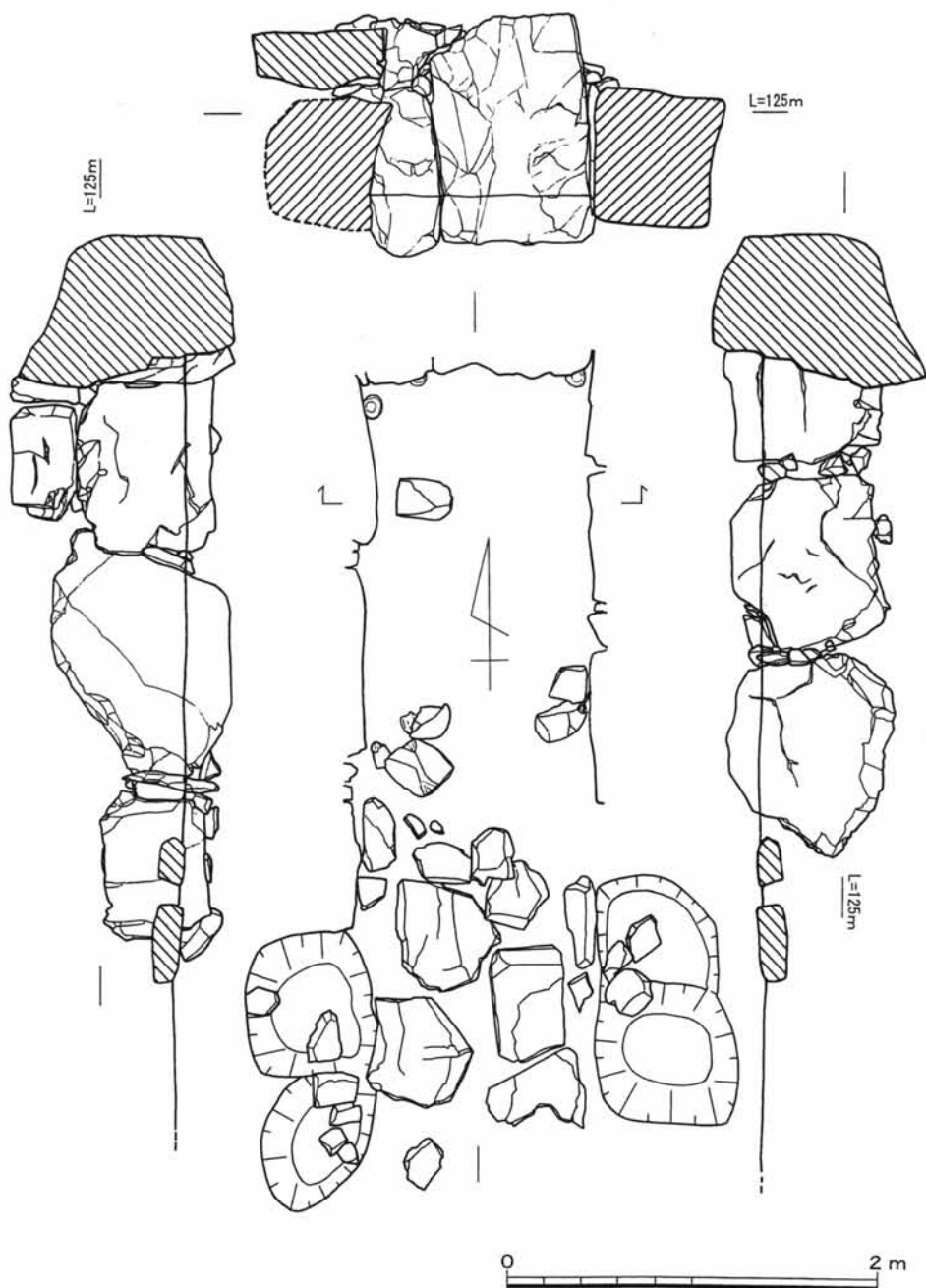
(5) 2号墳

1) 墳丘(第27図)

2号墳は、谷部西側の山腹に立地する。調査前の墳丘の状況は、丘陵側の北東部から北西部に



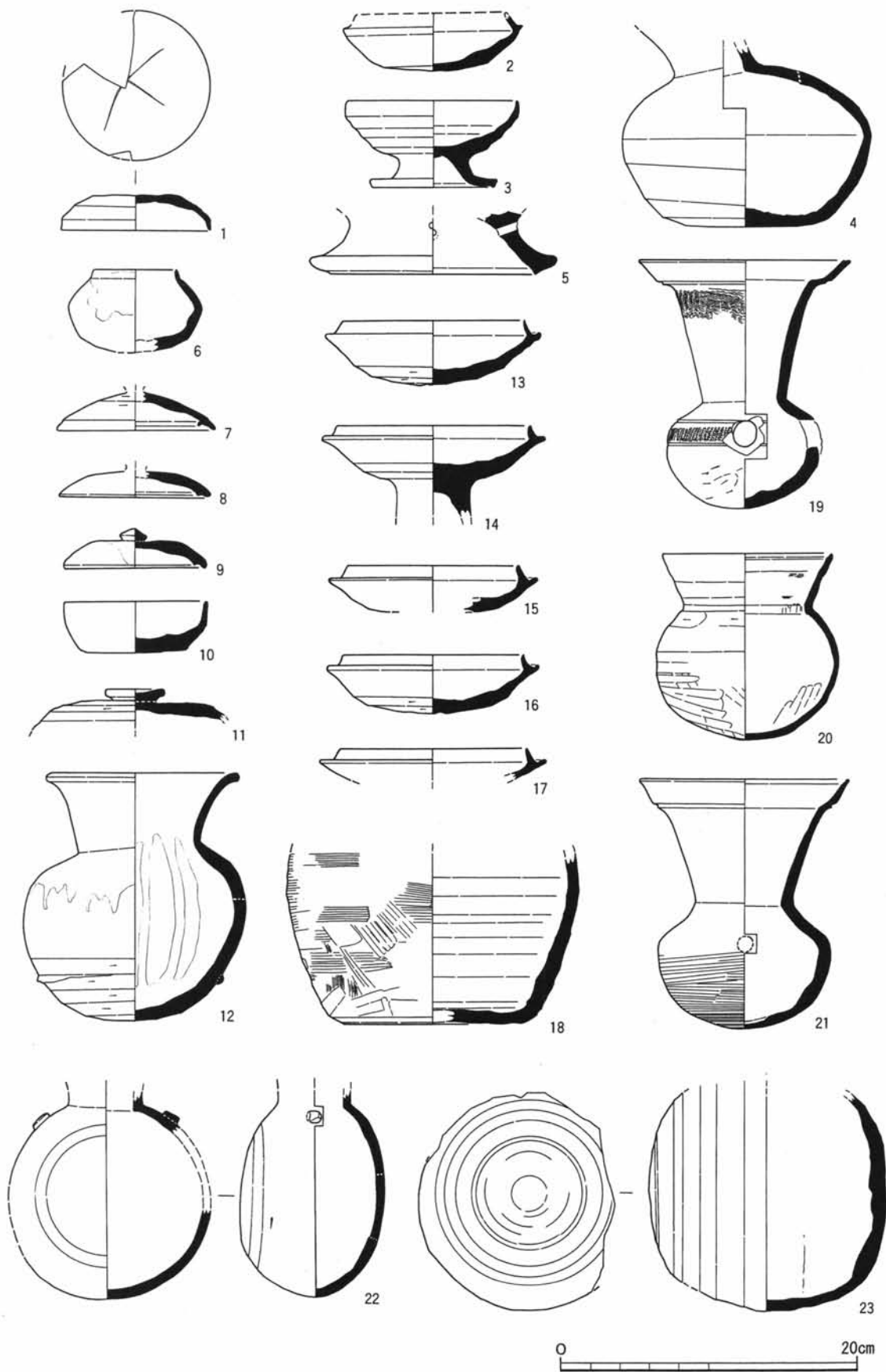
第24図 1号墳墳丘断面図



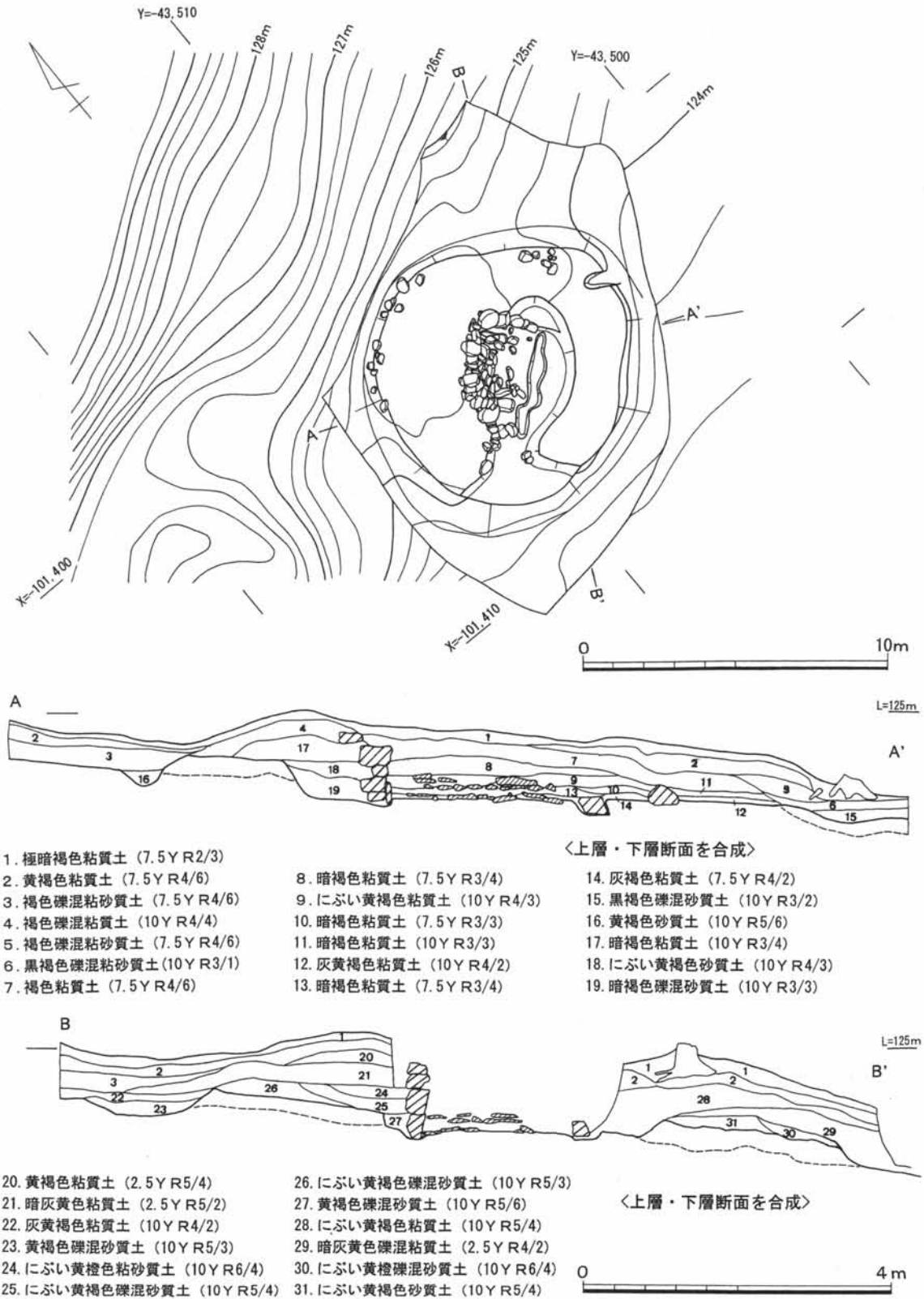
第25図 1号墳石室実測図

については、比較的良好な遺存状況がみられたが、墳丘南東裾は、林道によって大きく削平されていた。また中央部は一部落ち込み、周辺に石材が散乱する状況がみられた。露出した石材は、主に側壁の石材と推定され、一部はほぼ原位置を保っていた。石材の状況から、開口方向はおおよそ南西と推定された。調査前の墳丘の高さは、約1.2mを測る。

墳丘は、遺存状況の良好な北東部の断ち割り調査で、奥壁から約3mの地点において、地山面を溝状に約0.2m掘り込んだ状況がみられたことから、北東側の墳丘裾と確認した。また、北西側についても、側壁から約3.1mの地点で、幅約1.4m、深さ約0.2mの溝状の落ち込みを検出しており、斜面側との切り離しの周溝と推定されることから、この部分を墳丘裾とみることができ



第26図 1号墳および周辺出土土器実測図



第27図 2号墳墳丘平面・断面実測図

る。前庭部となる南西側は、裾部が林道によって削平されるため、前述した断割り調査の知見をもとにすると、墳丘は約10mの円墳として復原することができる。墳丘裾には、外護列石が巡っていたとみられ、北西墳丘裾部で一部列石が認められた。この列石の石材周辺から甕の体部が出

土しており、墳丘裾部に供献された供献土器とみられる。

墳丘の築成は、傾斜面を地山まで削り出し、平坦面を形成したのち築成されている。石室は、この平坦面を約0.5m掘り込んで構築される。墳丘の盛土は、天井石が抜き取られ、上半部の流失が著しいが、現存している部分では大部分は盛土によることが確認された。墳丘の南東部では、攪乱土が堆積し、須恵器片や鉄器の細片が出土した。これらの遺物は、墳丘上の供献土器、左側壁の石材の抜き取りの際に攪乱された石室床面の副葬品や1号墳の遺物を含むと考えられる。攪乱された土砂が再び盛土状に積まれている状況が、南東側の墳丘の一部で確認された。

2) 石室(第28～31図)

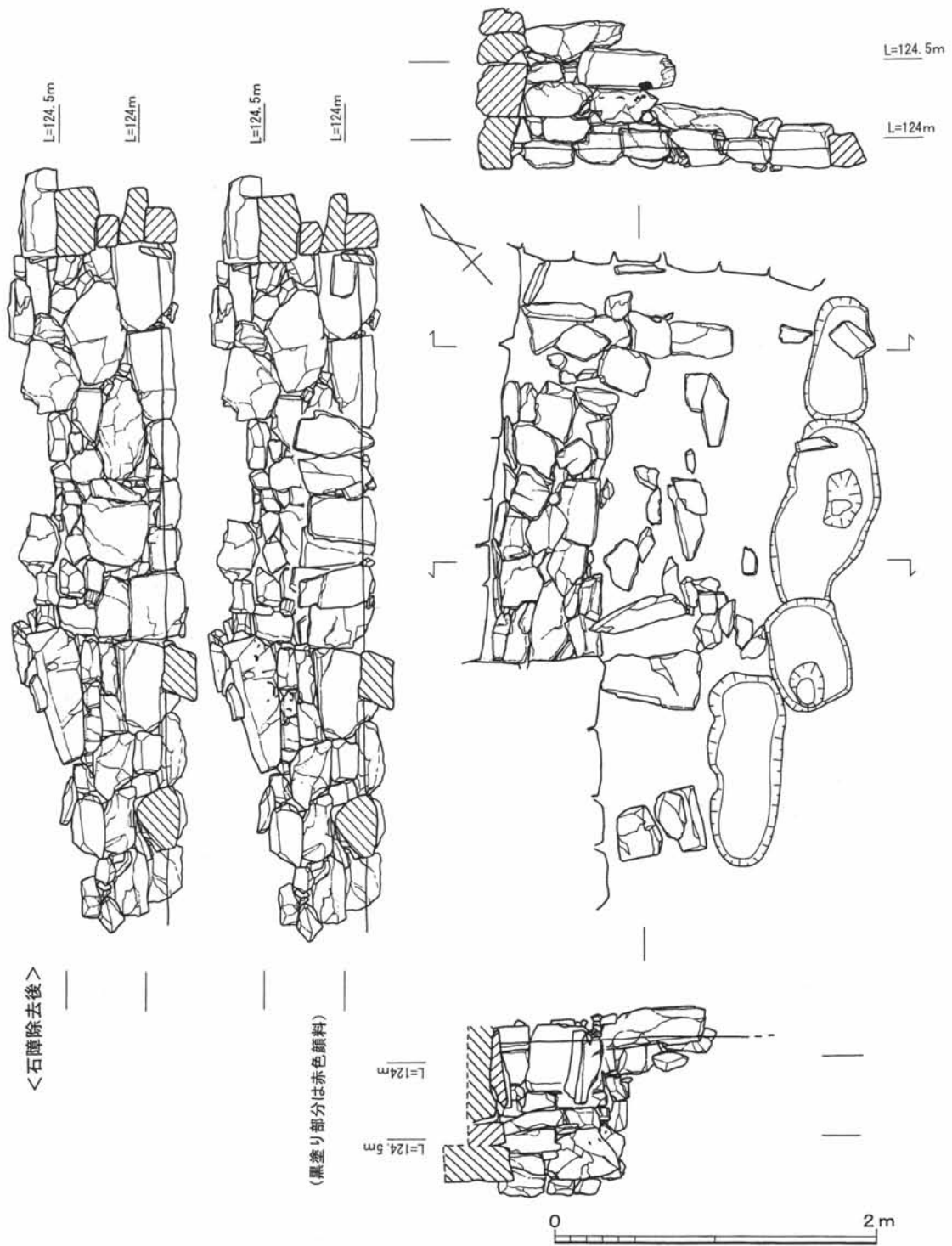
石室は、南西方向に開口する両袖式の横穴式石室と推定される。石室全長4.1m、玄室長2.6m、羨道長1.5mを測る。玄室は、玄室奥幅推定1.9mを測る。石室の主軸は、N40°Eをとる。石室上半部は削平され、左側壁は後世の石材の抜き取りによってすべて遺失している。袖部のうち、右袖は約0.7mの幅を持つ。左袖は、床面石材の遺存状況や石材抜き取り穴から判断すると、約0.4m前後とみられ、左右均整ではない。右片袖が強く意識された両袖式石室と言える。

石室の構築状況については、全体に使用された石材には1号墳のような1mを超える特に大きな石材は認められず、高さ0.3～0.5m前後の石材を中心に用いられている。右側壁は、最も良く遺存している奥壁側で最大4段の石材が遺存している。基底には、やや大形の石材を横位に据えたのち、2段目にも大形の石材を横位に配し、その空隙に小形の石材を組み合わせて積んでいる。奥壁側の基底2石にかかる2段目の大形石材の上端は、床面から約0.7mの高さを測るが、奥壁側の目地のレベルとほぼ等しく、このラインで小形の石材を多用しながら、石材上端の高さを一旦揃える傾向が看取できる。右側壁には全体にやや持ち送りがみられ、玄室北西隅では、基底石から2・3段目の石材を奥壁に一部架構する。右袖部分は、面取りがなされた大形の石材を袖石にして横位に据え、明瞭な袖部を形成している。石材の一部に赤色顔料が付着している状況が確認された(第28図)。

奥壁は、遺存状況が悪く、右側壁寄りでは、5段の石材が残るが、左側壁寄りでは基底石が認められるにすぎない。基本的に横位に積まれるが、中央寄りの3段目に扁平なやや大形の石材が用いられており、右側壁と同様に床面からの高さ約0.7mで、目地を通す意識があったものとみられる。このラインは、石室構築を段階的に行った状況を示すものであろう。奥壁の中央下部の石材には、僅かながら赤色顔料が付着していた。

羨道は、全体に扁平な石材を用い、横位に積んで構成される。玄門部側の石材は、やや大形の石材が使用されるが、特に玄門部の4段目の石材は大きく、この石材を中心に周辺に赤色顔料の付着が認められる。玄門部には1石の梱石が配されるが、この基底は、羨道部や玄室の基底部よりも深く掘り込まれており、石材の上面が石室構築時の床面と同レベルになるよう配されていたものとみられる。玄門から約0.9m南西で、閉塞石とみられる石材3石を検出した。

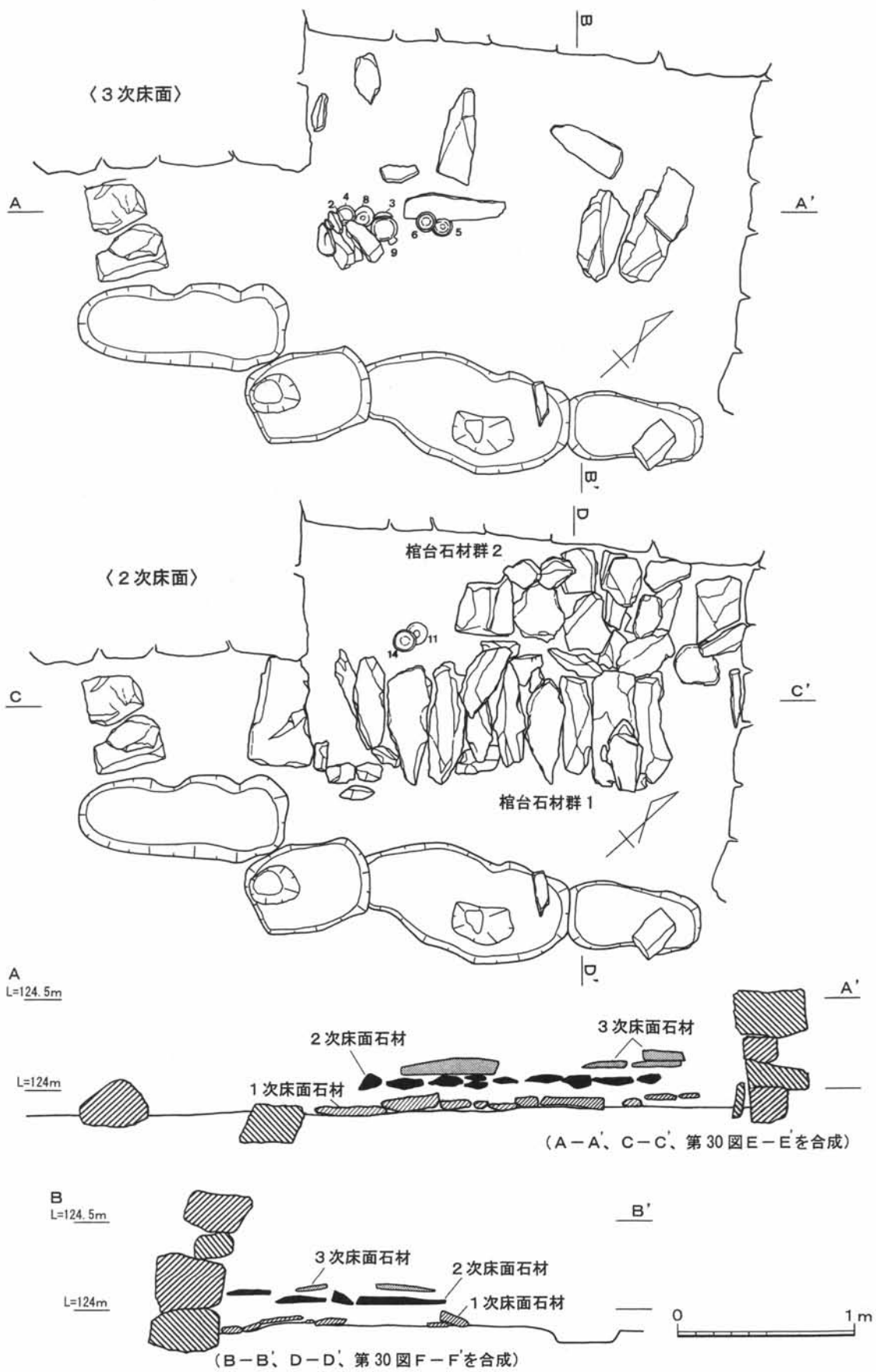
玄室の調査では、3次にわたる床面を確認した。最終追葬面とみられる床面(3次床面)と、2対の棺台を構成する石材群を配した追葬時の床面(2次床面)、さらにその下層で検出された石障



第28図 2号墳石室実測図

等が配される石室構築時の床面(1次床面)である。

まず、最終追葬面とみられる3次床面では、棺台とみられる扁平な粘板岩を、奥壁寄りで5石を検出し、中央部で3石を検出した。中央部の石材上では、須恵器杯身2点が出土した。また、



第29図 2号墳2・3次床面実測図

床面の玄門部寄りで石材の集石がみられ、その直下では、須恵器杯身4点・提瓶1点が出土した。遺物から最終追葬面の時期はおおよそ6世紀末～7世紀初頭頃とみられる。集石は、棺上に置かれた石材の可能性がことから、この面に1～2体の追葬を推定できる。3次床面の検出レベルでは、玄門部の梱石は検出されない。

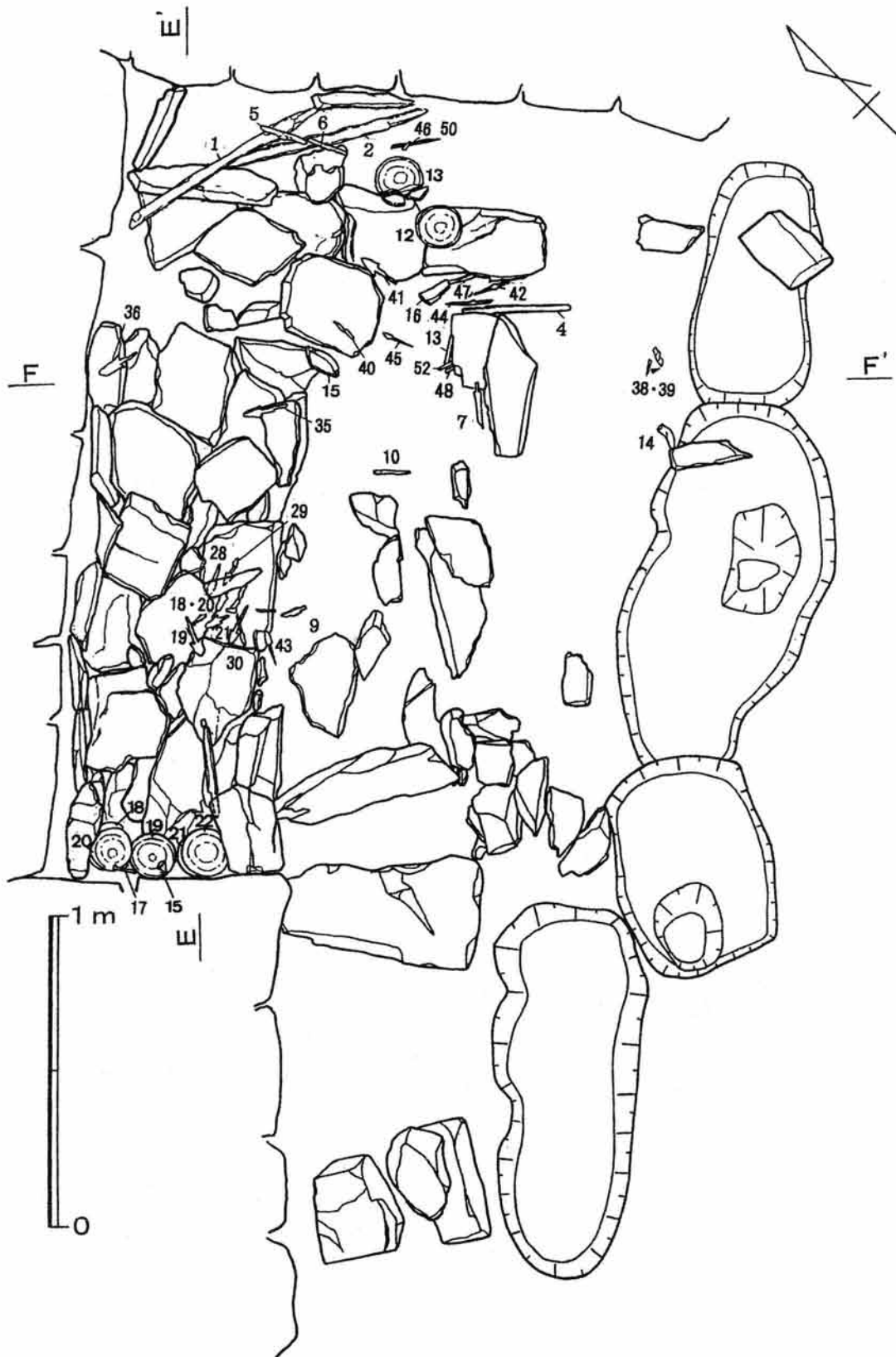
2対の棺台から構成される2次床面は、3次床面より約10～15cm下層にある。1基が玄室中央(棺台石材群1)、もう1基は右側壁に接して配されている(棺台石材群2)。棺台石材群2によって下層の石障が一部壊されている。いずれの棺台も、扁平な粘板岩を主軸に平行して面を揃えて配する。遺物は、玄門側の石障石材の上面で、須恵器杯身・杯蓋の1対が出土した。また下層の1次床面上層で取り上げた遺物にも、2次床面に属すと考えられるやや新しい時期の鉄器がある。

最も古い床面である1次床面は、2次床面よりさらに約10cm下層にある。右袖部に主軸に平行する石障を構築している。石障の規模は、長さ約1.7m、幅約0.7mを測る。6枚の扁平な石材を右側壁側に密着させて立て並べ、玄門に接して3枚の石材を用いることによって空間を確保している。床面は礫敷きで、0.2～0.3m大の扁平な石材を敷き詰めている。遺物は玄門部側の立石上面で、須恵器杯身・杯蓋が出土し、この下層から頭骨と推定される人骨の一部や、10点以上の歯牙が出土した。頭骨は、礫敷き上に置かれた土器枕とみられる3組の須恵器杯身・杯蓋のセットの中央直上にあり、埋葬時の現位置を保っていたとみられる。石障内からガラス小玉1点、同粟玉1点のほか、頭骨の北東に短刀1振、礫敷の中央東寄りで鉄鏃十数本や鉄刀子1本が出土した。さらに頭骨に接して鏃状鉄製品が1点出土した。また、頭骨の除去後に、土器枕とみられる須恵器の直上から鉄鐸1点が出土し、さらに玄門部側の立石の除去後に、鉄刀子1本が出土した。以上の右袖部の石障のほか、奥壁側にあたる玄室北西隅には、奥壁に接する立石がみられることや、石敷きが一部にみられることから、奥壁に平行するもう1基の石障が存在した可能性がある。奥壁北西隅では、奥壁に平行して、蛇行剣1振と鉄刀1振が出土した。その周辺から多数の鉄鏃や須恵器杯身・杯蓋が出土しているが、これらは奥壁に平行して配置された埋葬に伴う副葬品と推定され、この埋葬が2号墳の最初の埋葬であった可能性が高い。遺物から6世紀前半と推定される。また、玄室の左側壁の袖部近くの床面には石障内に見られるような小形の平らな石材が並べられた状況があり石障が存在した可能性もある。また、中央部には棺台の可能性のある石材が散在し、この周辺では鉄鏃が出土していることから、さらに埋葬が行われていた可能性がある。以上から、1次床面では、最初に空間を確保された奥壁に沿う埋葬と右袖部の石障に伴う埋葬のほか、さらに左側壁寄り主軸に平行する埋葬が想定され、3～4体の埋葬があったとみられる。

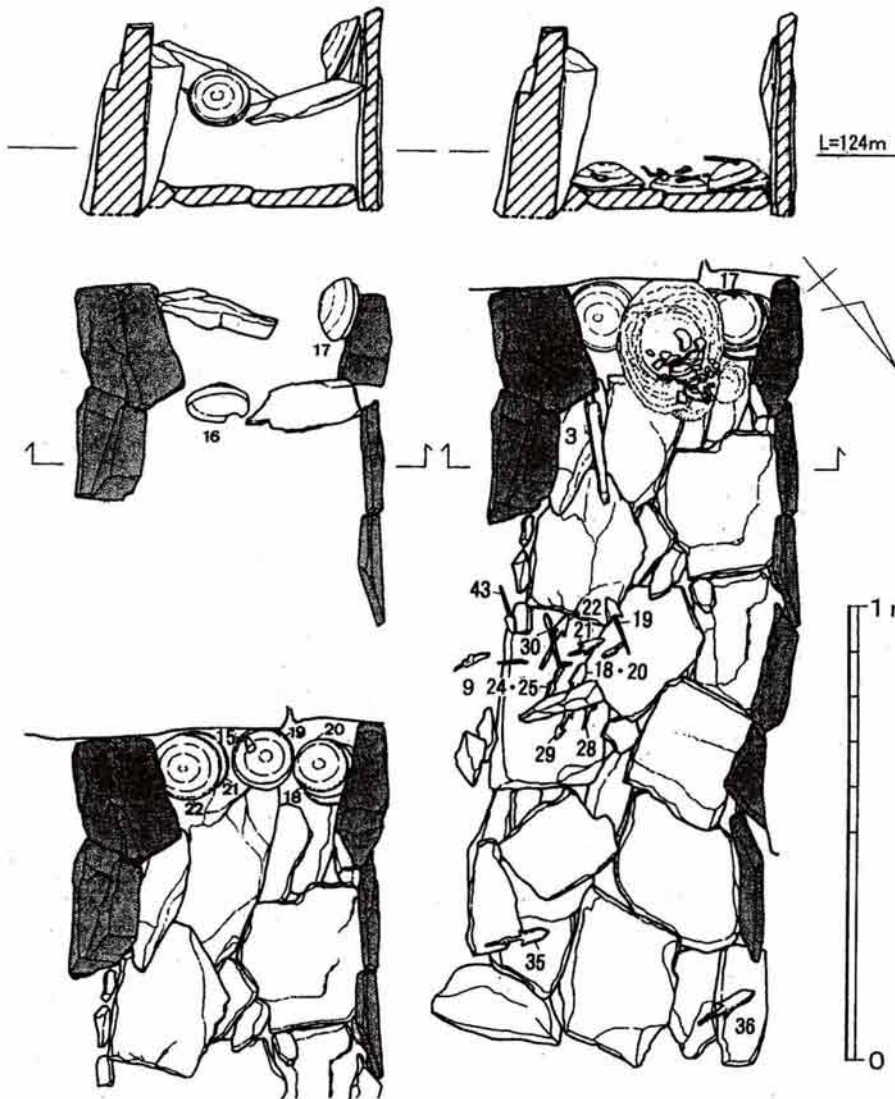
3) 遺物

a. 土器(第32図)

石室内からは須恵器のみが出土している。1～9は3次床面検出の遺物である。須恵器の型式は、陶邑TK209型式におおよそ併行する。11・14は2次床面の遺物である。12・13は奥壁にあったと考えられる推定石障内から出土した。16・17は右袖部の石障から検出した頭骨上位から出



第30図 2号墳1次床面実測図



第31図 2号墳石障内遺物出土状況実測図

土した。18~22までは石障内で転用枕として利用されていた。15は前述両者の接点部で出土し帰属がはっきりしない。これらは陶器TK10型式のなかでも古相を示している。他の須恵器は、石室埋土掘削中に出土した遺物である。

b. 鉄器(第33~37

図)

横穴式石室を主体部にもつ2号墳では鉄鏃や鉄刀、鉄剣、刀子など鉄器類が豊富に出土した。1次床面ではその出土状況等から遺物を埋葬ごとに分類し、更にならぬ出土のかたまりごとに説明を加えたい。

①右袖部石障内埋葬：鉄刀1、刀子2、鉄鏃18(うち類型不明鉄鏃片1)、鉄鐸1、不明鉄製品1が出土した。鉄鏃は平根系鉄鏃I~IV類、長頸鏃I~III類に属する。

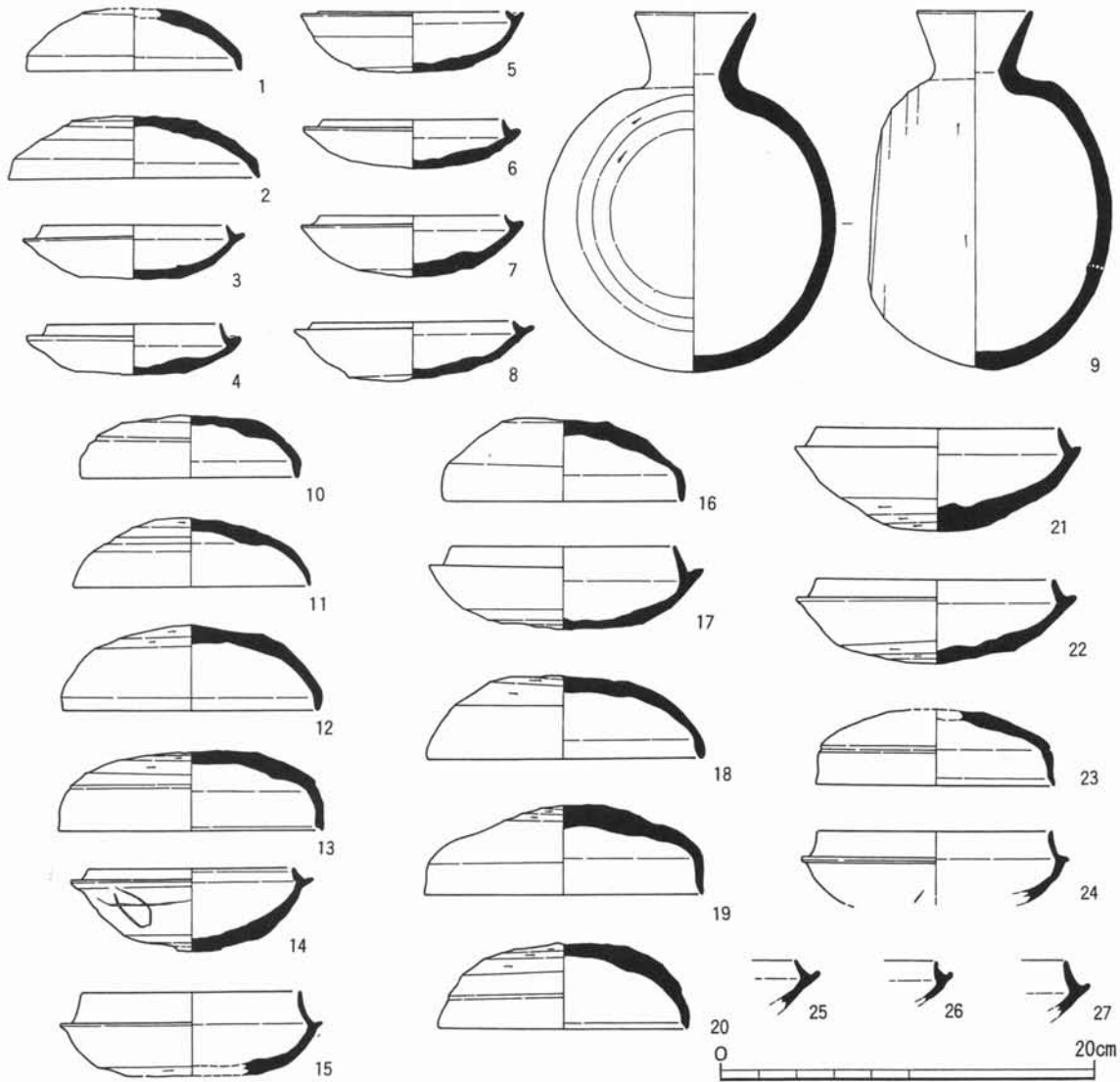
○頭部

鉄鐸(15) 頭骨の下から出土した。薄い鉄板を円錐状に巻いたと考えられる鉄製品である。円錐頂部には孔があり、円錐内面には1.5mm程度の棒状の鉄片が付着していた。

鏃状鉄製品(17) 長頸鉄鏃II類(後述)と同形の身部をもつが、茎部が差し込み式の袋状を呈している。奥壁沿い埋葬、中央部埋葬の各地点で同型式の出土が1点ずつある。

○右肩部

鉄刀(3) 切先を足側に向け。刃が外になるように置かれていた。茎には目釘穴があるが、背部側が切れている。目釘は四角柱の鉄製で、刀身部分には木質が残り鞘の痕跡と考えられる。



第32図 2号墳出土土器実測図

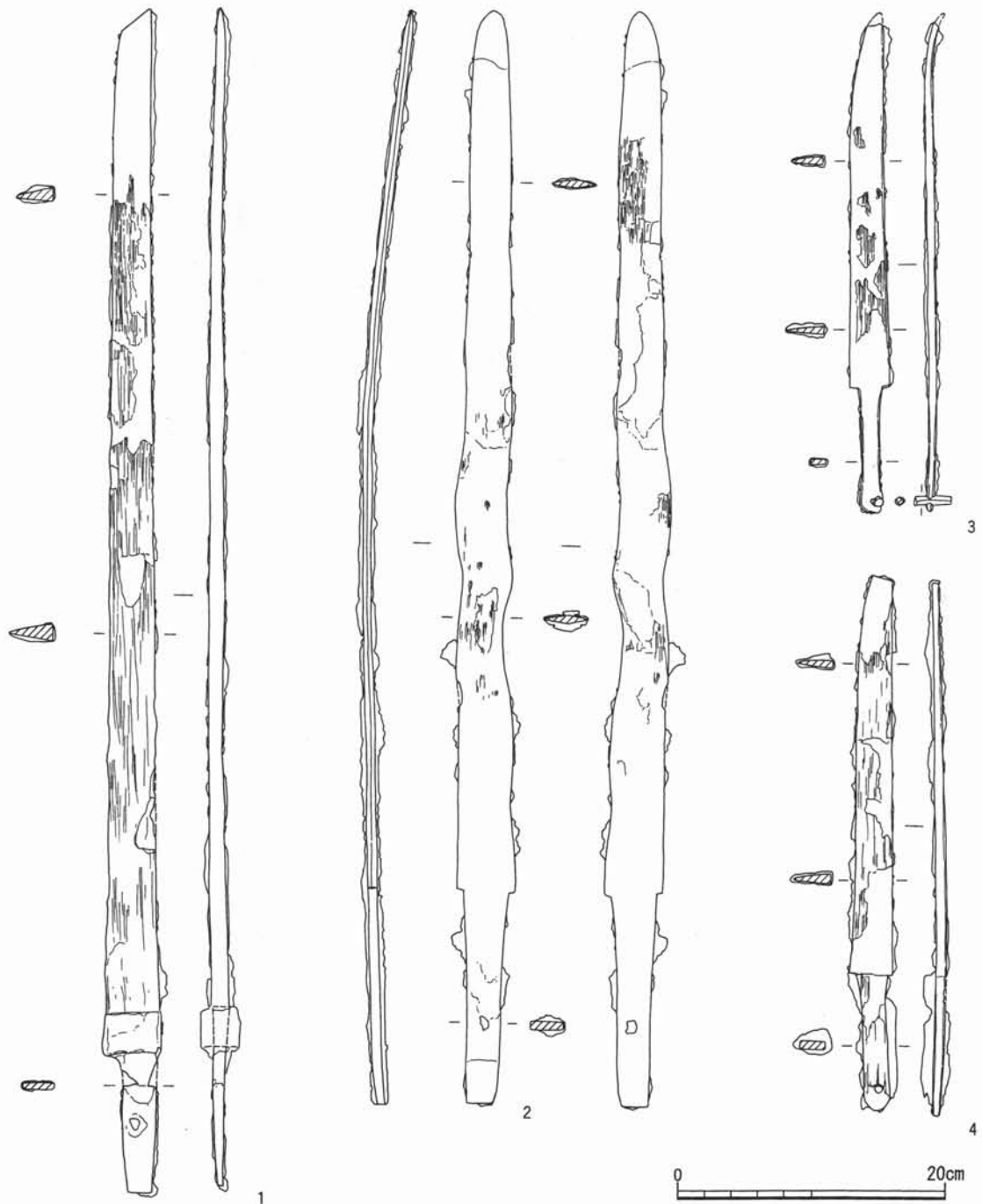
鉄刀子(12) 茎と刀身の一部が遺存する。身部は切先に向けて幅が徐々に狭くなる。関は両関で、茎部全体に木質が残る。

○右脇部

鉄鎌

平根系鉄鎌Ⅰ類(19) 大形の身部を持つ一群のうち腸袂三角式の身部をもつものである。身部断面は両丸、頸部および茎部断面形は方形をなす。頸部の関はやや末広がり台形関である。茎部は繊維状のものをまいた後に矢柄の木質で包み込みその上から樹皮を横方向に巻いて仕上げている。

平根系鉄鎌Ⅱ類(20~22・24~27) Ⅰ類と同様に大形で腸袂三角式の身部をもつが、身部の幅に対する長さの割合がより大きい長三角形を呈するものをⅡ類とした。20と24はⅠ類と比べて身部の幅が最大幅で1cmほど狭いものである。20は腸袂部が欠損しているため定かではないが、同類の25を見る限り腸袂部は1.5cm程度ありやや深いものとなっている。21・22・24・26は身部の長さがやや短い。27は他のものと比べて身部が幅、長さともに小形のものである。

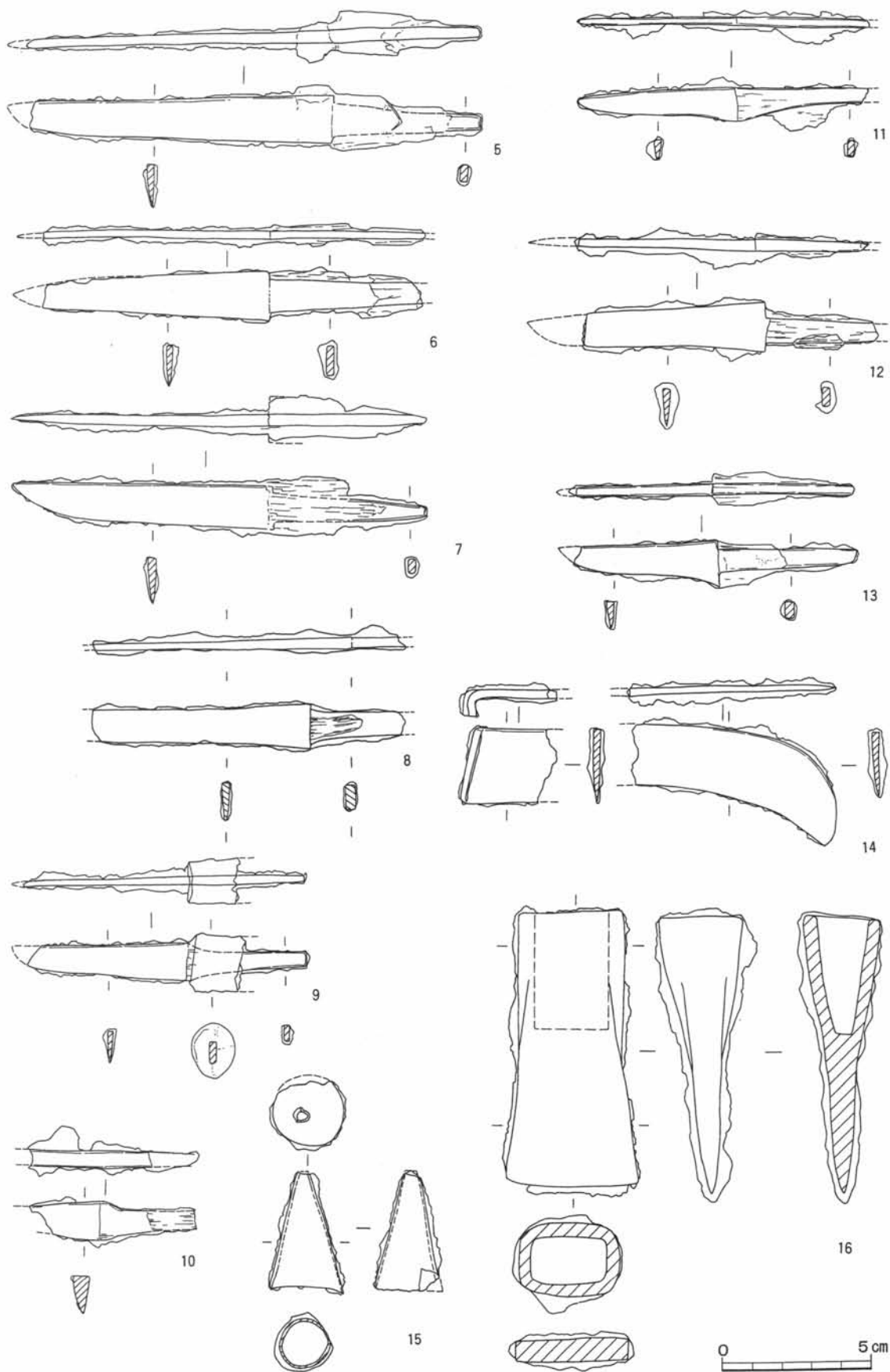


第33図 2号墳出土鉄器実測図(1)

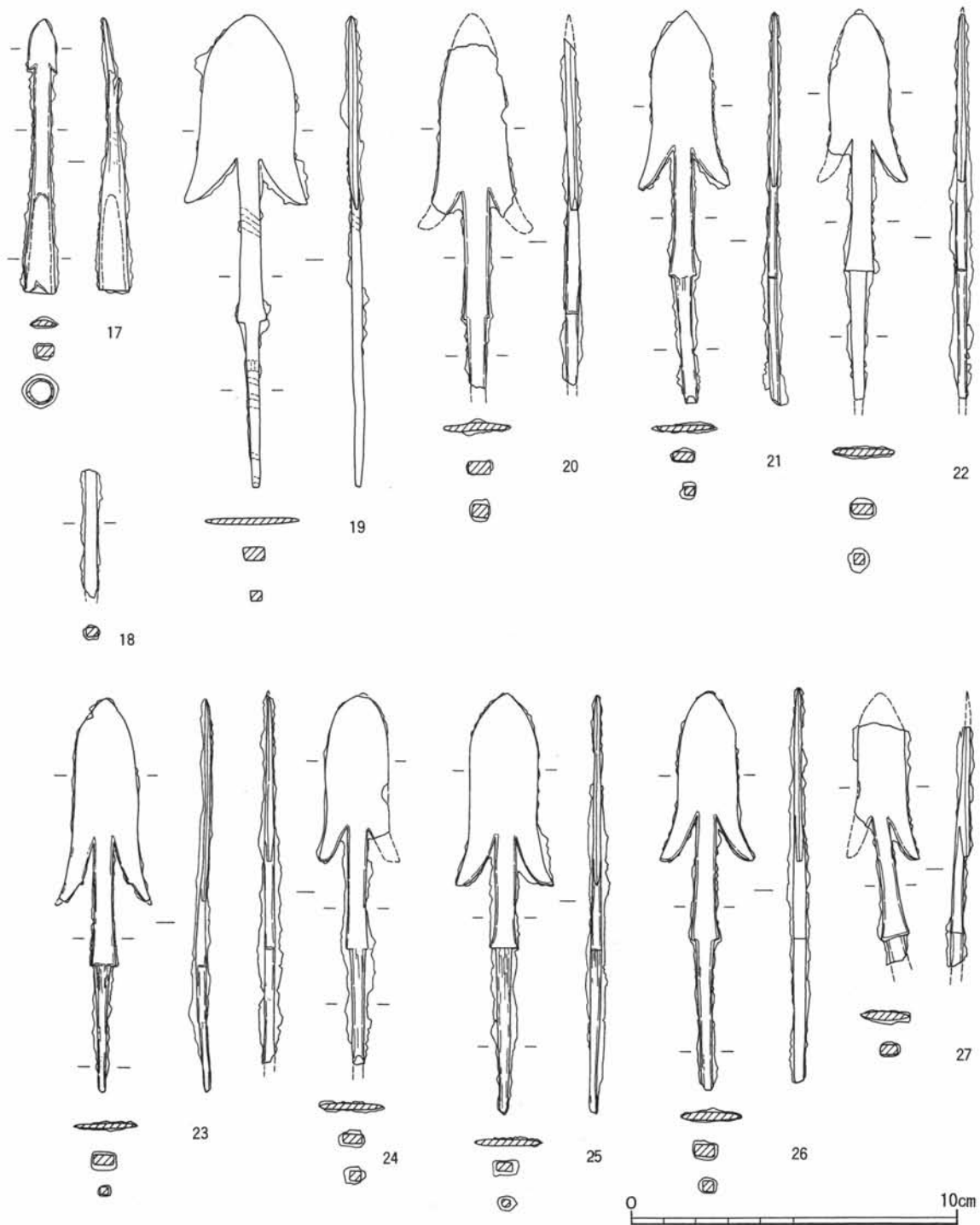
平根系鉄鏃Ⅲ類(23) 腸袂三角式鏃で、大きさや平面形はⅡ類と同じであるが、身部下端は二重逆刺となっている。茎部の矢柄構造は他の例と同様と推定される。なお、遺物22、26の下から出土した破片が接合して1点となっている。

平根系鉄鏃Ⅳ類(28) 有茎柳葉式の身部をもつ鏃である。身部断面は両丸で、頸部および茎部断面形は隅丸方形を呈する。茎部の木質の残りが悪いが、矢柄構造は他例と同様と思われる。

長頸鏃Ⅰ類(29) 長頸鏃の一群のうち腸袂柳葉式の身部をもつもの。身部断面は両丸で頸部断面および茎部断面は隅丸方形となる。頸部の関はやや末広がりの台形関である。茎部の矢柄構造は、木質で包み込んだ上に樹皮で横方向の樺巻きを施されている。



第34図 2号墳出土鉄器実測図(2)



第35図 2号墳出土鉄器実測図(3)

長頸鏃Ⅱ類(30・32・33) 30は小形の身部をもつ長頸鏃の一群のうち逆刺が数ミリ程度の短いものである。基部欠損のため矢柄構造は不明。身部断面は両丸、頸部断面および基部断面は方形を呈する。32は身部、頸部がやや長い。大きさは身部長2.5cm、身部幅1.0cm、頸部長9.0cmほどである。頸部の平面形はほぼ直線的で、闊部がほとんど広がらない。33は比較的身部は大きく、頸部が短い。

長頸鏃Ⅲ類(31) 小形の身部をもつ長頸鏃の一群のうち、三角形式の身部をもつもの。身部断

面は両丸で、頸部断面は方形、茎部断面は隅丸方形を呈する。ともに茎部に矢柄を包む木質が残っている。身部断面は両丸、頸部および茎部断面は方形である。

類型不明鉄鎌片(21) 鉄鎌の茎部。

鉄刀子(9) 小形のものでなだらかな斜関で茎部にいたる。茎部には木質が残る。

②奥壁沿い埋葬：鉄剣1、鉄刀2、刀子3、鉄鎌11、鉄斧1、不明鉄製品1が出土。鉄鎌は平根系鉄鎌Ⅱ類と長頸鎌Ⅳ、Ⅴ類がみられる。長剣や刀の切先方向から左側壁側の頭位があるものと想定した。頭部側を上、足側を下、奥壁側を右、羨道部側を左とし説明を加えたい。

○下部右

鉄刀(1) 切先を右側壁部へ向け2と交差する状態で出土した。目釘穴状の痕跡が茎に見られる。ハバキの痕跡が残されておりはっきりしないが、刃関のみが認められる形式と推定される。剣身部には両面ともに木質が残される。

鉄剣(2) 切先を右側壁部へ向けた状態で出土した。先端部は真直ぐな剣であるが5曲の蛇行が認められる。6世紀前半の年代があたえられる蛇行剣であり、近畿地方では最も新しい蛇行剣に位置づけられる。目釘穴状の痕跡が茎に見られる。剣身部には両面ともに木質が残される。

鉄刀子(5・6) 大形のもの2点である。5の身部は切先に向けて細くなる。また、茎部は鹿角で覆われている。6の身部は切先に向けてその幅を狭める。茎部全体に木質が残る。

鉄鎌

長頸鎌Ⅳ類(46) 長頸鎌の一群のうち、別造片腸袂三角型式の身部をもつものである。身部断面は両丸で、片腸袂部断面は左側が方形をなすが右側は丸みを帯び、頸部は方形を呈する。身部長、茎部長は欠損および遺存していないため不明である。

類型不明鉄鎌片(50) 鎌身部を欠損するため、類型の設定ができないもの。頸部および茎部の断面は方形を呈する。茎部には樹皮巻きが施されている。

○下部左

鉄刀子(11) 小形のもので茎部全体に木質が残る。

鉄鎌

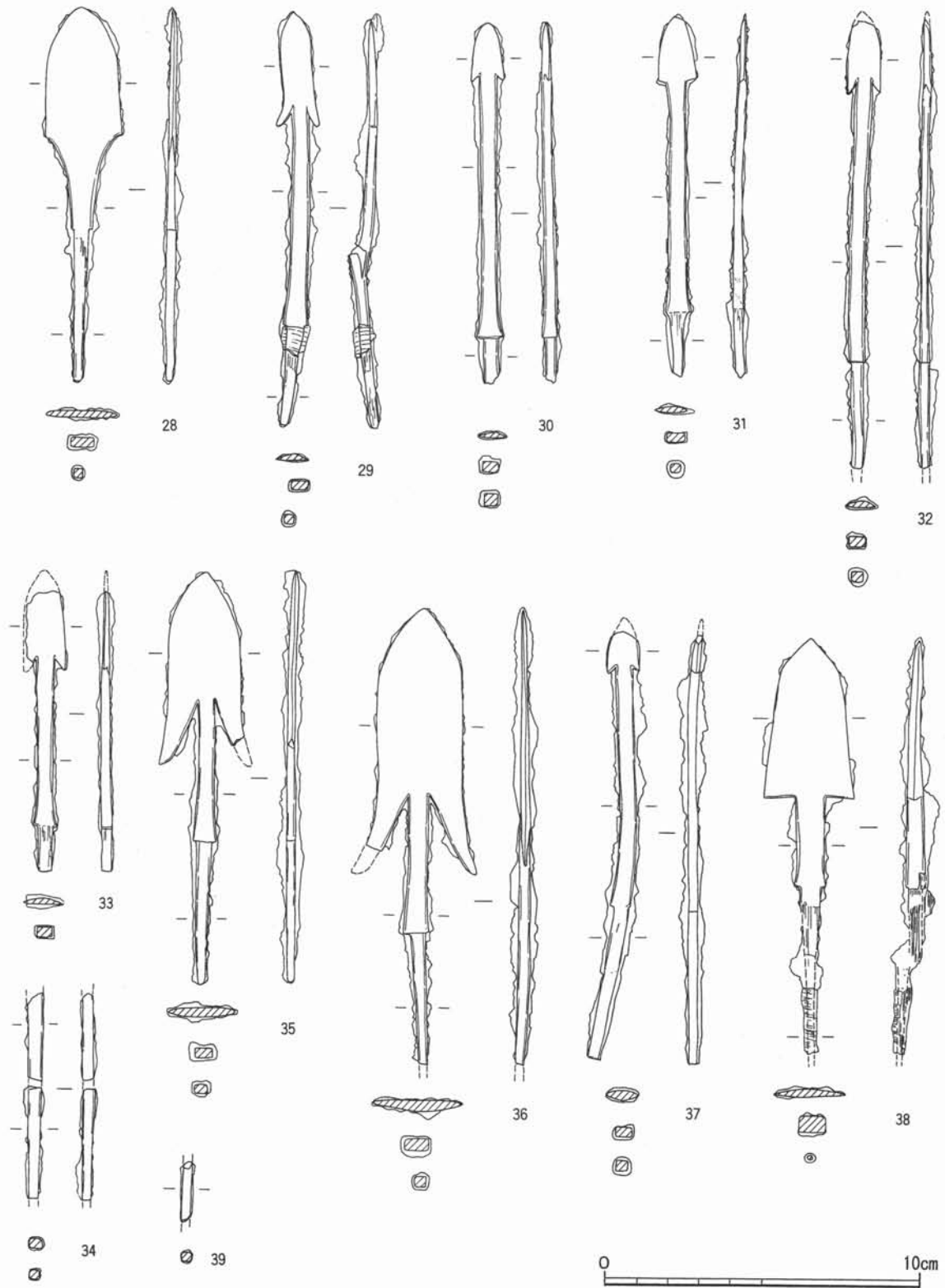
平根系鉄鎌Ⅱ(36) 大形の身部を持つ一群のうち腸袂三角式の身部をもち、身部の幅に対する長さの割合がⅠ類より大きい長三角形を呈するもので平面形がより大形のもの。身部断面は両丸、頸部および茎部断面は方形、頸部の関はやや末広がりの台形関である。

○中央部左

鉄刀(4) 切先を左側壁側に向け出土した。目釘穴が1か所である。茎部には鹿角と考えられる白色の有機質が残される。刀身には木製の鞘があったようである。

鉄鎌

平根系鉄鎌Ⅱ類(35・40・42・43) 大形の身部を持つ一群のうち腸袂三角式でやや長めの身部をもつもので、石障内で同類の鉄鎌出土がみられる。35の逆刺部は欠損しているが、他のⅡ類とくらべ外側にやや開く傾向が残存部から推測できる。42はⅡ類の中でもより小形のもので、同類



第36図 2号墳出土鉄器実測図(4)

の鉄鎌の出土が右袖部石障内にある。

平根系鉄鎌V類(41) 大形の身部を持つ一群のうち腸扶三角式の身部を持ち、茎部に樹皮巻きを施す。身部断面は両丸、頸部および茎部断面は方形、頸部の関はやや末広がりの台形関である。

長頸鎌Ⅴ類(44・45) 長頸鎌の一群のうち、比較的身部が大きいもの。身部長3.5~4.0cm、頸部長約7cmほどである。身部断面は両丸、頸部および茎部断面は方形、頸部の関はやや末広りの台形関。茎部の矢柄構造は、木質で包み込んだ上に樹皮で横方向の樺巻きを施されている。

類型不明鉄鎌片(52) 頸部および茎部の断面は方形を呈する。茎部には樹皮巻きが施されている。

鎌状鉄器(47) 長頸鉄鎌Ⅱ類と同形の身部をもつが、茎部が差し込み式の袋状を呈している。袋部は断面円形である。

鉄斧(16) ほほ完形の有袋鉄斧である。袋部から刃部にかけて「ハ」の字状にひらく無肩で、断面形は隅丸方形である。

③石室中央部および左側埋葬：鉄刀子3、鉄鎌5、鉄鎌1、不明鉄製品1が出土。

○奥壁側

鉄刀子(7・13) 7は大形のものである。茎部全体に木質が残っている。13は小形のもので、刀身の先端を欠く。身部は関から1.0cm付近で細くなる。関は両関で、茎部全体に木質が残る。

鉄鎌

類型不明鉄鎌片(51) 身部と頸部の一部を欠損している。頸部および茎部断面形は方形を呈し、頸部の関はやや末広りの台形関である。茎部には木質が見られる。

鎌状鉄器(48) 身部を欠損するが、遺存する茎部は差し込み式の袋状を呈しており、他の2つの埋葬遺体の位置で出土がみられる不明鉄製品と同じものと推測できる。

○左側壁側

鉄鎌

長頸鎌Ⅲ類(37・39) 小形の身部をもつ長頸鎌の一群のうち、三角形式の身部をもつもの。身部断面は両丸で、頸部断面は方形、茎部断面は隅丸方形を呈する。右袖部出土の32よりもさらに長い頸部を持つ。37と39は現状では接合しないが、出土状況により同一個体と考えられる。

鉄鎌(14) 各個体は現状では接合しないものの、出土状況により同一個体と考えられる。曲刃鎌で、折り返しは基部全体を直角に折り返すもので、その着柄角度は100°である。

○中央埋葬中央

鉄刀子(8) 関は両関で茎部に木質が残る。

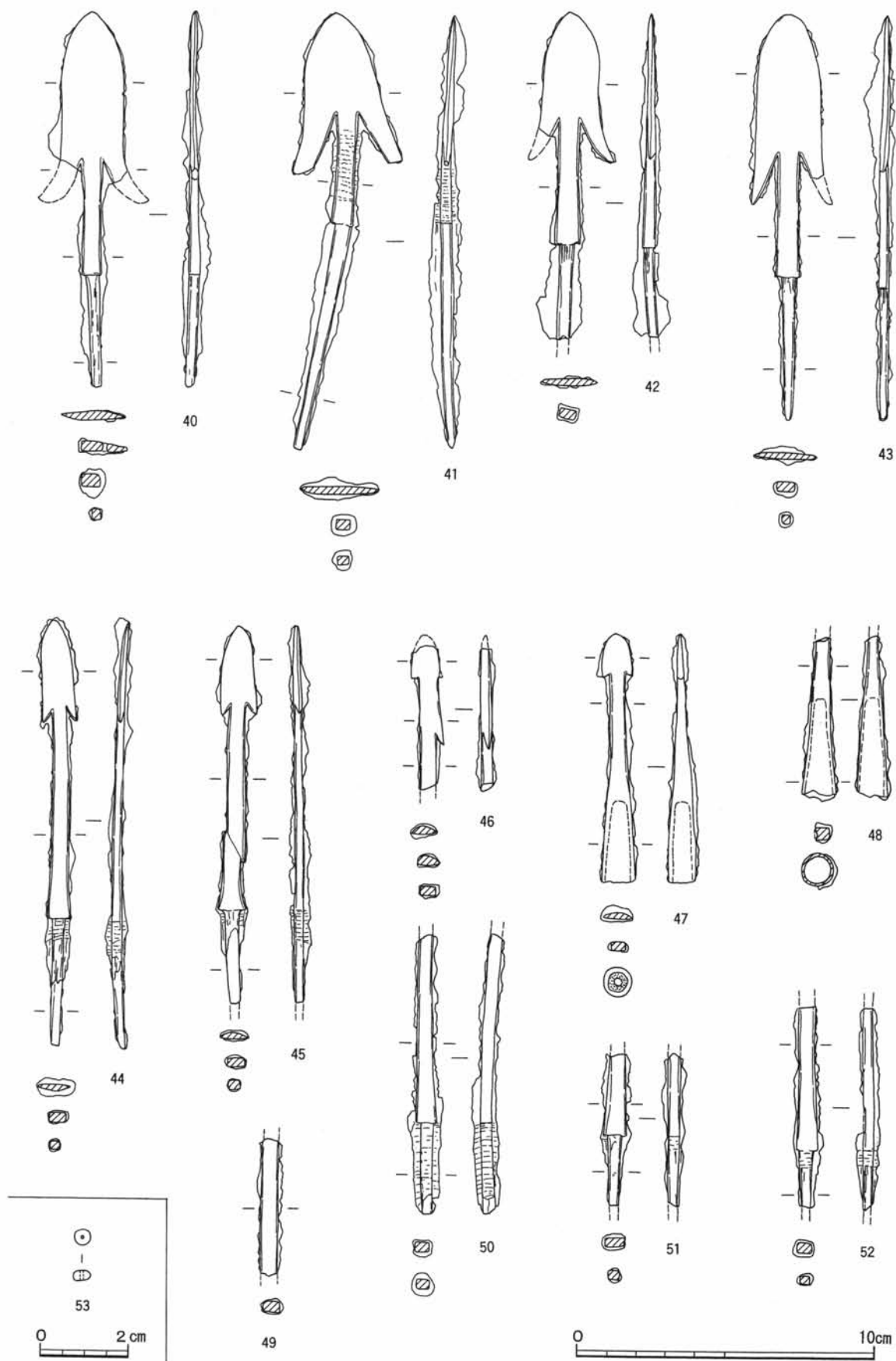
④その他

鉄刀子(10) 茎と刀身の一部のみ遺存する。茎部全体に木質がのこる。残存長5.5cm。茎は関から0.6cm付近で細くなる。床面上層攪乱より出土した。

鉄鎌

平根系鉄鎌Ⅵ類(38) 大形の身部を持つ一群のうち類五角形の身部をもつものである。身部断面は両丸で、頸部は隅丸方形、茎部は円形を呈す。茎部は繊維状のものをまいた後に矢柄の木質で包み込みその上から樹皮を横方向に巻いて仕上げている。石室内掘削中出土。

類型不明鉄鎌片(33・48) 33は鉄鎌の茎部のみ48は頸部のみ残存している。



第37图 2号墳出土鉄器実測図(5)・玉類実測図

c. 玉(第37図)

53はエメラルドグリーンを呈したガラス製の粟玉である。石障内頭骨付近から出土した。

(6) 8号墳

1) 墳丘(第38図)

8号墳は、谷部の西側の山腹に立地し、1号墳の西側約15mの斜面上に位置する。1・2号墳とほぼ同じ標高126m付近に築造されるが、前庭部は斜面地形になっている点で立地は異なる。墳丘は、斜面を断面「L」字形に大きくカットして造成し、平坦面を削り出して石室を構築している。また背面には、排水を兼ねた半月状の溝を設けている。石室の羨(玄)門の左右には、人頭大の石材がゆるやかに弧をなすように据えられている。墳丘の装飾的な効果を持つと同時に、斜面下への盛土の流失を防ぐ土止め機能を重視して構築されたと考えられる。そのため墳丘を全周するものではなく、前庭部側にのみ形成されたものとみられる。

2) 石室(第39図)

石室は、南に開口する無袖式の横穴式石室である。全長3.3m、玄室奥幅1.2mを測る。石室の主軸は、N16°Wをなす。高さは、良好な遺存状況にある奥壁西側で約1.0mを測る。

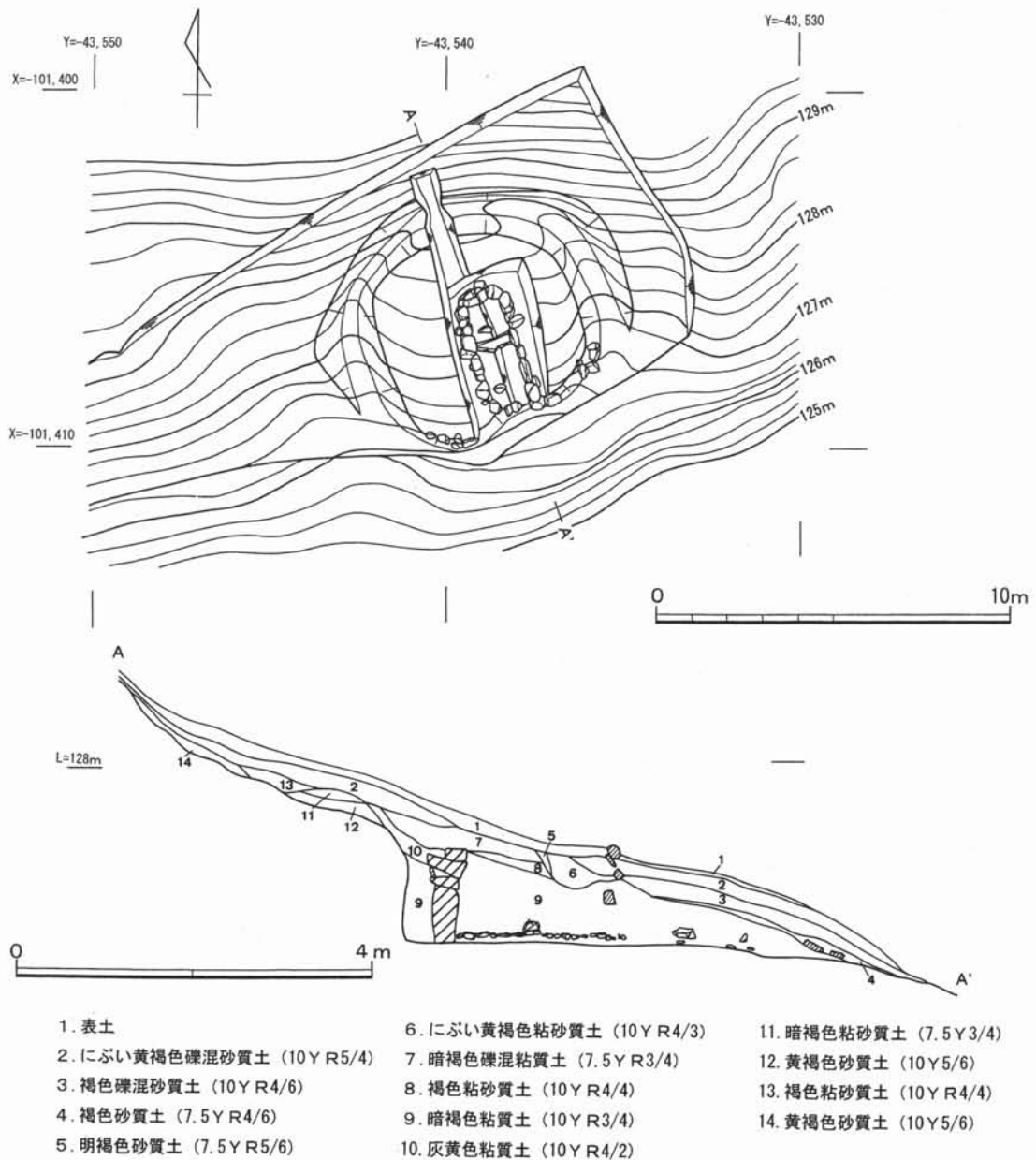
右側壁は、玄室最奥に高さ約0.8mの大形の石材を据え、基底石とする。この石材を含め、南側に基底石として7石を据える。2段目にはやや扁平な石材を横位に積み上げる。奥から2石目では、3段に積まれるが、この上端のラインで、1石目の石材と目地を通してしている。左側壁は、右側壁よりもやや大形の石材を多く含み、6石が遺存する。玄室最奥部の基底石として、幅約1mの大形の石材を横位に据えている。羨(玄)門部側の南端の基底石は厚さ約15cmの薄い板状の石材を縦に用いている。2段目の石材は2石を残すに過ぎないが、基本的に横位に積まれるようである。奥壁は、右側壁寄りにやや大形の石材を用いて基底石とする。左側壁側には、扁平な石材を縦位に据える。2段目の石材は横位に積み、両側壁と同様のラインで目地を通してしている。3～4段目の石材も基本的には横位に積み、4段目の上端の高さで天井石を架構したとみられる。

石室床面は、奥壁から2.2m手前まで、10～20cmほどの小石材を用いて礫敷きを構築している。また床面南側では、6～7石の石材が散乱するが、このうち羨(玄)門部に東西に並べられた2石の石材は、閉塞石の可能性もある。床面からは、礫敷き上で鉄釘が出土しており、木棺が使用されたと考えられる。出土遺物は、鉄釘のほか、礫敷き中央で須恵器杯身が出土し、羨(玄)門部内側で、須恵器杯身や高杯が出土した。また前庭部で、須恵器杯身・杯蓋などが出土した。出土した遺物から7世紀前半に築造されたと推定される。

3) 遺物

a. 土器(第40図)

閉塞石外側からは4・6・8～10が出土している。閉塞石内側から11の高杯が出土している。棺台と考えられる大形の石材2か所のうち南側の石材近くから3・7が出土、北側の石材上に1が出土した。2・5は石室掘削中に出土した。土器はすべて須恵器で陶邑TK217型式に帰属するものである。



第38図 8号墳墳丘平・断面実測図

b. 鉄器(第41図)

鉄釘2、不明鉄製品1が出土している。

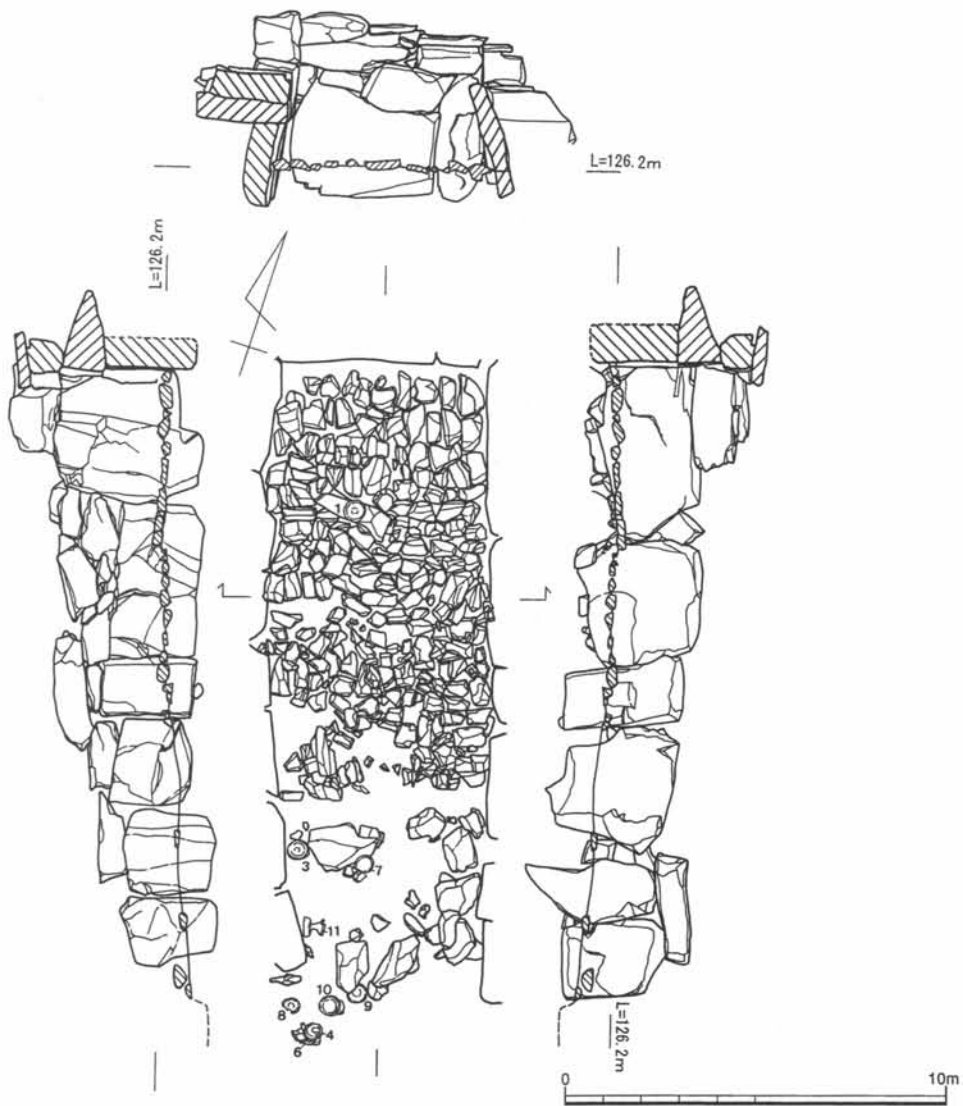
鉄釘(12・13) 残存長5.9cmのもの(1)と2.7cmのもの(2)の2点である。1の断面形は台形を呈しており、また先端には木質と思われる有機物が付着している。

不明鉄製品(14) 茎部のみの遺存で、残存長1.9cmを測る。玄室礫敷上より出土。

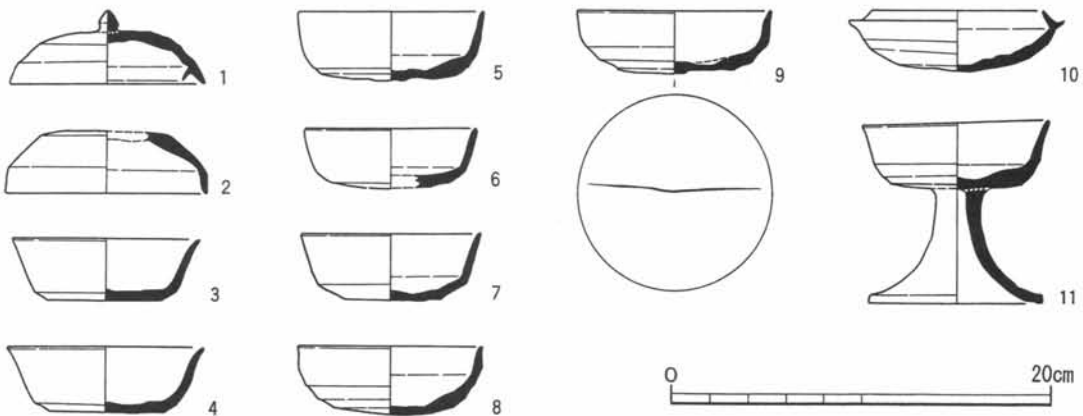
(7) 9号墳

1) 墳丘(第42図)

9号墳は、東側の山腹に立地し、2号墳の北に約20m離れた急峻な斜面上に築造されている。2号墳との比高差は、約6mを測る。墳丘は山側斜面を半円形に地山まで削り出して築成されるが、表土下約0.3mでは岩盤が広がり、この岩盤をさらに掘り崩して、幅約0.5m、深さ約0.4m

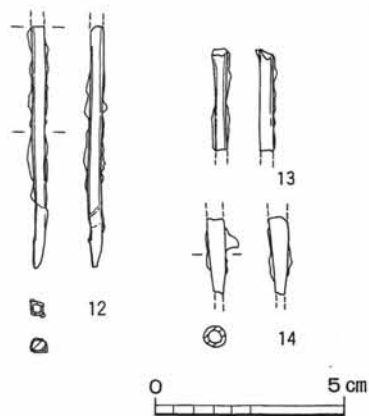


第39図 8号墳石室実測図



第40図 8号墳出土土器実測図

の半月形の溝を掘削している。石室は、斜面に対して斜交するように構築されるため、山側の掘削では岩盤が約0.7m掘り込みまれる。谷側では、墳丘のほとんどが盛土によるとみられるが、斜面下への流失が著しい。羨(玄)門部の両側には、墳丘基底に沿って配される小石材を検出した。



第41図 8号墳出土鉄器実測図

第41図 8号墳出土鉄器実測図
 中央部の石材は、縦位に配置し、開口部側は2段に積み、目地を合わせる傾向がみられる。基底石よりも上位の石材は基本的に横位に積まれている。左側壁も基底石は7石から構成され、右側壁と同様に玄室奥には特に大きな石材を横位に据えている。1段目の比較的小形の石材は縦位に置かれるが、2段目以上はやや扁平な石材を横位に積んでおり、目地を合わせている。奥壁は、2石の基底石を立てて据える。この上面のラインがほぼ両側壁の目地と一致し、構築の工程を反映したものと考えられる。2段目以上の石材は、いずれも扁平な石材を横位に置く。9号墳は、石材の抜き取りを受けず、また奥室の石材は、岩盤を一部掘り抜いて構築されるため、遺失がほとんどみられず、現存する最上部の石材上面にはほぼ天井石が架構されと考えられる。

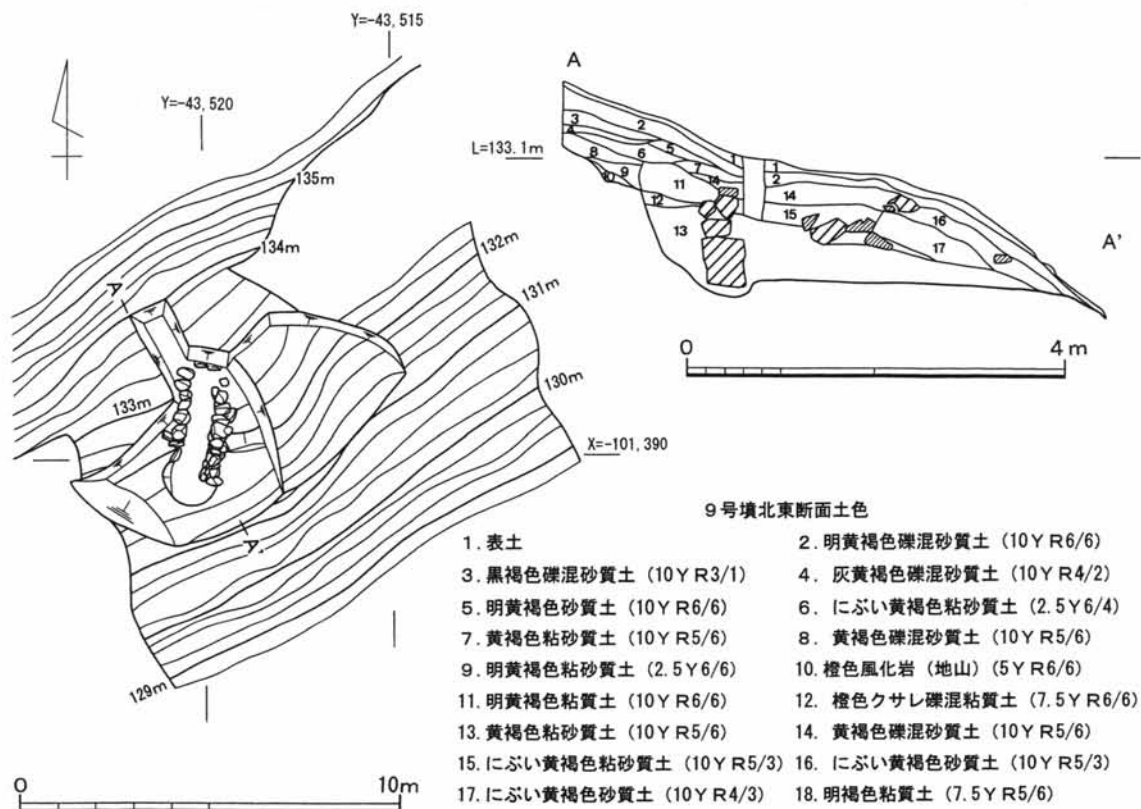
床面では、石材が奥壁手前に1石と、中央南寄りに4石検出している。約1.6m離れて配され

装飾的な効果だけでなく、羨門部周辺の土止めの機能を果たしたものと考えられる。

2) 石室(第43図)

南に開口する無袖式横穴式石室である。石室全長3.4m、玄室奥幅0.7mを測る。石室は、天井石は遺失しているものの、全体に良く遺存しており、奥壁部における床面からの高さは、残存高約0.95mを測る。石室の主軸は、N10°Eを測る。

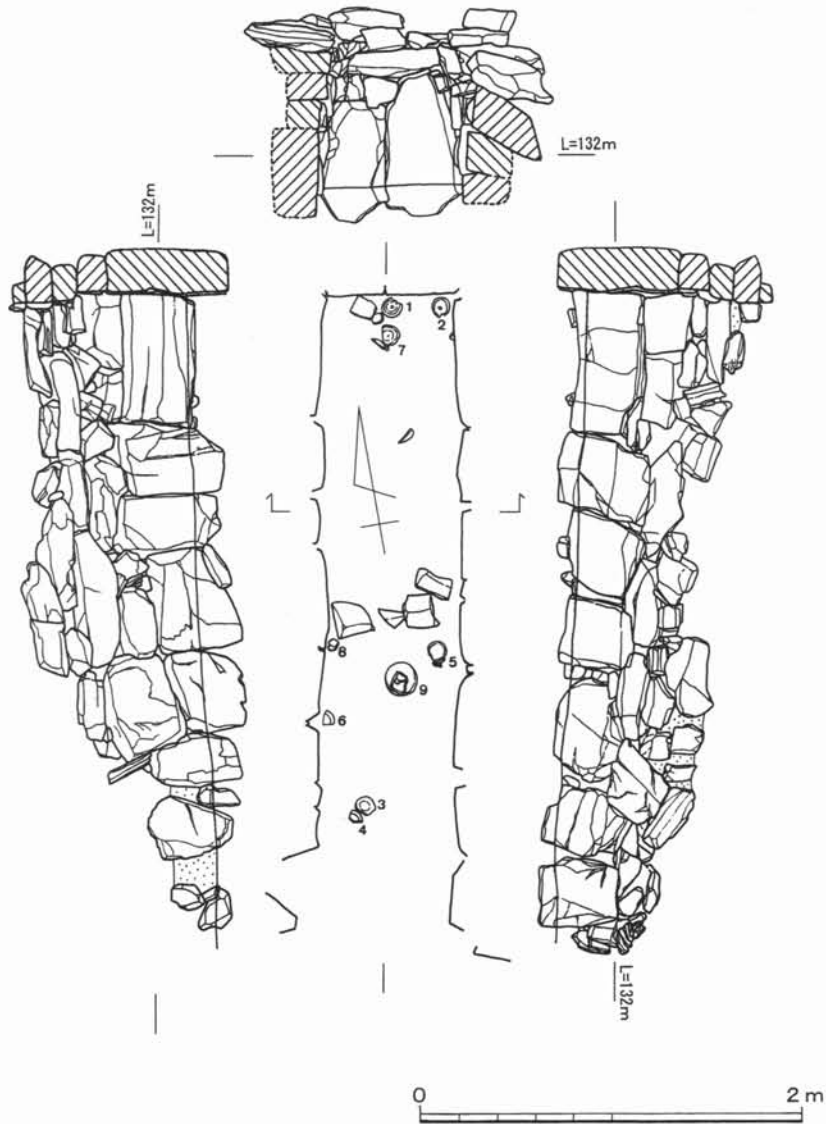
石室構造のうち、右側壁は約0.7mの比較的大きな基底石を据えるが、特に玄室奥には大形の石材を横位に据えている。中央



9号墳北東断面土色

- | | |
|--------------------------|---------------------------|
| 1. 表土 | 2. 明黄褐色礫混砂質土 (10YR6/6) |
| 3. 黒褐色礫混砂質土 (10YR3/1) | 4. 灰黄褐色礫混砂質土 (10YR4/2) |
| 5. 明黄褐色砂質土 (10YR6/6) | 6. にぶい黄褐色粘砂質土 (2.5Y6/4) |
| 7. 黄褐色粘砂質土 (10YR5/6) | 8. 黄褐色礫混砂質土 (10YR5/6) |
| 9. 明黄褐色粘砂質土 (2.5Y6/6) | 10. 橙色風化岩 (地山) (5YR6/6) |
| 11. 明黄褐色粘質土 (10YR6/6) | 12. 橙色クサレ礫混粘質土 (7.5YR6/6) |
| 13. 黄褐色粘砂質土 (10YR5/6) | 14. 黄褐色礫混砂質土 (10YR5/6) |
| 15. にぶい黄褐色粘砂質土 (10YR5/3) | 16. にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/3) |
| 17. にぶい黄褐色砂質土 (10YR4/3) | 18. 明褐色粘質土 (7.5YR5/6) |

第42図 9号墳丘平・断面実測図



第43図 9号墳石室実測図

ているが、奥壁側の石材は平坦面を上にし、中央よりの一群と上面のレベルを合わせていることから、一対の棺台の可能性が高い。出土土器から7世紀前半の築造と推定される。

3) 遺物(第44図)

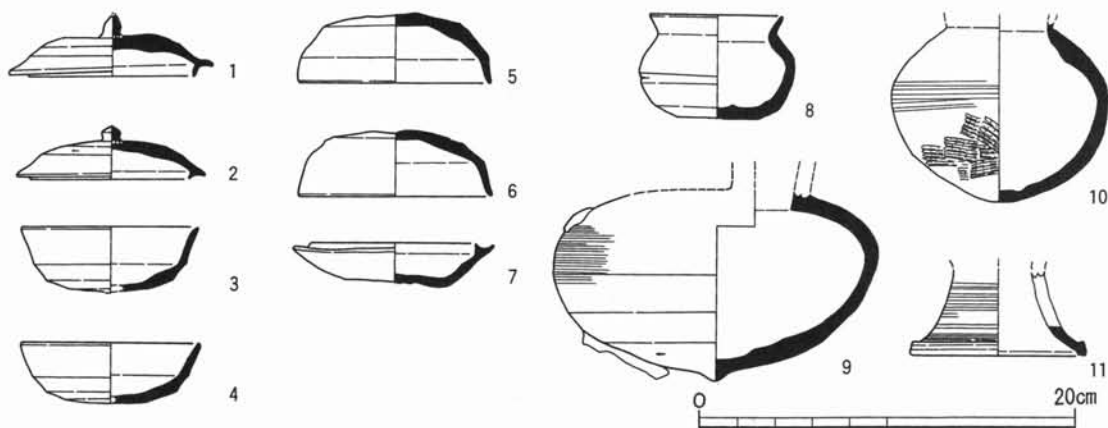
a. 土器

出土遺物はすべて須恵器で、大きく3群に分かれ、奥壁寄りで1・2・7須恵器杯が、また中央石材群の南側では5の杯蓋、6の須恵器短頸壺と9の横瓶が正位に置かれた状態で出土し、さらに羨(玄)門部周辺で須恵器2・4が出土した。6は右側壁沿いで出土した。他の遺物は崩落した入口部付近で検出した。須恵器は、陶邑TK217型式に相当するものである。

(8)10号墳

1) 墳丘(第45図)

10号墳は、東側の山腹に築造された横穴式石室墳のうち、最も谷入り口側に立地する。調査前



第44図 9号墳出土土器実測図

の状況は、石室の石材が一部露出していたが、墳丘については石材の抜き取りの際の削平および流失が著しく、僅かに高まりがみられるに過ぎなかった。

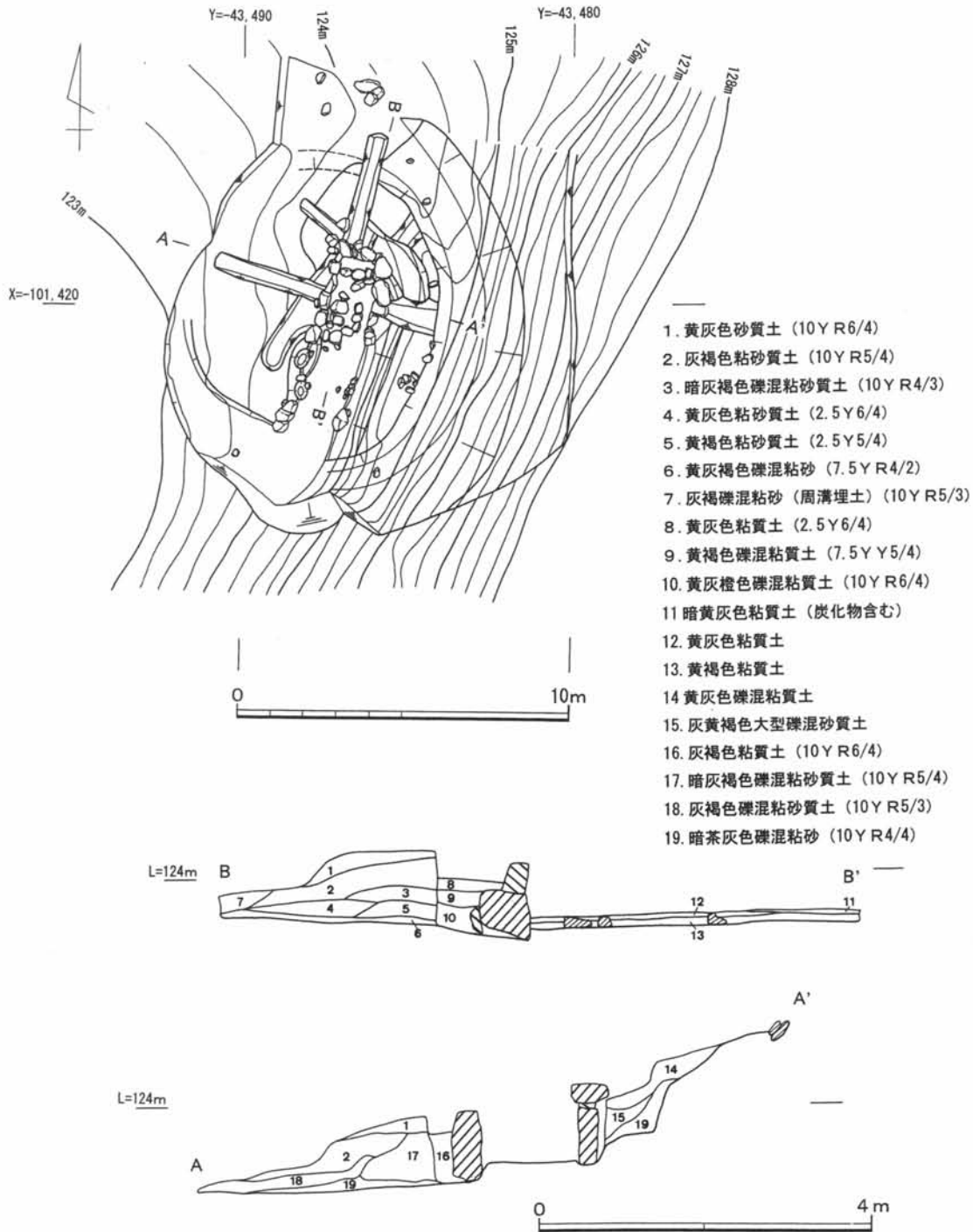
墳丘の断割り調査によって、丘陵側の切り離しが明確になり、直径約10mの規模をなす円墳として復原できる。墳丘は、丘陵地形を有効に利用しており、山側の石室掘形を深く掘削することで、地山を墳丘に取りこんでいる。石室は、地山面を深さ約1.3mまで、断面「L」字形に掘り込み、丘陵斜面と平行して構築している。丘陵部との切り離しに、山側に半月形の溝が掘削されている。盛土部分は丘陵側では3分の1程度であるが、谷側では基底部から盛土によって築成されている。石室は、石室開口部を南に向けるため、丘陵斜面に平行に構築されたと考えられるが、そのために前庭部は丘陵の地山面を深く「L」字状に掘削して西側へ繋げている。

2) 石室(第46図)

10号墳は南に開口する無袖式横穴式石室である。石室の規模は、推定全長約5.6m、幅約1.3mを測る。石室の主軸は、N17°Eをとる。天井部は大きく削平され、石材の多くは後世の抜き取りを受けている。

石室構造は、右側壁の基底石5石が遺存し、比較的大きな約0.7~0.8mの石材が縦位に並べられている。さらに約1.8m離れて、約1mの石材が横位に配置されていた。この南端の石材の位置は、基底石のラインからやや西側にずれることから、当初は天井石の可能性があるとみられた。しかしながら、左側壁の僅かに残存している基底石や石室掘形も、羨門部に近いところではやや西寄りにラインを取っていることから、南端の石材もほぼ右側壁のライン上にあるとみられ、原位置を保っていると考えられる。その基底レベルは、奥壁側の石材より高い位置にあり、羨(玄)門部からゆるやかなスロープをなして一段下がり、玄室床面が形成されたとみられる。

玄室床面には、右側壁寄りで幅約0.5m前後の石材が主軸に平行に面を揃えて並べられていた。石材は4~5石から構成され、それぞれの石材には幅約0.2mほどの厚みがあるが、上面のレベルをおおよそ合わせていることから、棺台として使用されたものとみられる。また、奥壁の前面に4~5石の石材が集められ、先にあげた棺台石材群の東側にも3石の石材が主軸方向に並べられているが、これも南北でおおよそ面を合わせていることから、棺台とみることができよう。10号墳の出土土器は6世紀末~7世紀初頭に築造されてものと推定される。



第45図 10号墳丘平・断面実測図

3) 遺物

a. 土器(第47図)

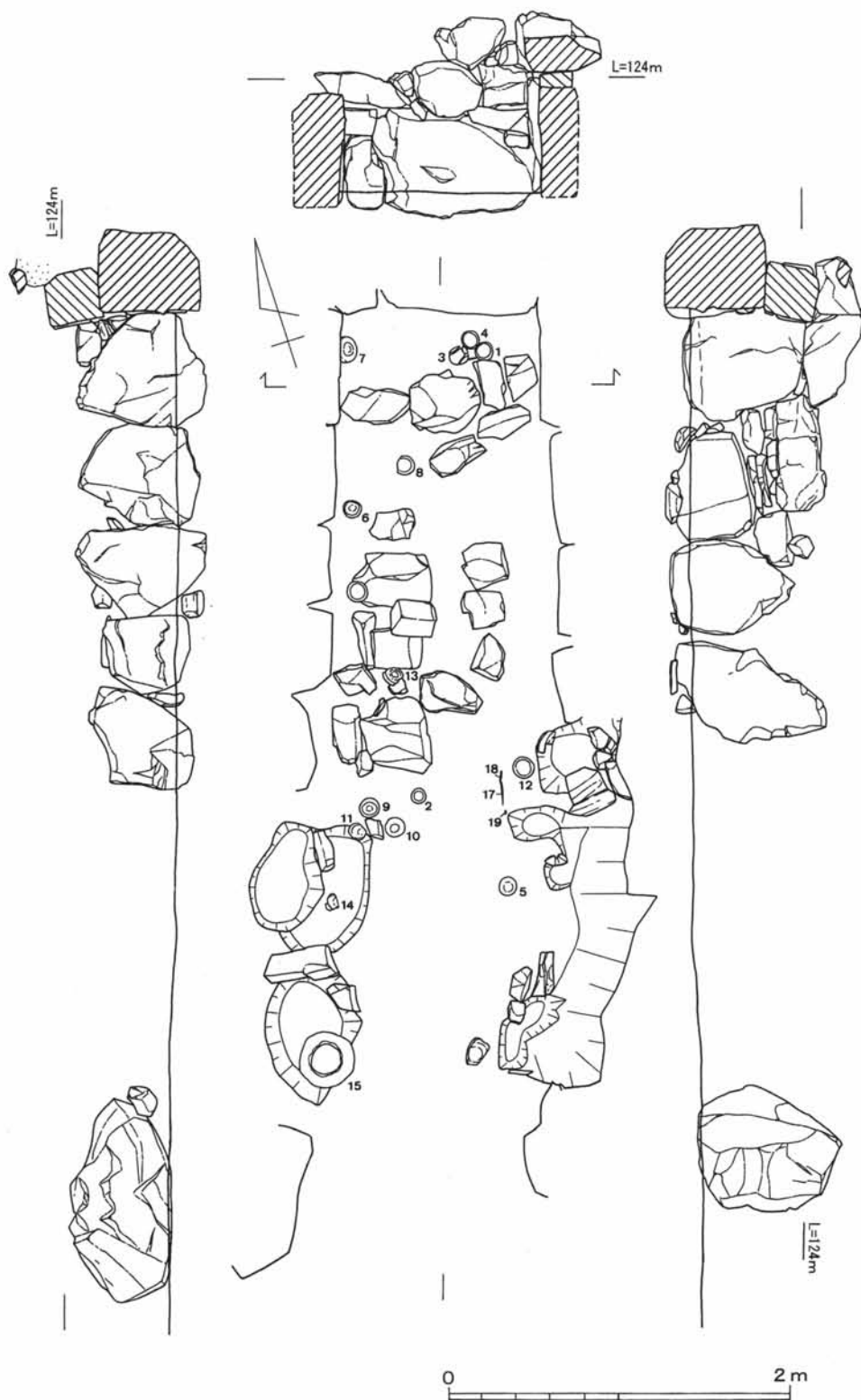
出土土器はすべて須恵器で陶邑TK209型式～TK217型式にほぼ相当する。

右側壁寄り

棺台部からは9～10の杯身が出土している。6・7棺台北側で出土した。

左側壁寄り

奥壁と棺台部の間から1・3・4が出土した。5・8・12・14は玄門部よりで散漫に出土。



第46図 10号墳石室実測図

出土地不明

15が玄門部掘削中に出土した。

b. 鉄器(第48図)

鉄鏃3、不明鉄器1が出土している。

鉄鏃(16・17・18) 16は刃部幅が身部幅より広く、平面形は柳葉形である。断面形は三角形を呈する。身部の断面形は長方形である。17は一部の頸部と基部が残存しており棘関をもつ。基部には樹皮巻が残る。

不明鉄器(19) 断面は長方形を呈し頸部の関は角関で、木質が付着している。

(9)11号墳

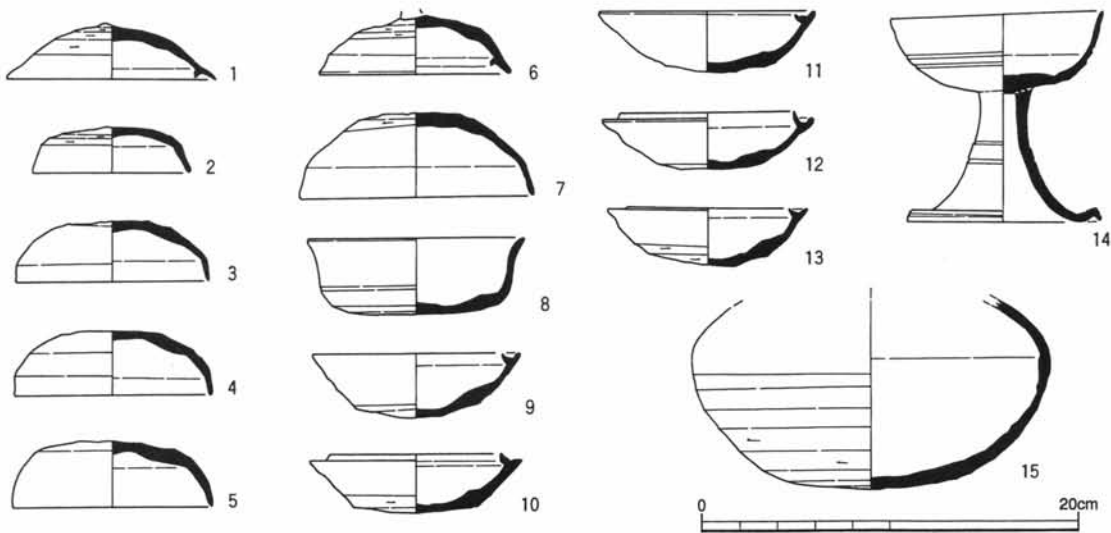
1) 墳丘(第49図)

11号墳は、東側の山腹の斜面裾に位置し、10号墳の北側に立地する。墳丘は上半部の盛土の流出が著しく、さらに埋没しており、調査前にはほとんど墳丘の高まりは認められなかった。墳丘は、まず丘陵斜面を半円形に掘削して地山を削り出し、平坦面を造り出したのちに、地山面を掘り込んで石室を構築している。墳丘の周囲には、幅約1.2mの円形の周溝が設けられている。周溝の底部を墳丘裾として墳丘規模を復原すると、約9mを測る。墳丘の裾部には、外護列石が巡っていたとみられ、丘陵東側の一部に列石が確認できる。

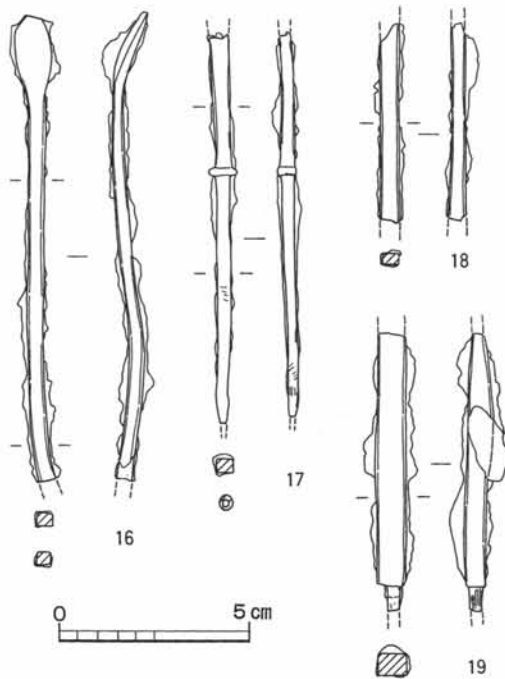
2) 石室(第50図)

石室は、南に開口する無袖式横穴式石室である。全長6.0m、玄室奥幅1.1mを測る。左側壁の遺存状況は良好で、中央部ではほぼ本来の高さを保っていることから、石室高はおおよそ1.3mと推定される。主軸は、N3°Eを測る。

石室構造は、右側壁は斜面谷側にあたるため、石材が多く遺失しており、基底石のほか、一部に段積みを残すに過ぎない。基底石は8石からなる。幅約0.7~0.8mの石材を基本的には横位に据える。奥壁側から4石は特に大形の石材を用いており、無袖式であるが、玄室と羨道部の境界



第47図 10号墳出土土器実測図



第48図 10号墳出土鉄器実測図

を意識したものとみられる。左側壁は山側にあり、石室掘削を深く掘削しているため、石材の遺存状況が良く、奥壁側はほぼ原状を保っているとみられる。基底石は8石からなり、基本的に横位に据えられるが、玄室最奥部の基底石のみは縦に据えられ、奥壁や右側壁と目地を通す意識があるものと考えられる。奥壁側では、石材は4～5段に積み上げられている。2段目よりも上には大形の石材を基本的に横位に積むが、やや乱雑な積み方である。奥壁は、基底石に幅1.2mの大形の石材1石を据え、小形の石材を2～3段に積み上げる。

石室床面は、奥壁側中央に主軸に平行して幅0.6～0.7mの石材を配置する。厚さ0.3mほどの厚みのある石材であるが、石材上面のレベルはほぼ同じであり、棺台として使用されたとみられる。

この石材の両側では、レベルをあわせて小石材が左右に0.4～0.5mおきに配されており、棺台の補助として用いられたとみられる。中央部の石材の大きさから、2棺を併置した可能性もある。床面南側にも石材がおおよそ主軸方向に配されているが、これらも棺台となる可能性が高い。床面からは、奥壁周辺と、中央部さらに羨(玄)門部で遺物が集中する。出土遺物には、鉄器がみられず、長頸壺などの壺類が多く含まれる。石室南端には、幅0.4mの石材を中心に東西に石列を検出したが、これらの石材は閉塞石と考えられる。羨門部西側の石材は、追葬時の修築に伴うものであろう。中央の石材の下部で、須恵器大甕が出土しており、閉塞時の墓前祭祀に伴うものと推定される。出土した須恵器の型式から6世紀末～7世紀初頭頃の築造と推定される。

3) 遺物

a. 土器(第51～53図)

1～3が土師器で、残りはすべて須恵器である。おおよそ陶邑TK209型式に該当する。閉塞石中から34・36の甕が出土した。また入口部の周溝内からは35の横瓶が出土している。他の遺物はすべて石室内出土で原位置が抑えられている。

b. 耳環(第54図37～39)

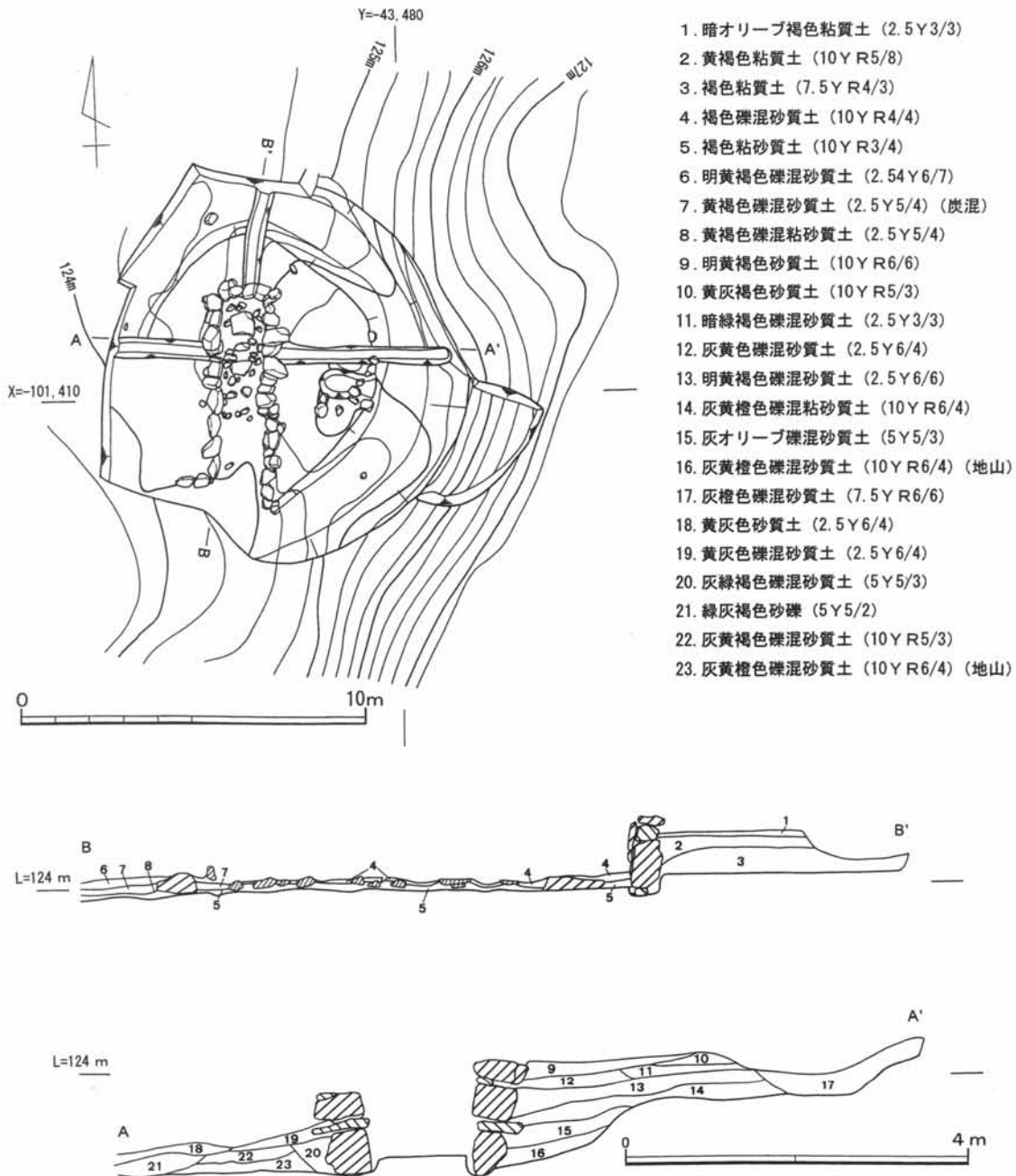
中央棺台付近から2点、奥壁近くから1点出土している。鍍金で、表面には緑青が現れる。

(10)12号墳

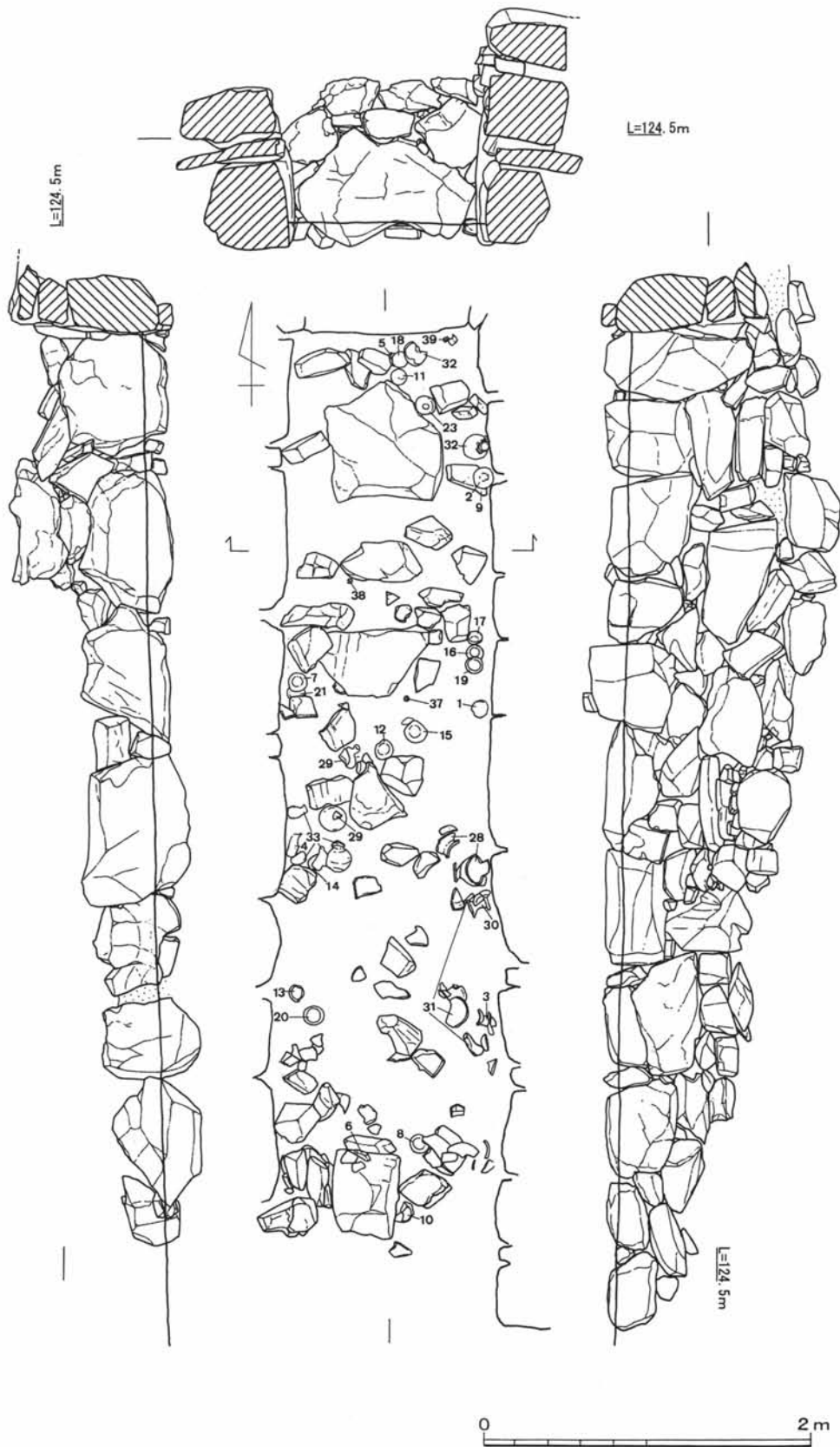
1) 墳丘(第55図)

12号墳は、谷を挟んだ東側の山腹に立地する円墳である。墳丘は、調査前から高さ約2mの高まりが認められ、周辺の地形の状況から、山側の斜面を大きく断面「L」字状に開削しているとみられた。山側の墳丘東半は調査地外にあたり、断ち割り調査等を行っていないため、整形の状況

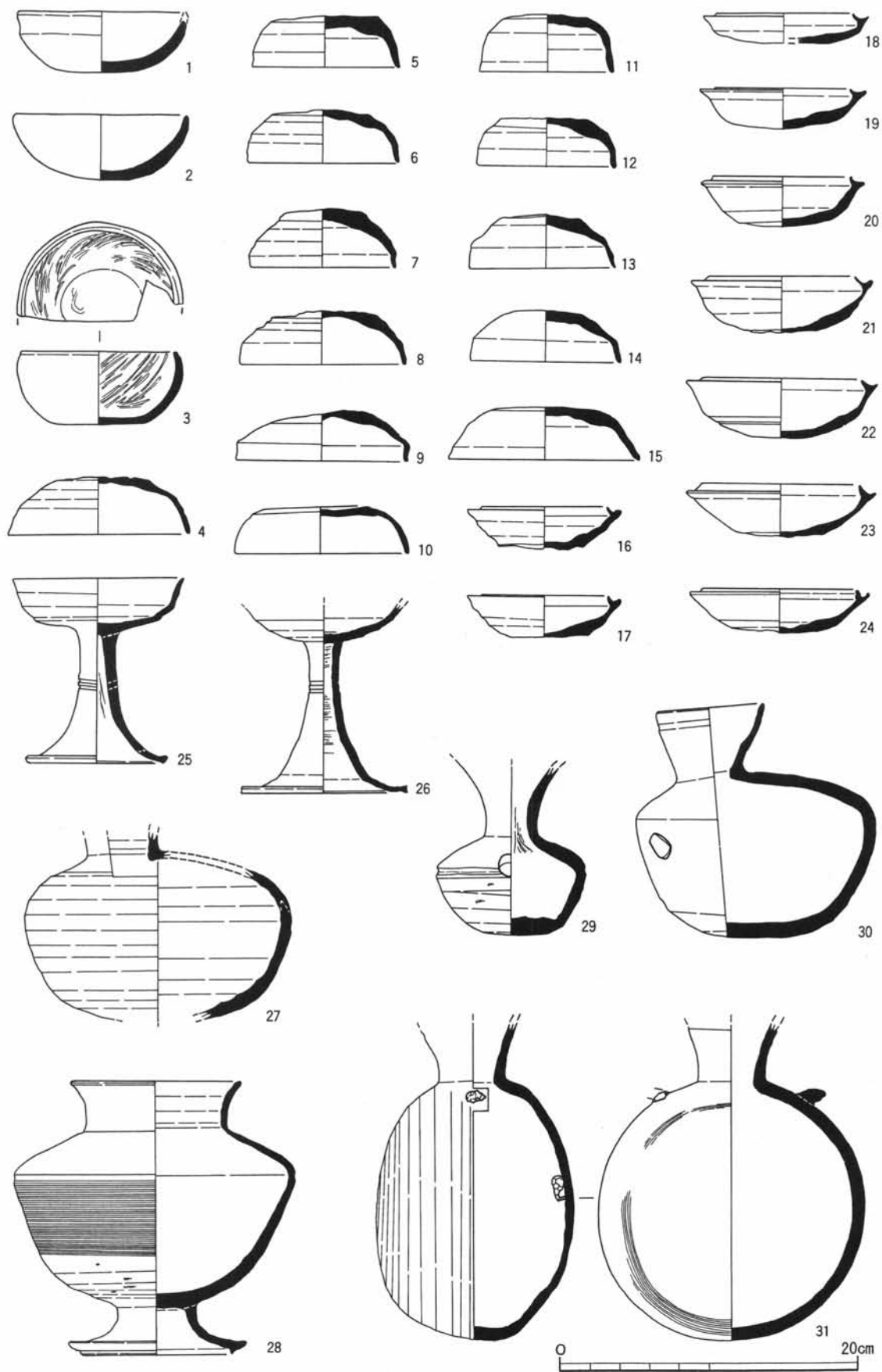
は明らかではない。墳丘西半の調査では、石室は斜面と平行に地山面を約0.8m掘り込んで構築し、谷側にあたる墳丘の西半は、ほぼ盛土からなることが判明した。墳丘外面には、人頭大の石材が円弧を描いて2段にめぐらされた状況が確認された。下段の列石のレベルは、ほぼ石室の基底レベルとおなじであり、その西側にもコンタラインの張り出しがみられることから、墳丘裾は下段列石よりもさらに西の標高125m(掘削後)付近にあると推定される。ここから墳丘規模は約11mと復原できる。山側の列石は、現状では2段が確認されるが、さらに墳丘裾部にも巡っていた可能性がある。これらの列石のうち、特に上段の列石は検出レベルが低く、墳丘の外表ではなく、内部に積まれていた可能性が高い。列石の機能としては、まず封土の崩壊を防止するための墳丘構



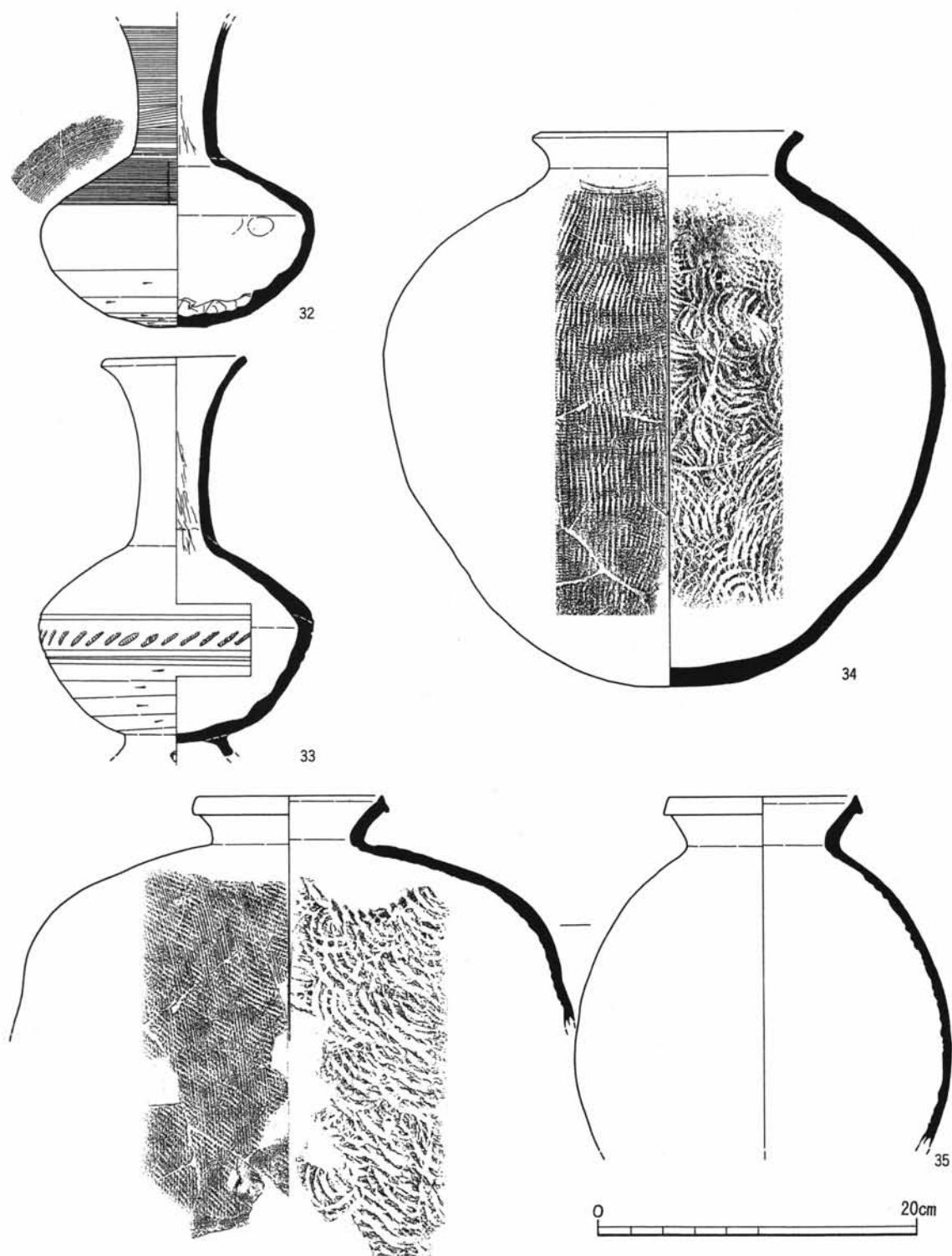
第49図 11号墳墳丘平・断面実測図



第50図 11号墳石室実測図



第51図 11号墳出土土器実測図(1)

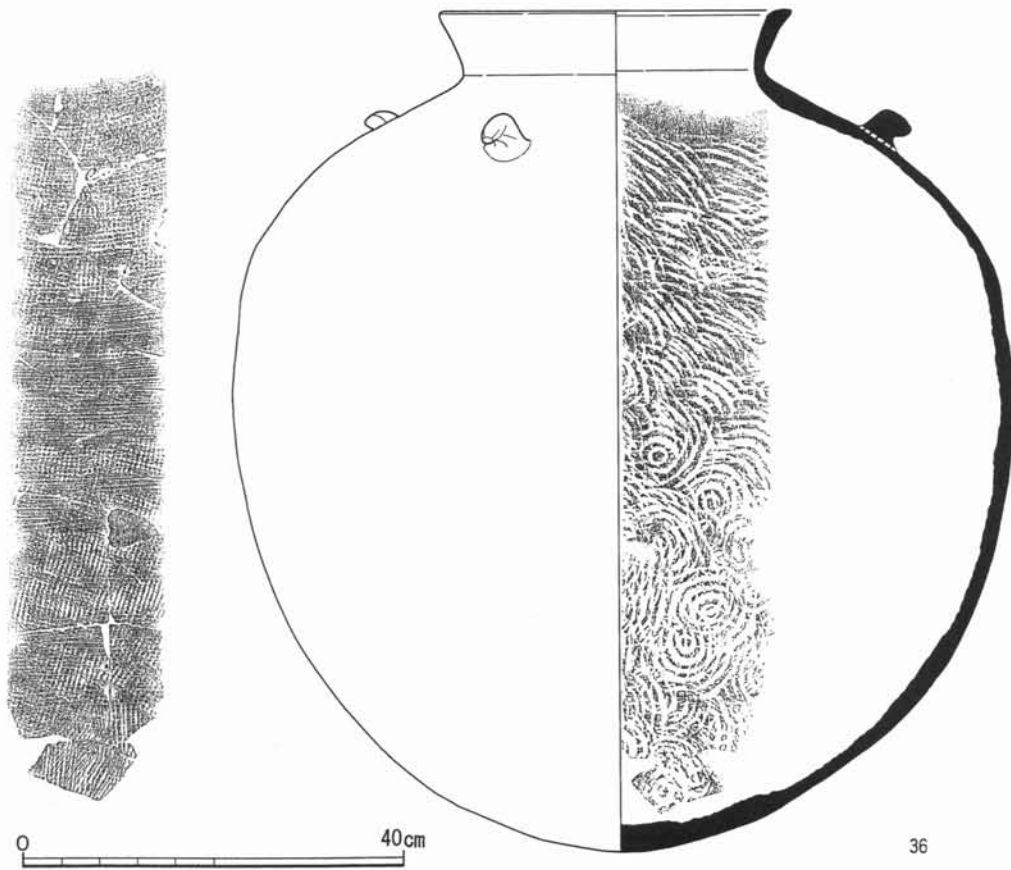


第52図 11号墳出土土器実測図(2)

築法としての機能が重視されたものであろう。

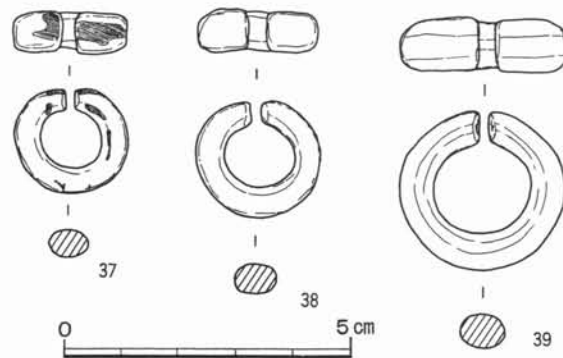
2) 石室(第56・57図)

石室は、南に開口する無袖式横穴式石室である。石室全長5.3m、玄室奥幅1.0m、中央部最大幅1.15m、石室の主軸は、N25°Eを測る。石室は全体に遺存状況が良好だが、左側壁は東側が土圧のため内傾している。まず、右側壁は11石の基底石からなり、4～5段に積まれている。奥



第53図 11号墳出土土器実測図(3)

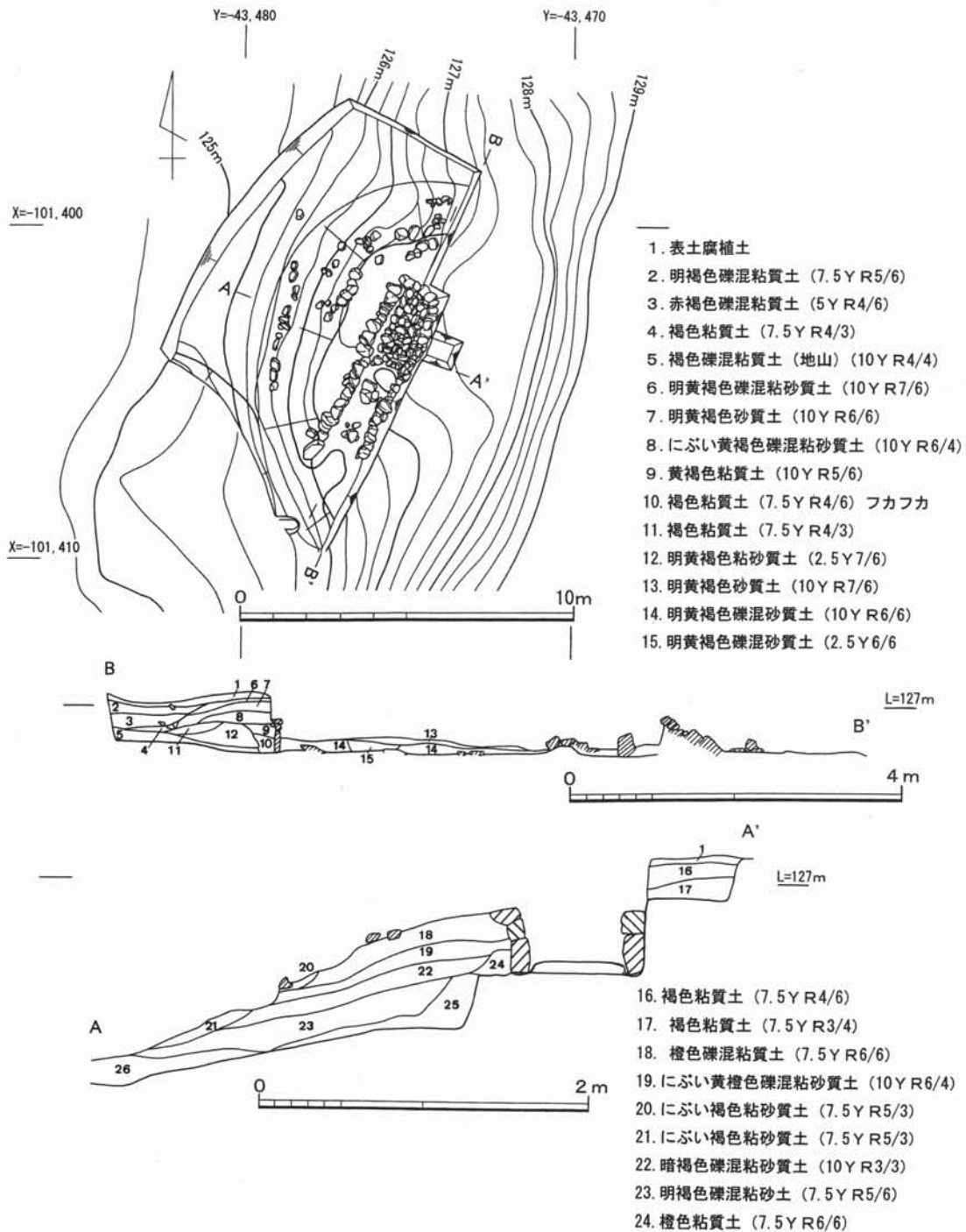
から5石目までは、幅約0.7~0.9mのやや大形の石材を使用し、基本的には横位に据える。2段面以上は、0.3m~0.4mの小形の石材を積み上げている。左側壁は、奥から6石目までの基底石は、右側壁と同様、やや大形の石材を用いるが、6石目から南側は石材の大きさは揃っていない。2段目以上の石積みもまた、北側は整美に横位に積むものの、南側は乱石積み状となり、積み方に明らかな差が認められる。



第54図 11号墳出土耳環実測図

左右側壁ともに、積み方の変化がみられる東西のラインは一致し、玄室と羨道の意識の違いが反映したものと考えられる。北側の石積みは、小石材ながら、やや持ち送りが認められる。奥壁は、3~4段の石積みが遺存する。基底石には、幅約1.0mの大形の石材1石を据え、2段目からは、0.3~0.4mの小形のやや扁平な石材を横位に積み上げている。

床面は、奥壁から南へ約2.6mにわたって0.2~0.3m大の石材を用いて磔敷きが構築される。また、前述した両側壁の石材に積み方の違いがみられるラインでは、5~6石の石材を検出し、石室の南端では、約2.2mの広がり小石材を積み上げた閉塞石を検出した。さらに、閉塞石の



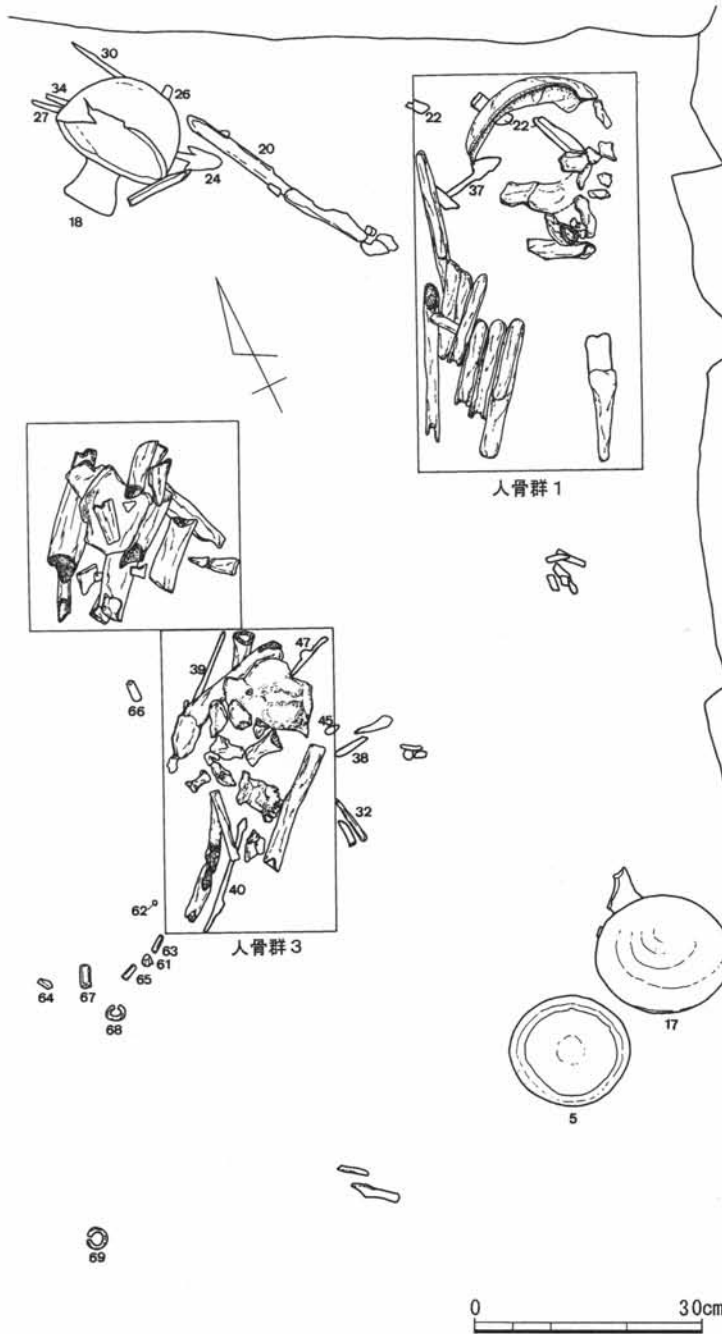
第55図 12号墳墳丘平・断面実測図

除去後に小土坑を検出し、須恵器甕・高杯が出土している。閉塞時の儀礼に伴うものであろう。

出土遺物は、礫敷き上からは、須恵器、玉類、鉄器類のほか、人骨が出土している。人骨は、玄室奥の北東隅(人骨群1)、礫敷き中央部の右側壁側(人骨群2・同3)で、3群に分かれて出土した。北東隅で出土した人骨群1は、頭骸骨の一部を含み、大腿骨を横に重ねて並べ置いていたことから、改葬して玄室奥に整理されたと推定される。人骨群2・3は、同一人物の人骨の可能性があり、ここでも頭骨と大腿骨が重なる部分がみられる。この周辺では、碧玉製玉類や、耳環が出土しているが、原位置失われていると考えられる。人骨や副葬品の出土位置から、3～



第56図 12号墳石室実測図



第57図 12号墳人骨および装飾品出土状況図

軸平行方向に中心線で2分し、更に直行方向に3分割した6区域で出土位置を分けた。奥壁向かって右がA、左をBとし、以下開口方向に向かって右側から左へ順にA～Fまで割り振った。鏃は大きく平根系鉄鏃と長頸鉄鏃の2種類で、さらに身の形を基準にしてそれぞれをI類、II類に細分した。

①A区人骨群1付近：鉄鏃3、不明鉄製品1が出土している。

鉄鏃

平根系鉄鏃II類(37) 大形で平面三角形の身部をもつ。身部の断面形は両丸で、関はわずかに末広がりになる台形関である。

4体の埋葬が考えられる。遺物から6世紀末～7世紀初頭に築造されたものと推定される。

3) 遺物

a. 土器(第58図)

須恵器類の出土位置は、奥壁の手前で出土した17の長頸壺、磔敷きの南側で左側壁に沿って群をなすもの(5・6・9・17)、磔敷き南端で右側壁に沿って群をなすもの(3・8・19)、また石室石材の積み方に違いがみられる中央南寄りで石材群とともに出土しているもの(2・4・13・15)、さらに閉塞石中(1・16)および閉塞石除去後に検出した小土坑(10・11・12)から出土したのがある。13は墳丘内から出土した。9は内面に布圧痕、底部に木目がある。出土土器は10を除くとすべて須恵器である。須恵器はおおよそ陶邑TK209型式に帰属する。

b. 鉄器(第59図)

遺骨が3か所に集められた状態で遺存しており、それに伴うようなかたちで鉄鏃を中心とする遺物が出土した。以下では、石室を主

長頸鎌 I 類(36) 長頸鎌の一群のうちさじ形の身部をもつものである。身部断面は片丸で頸部断面は隅丸方形、茎部断面は円形となる。頸部の関は棘状関である。茎部の矢柄構造は、木質で包み込んだ上に樹皮で横方向の樺巻きを施されている。

不明鉄製品(22) 残存長3.6cm、残存幅1.6cm、厚みが最大で0.3cm程の鉄片。

②B区(長頸壺周辺)：鉄剣1、鉄鎌10(うち類型不明鉄鎌6)、不明鉄製品1が出土している。鉄鎌は平根系鉄鎌、長頸鎌ともにI類に属する。

鉄剣(20) A区によって出土した鉄剣である。依存状態が大変悪く図化したもの以外碎片はあるが接合や復原はできなかった。

鉄鎌

直揃鉄鎌(23) 身部に三角形の透かしがほどこされている。

平根系 I 類(24) I類のなかでもやや大形の身部を持つものである。身部の断面形は両丸で、頸部および茎部は方形。関はわずかに末広がりになる台形関である。

長頸鎌 I 類(27~29) 長頸鎌 I 類の中でより頸部の長大化したもの。27の関は棘状関である。27・28はともに茎部には木質が残っている。

類型不明鉄鎌片(25・26・30・33~35) 25・26・30は鉄鎌の身部と頸部の一部で、I類に属するが詳細は不明である。32~34は鉄鎌の身部の一部で、33は全体に有機質の付着が見られる。

不明鉄製品(30) 残存長2.2cmを測る。

③C区：鉄鎌4(うち類型不明鉄鎌3)、不明鉄製品1が出土している。

鉄鎌

長頸鎌 I 類(51・52) 身部はさじ形で、やや大きめのもの。また、現状では接合しないが、その出土状況から同一個体の頸部と思われる。

類型不明鉄鎌片(38・49) 鉄鎌片で、頸部と茎部の一部が残存している。茎部断面形が円形で棘状関を持つといった特徴から、恐らくI類の長頸鎌であると思われる。38は身部と茎部の一部が残存している。

不明鉄製品(32・50) 32は斜関をもつ製品である。50は断面形が方形の鉄片である。釘の可能性はある。

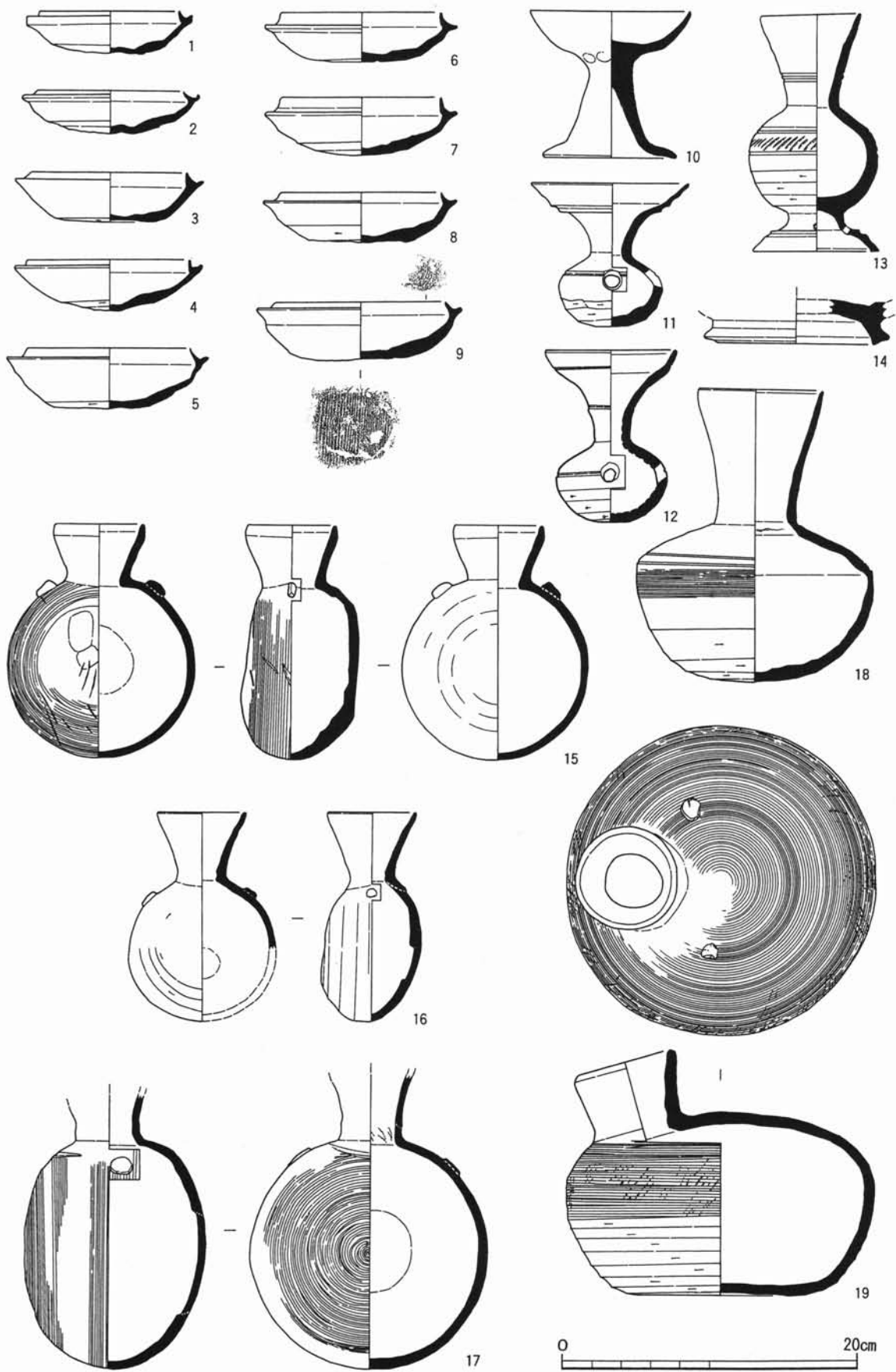
④D区(人骨群2付近)：鉄鎌14(うち類型不明鉄鎌片10)が出土した。

鉄鎌

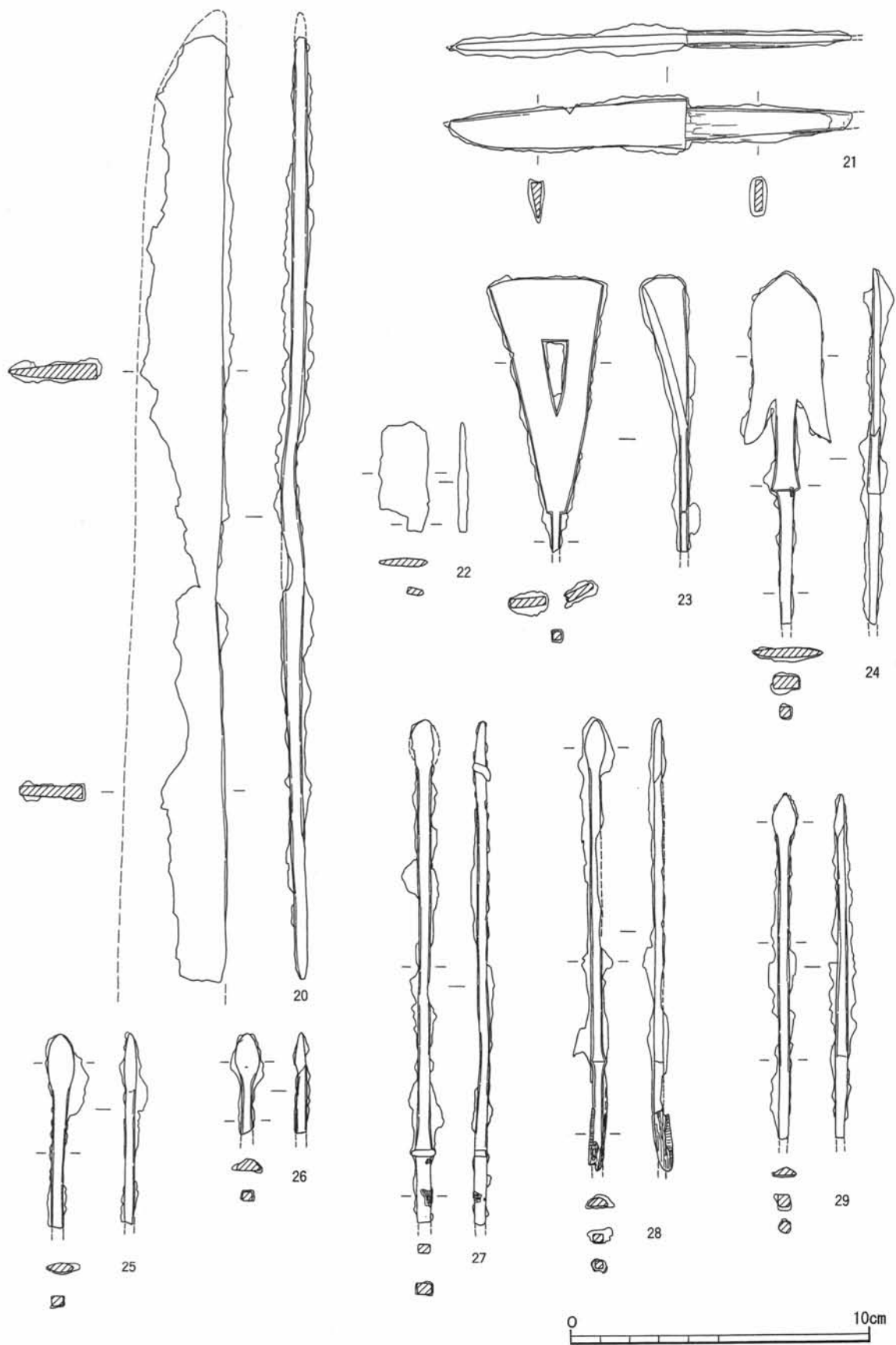
長頸鎌 I 類(39・55・56) 39は身部がやや大きめで、身部と頸部、茎部の一部が残存する。関は棘状関である。55は、身部は先が欠損し、頸部は一部残存する。頸部には樹皮巻が残る。56は身部と茎部の一部が残存。

長頸鎌(40) 断面形は身部が片丸で頸部が方形、茎部は円形である。関は棘状関で、茎部には樹皮巻が施されている。

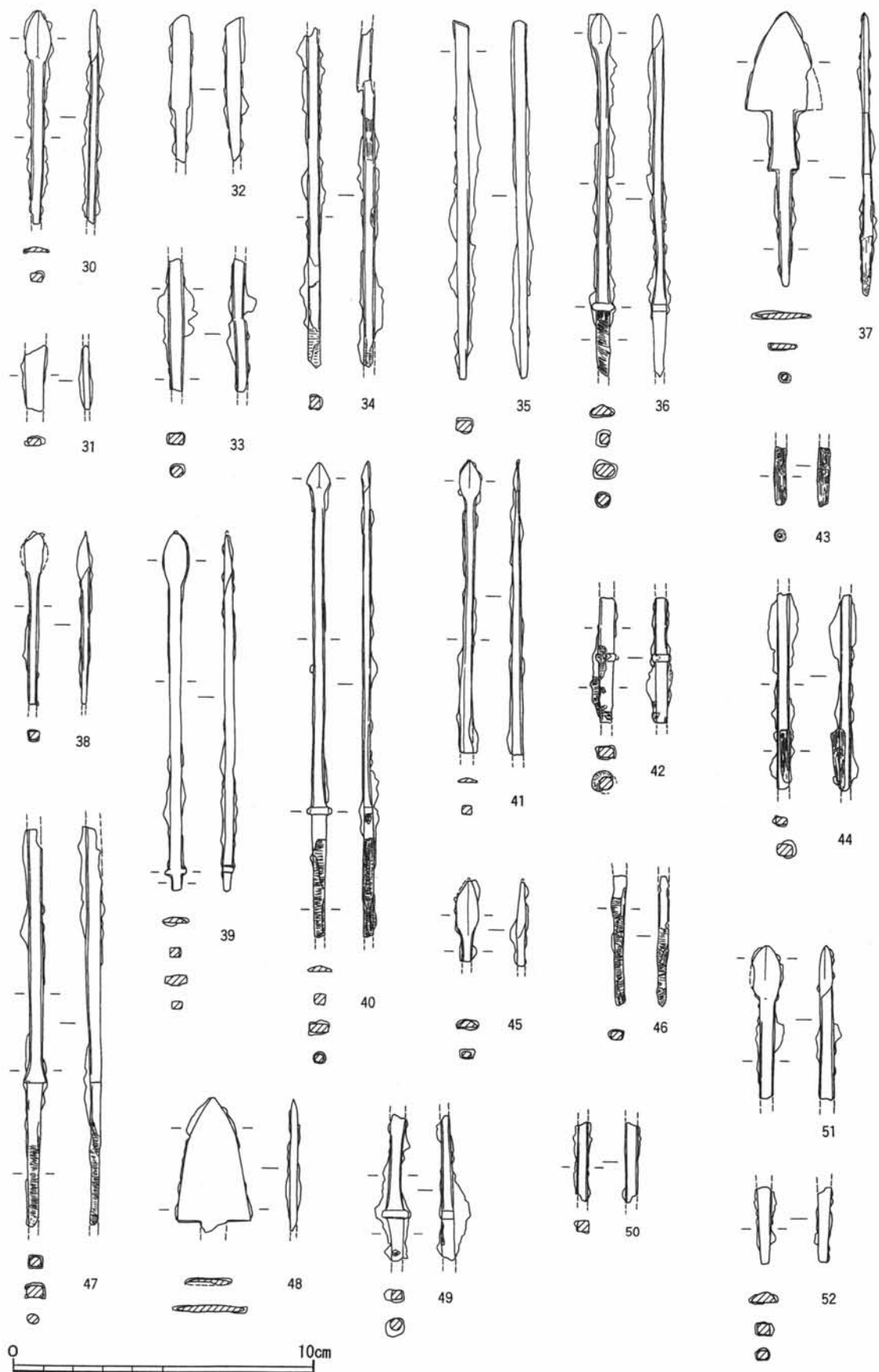
類型不明鉄鎌片(41~47・53・54・58) 41は身部と頸部の一部が残存する長頸鎌。類であるが詳細は未分類である。45は鎌身、44は長頸鎌の頸部、43、46は茎部、42は頸部と茎部の一部で



第58図 12号墳出土土器実測図



第59図 12号墳出土鉄器実測図(1)



第60図 12号墳出土鉄器実測図(2)

棘関を持つ。42～44・46には木質の付着が見られる。47は長頸鎌の頸部と茎部の一部である。関は台形関で茎部には樹皮巻が残っている。53は鉄鎌の茎部。54は鉄鎌の茎部である。一部樹皮巻が残る。58は鉄鎌の頸部および茎部である。棘状関を持ち、茎部には樹皮巻が残る。長頸鎌Ⅰ類の可能性はある。

⑤E区：鉄鎌3点が出土。鉄鎌は平根系鉄鎌Ⅰ類と長頸鎌Ⅱ類、類型不明がある。

鉄鎌

平根系鉄鎌Ⅰ類(57) 大形の身部を持つ一群のうち、腸袂三角式の身部をもつものである。身部断面は両丸、頸部および茎部断面形は方形をなす。頸部の平面形はほぼ直線的で、関部がほとんど広がらない。茎部には木質が付着している。

長頸鎌Ⅱ類(59) 小形の身部をもつ長頸鎌の一群のうち、逆刺のつくもの。

類型不明鉄鎌片(60) 鉄鎌の頸部および茎部である。頸部断面形は方形、茎部は円形。棘状関を持つ。茎部には木質が残存する。

⑥F区 鉄鎌1点のみの出土。

鉄鎌

平根系鉄鎌Ⅱ類(48) 大形で平面三角形の身部をもち、身部とわずかな頸部のみ残存する。

⑦その他

鉄刀子(21) 小形のものである。身部は切先に向けて細くなる。また、茎部には木質が残る。

c. 装飾品(第62図)

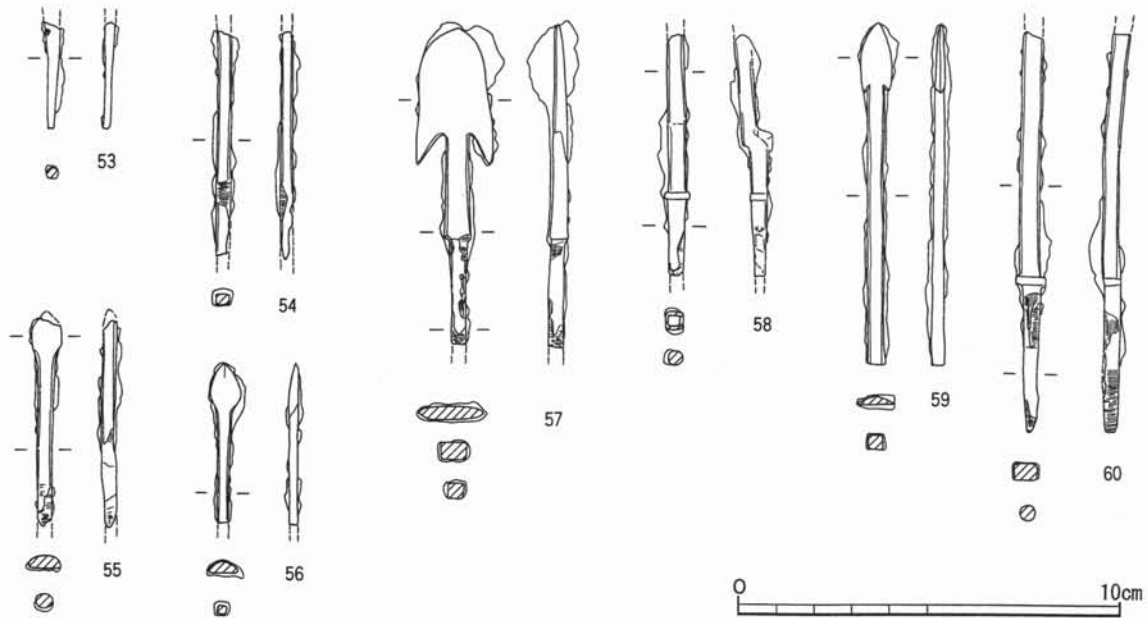
ガラス玉1・水晶製切子玉1・碧玉製管玉5・耳環2が出土している。62のガラス玉は青色を呈し、気泡が含まれる。63～67の碧玉はいずれも硬質で暗緑色を呈する。68・69の耳環はすべて鍍金で緑青が浮き出ている。

(11)13号墳(第63図)

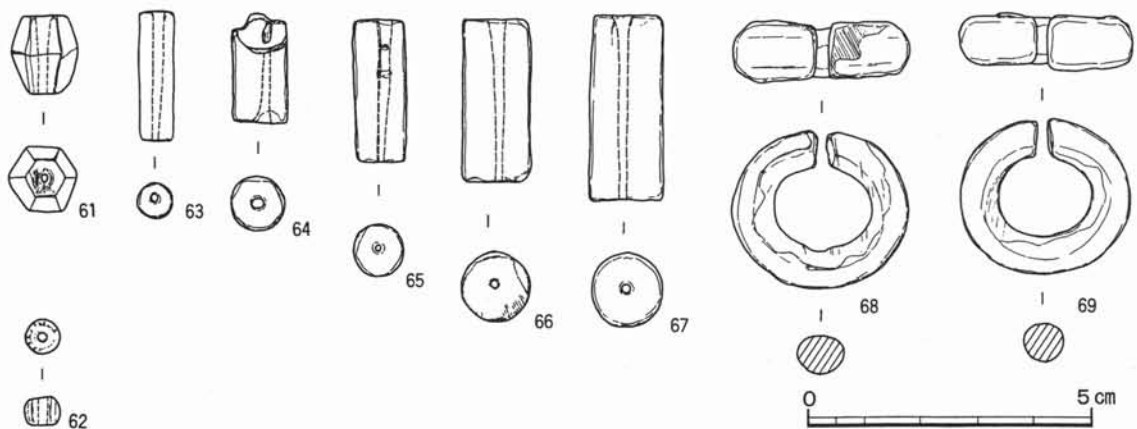
平成17年度に墳頂部に試掘トレンチを設けて横穴式石室を確認した。東側斜面に築かれた10～12号墳と同じく南に開口すると考えられる。関係機関による協議の結果、主体部を開発予定地から外し保存が図られたため、石室の調査は行わなかった。工事によって削平される斜面部についてトレンチ調査を実施した。石室の位置は現存する墳丘の谷側に偏っている。これは谷部に近い部分が浸食作用によって削られたと考えられる。この谷川の侵食は14号墳ではより顕著である。遺物等はまったく検出できなかったため時期は不明である。

5. まとめ

今回の調査では古墳時代中期の方墳3基、横穴式石室8基の発掘調査を実施し、城谷口古墳群の大半を調査した。古墳の立地する地形から南向き斜面と北西向き斜面の2群に分かれる。前者をA、後者をB群とする。A群は谷の入口部に5世紀代の方墳群(Ⅰ)、谷奥側に造られた6世紀前～後葉の石室を持つ円墳群(Ⅱ)、Ⅱ群よりも地形面的に高い位置に造られた7世紀代築造の小形円墳群(Ⅲ)の3群に細分できる。B群はすべて6世紀後葉に築造された無袖の石室墳である。



第61図 12号墳出土鉄器実測図(3)

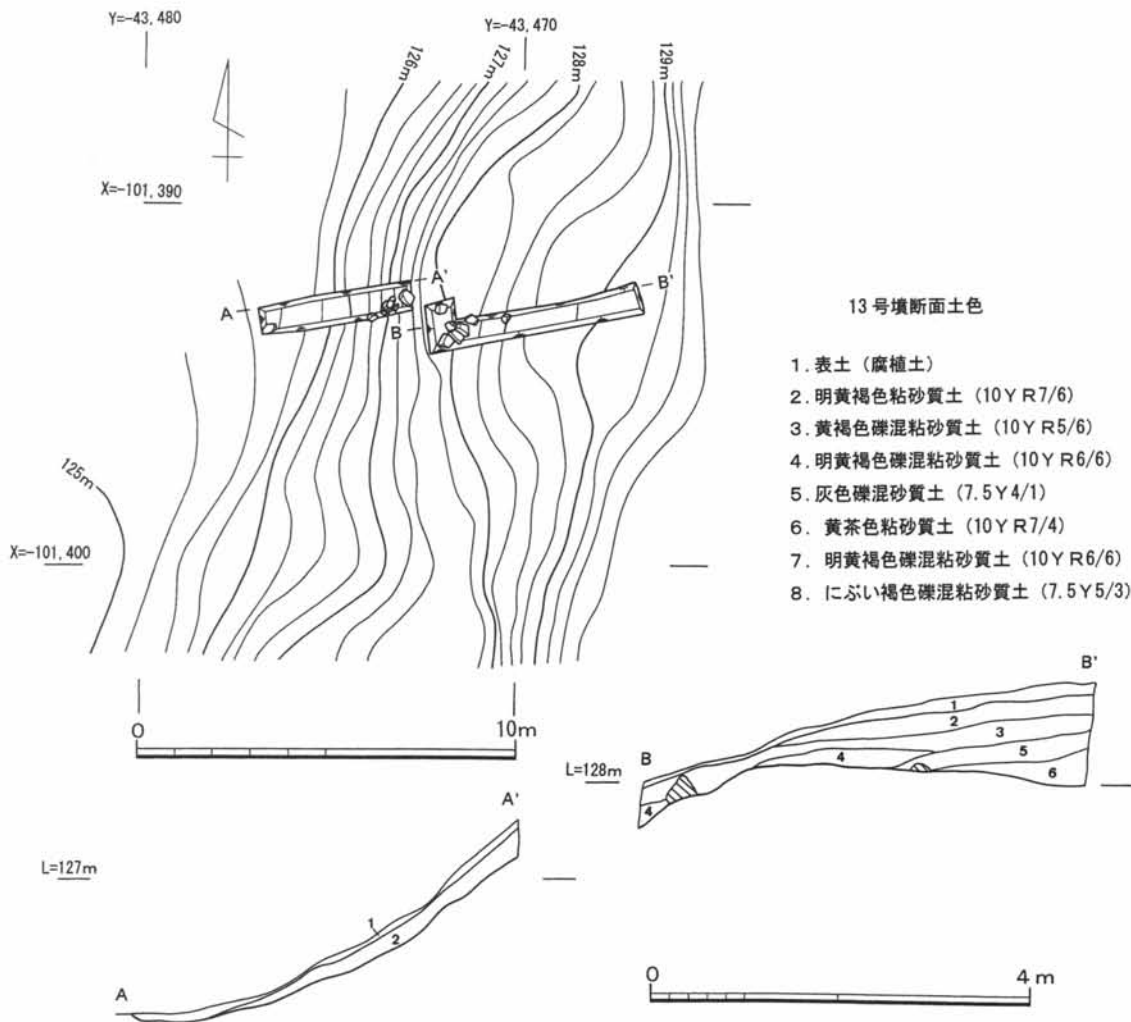


第62図 12号墳出土装飾品実測図

古墳群の変化を見ると、A I→A II→B→A IIIの年代順に並べることができる。しかしながら、A I群からは須恵器の出土が認められない。筏森山の東麓に広がる池上遺跡は古墳時代の大集落遺跡であるが、5世紀代と考えられる竪穴式住居跡から韓式系の土師質の土器や須恵器が共伴している。また、池上遺跡北側の諸橋遺跡からも古い須恵器が出土しておりこの地域の須恵器導入は5世紀前半には集落内で認められる。

A II群は2号墳が6世紀前半と古く、群構成から想定すると未調査の4号墳はさらに古く城谷口古墳群で初めて石室墳を導入した古墳と考えられる。2号墳は両袖の石室で石障を持つ構造であり、南丹地区の導入期の石室(森下1999・土井1997)に見られる形態である。A IとA IIには墳形、墳丘表面の処理および主体部の形態に隔たりがあるとともに、年代が連続的ではなく若干の差が生じている。この調査区内ではこの間隙に入る古墳は見られないが、B群の展開する斜面上方の尾根上には累々と古墳が造られており立地の変化の可能性も残される。

墳丘の作り方は、A I群の方墳はいずれも葺石を持っているがその形状は同じものはない。3号墳に見られるような段築と葺石をセットでもつのは、亀岡盆地で見られる柘塚古墳や坊主塚古墳



第63図 13号墳試掘トレンチ平面図および北壁断面図

などの大形方墳である。6号墳の低墳丘に周壕と葺石を持つものは同じ南丹市園部町の徳雲寺北1号墳に見られる。また、7号墳の平面形が台形状で葺石を持つものは徳雲寺北6号墳に見られる。徳雲寺1・6号墳では埴輪が墳丘に立てられていたが城谷口古墳群では発見されていない。また、旧園部町内の古墳では、AⅠ群の古墳程度の規模と葺石を持っている場合、甲冑が含まれている。それと比較すると城谷口古墳群は副葬品の内容においては貧弱である。

石室墳では、墳丘の周囲に1段または2段の列石がめぐる。列石の石材間は隙間があり、粘板岩片を含むしまりの悪い土の土留めの役割を果たしていると考えられる。この列石のあり方はAⅡ、B群に共通する。AⅢ群では8号墳で列石が認められるが、9号墳では検出できなかった。しかし、急傾斜地に立地し部分的にしか調査できなかったため、列石が存在していた可能性は否定できない。こうした古墳墳丘の造りかたは1世紀程度続いたことになる。

石室の造り方や、石材を注目するとAⅡ群中においても2号墳が比較的高さに比べ幅の広い良質の粘板岩やチャートを整然と積み上げているが、1号墳では大形のチャートが石室の天井部を支えており、石畳状に良質の粘板岩が敷かれていた。

1・2号墳の様な石材の用い方はB群では行われず、いずれも形状をあまり整えない粘板岩が主体に用いられている。この石材はB群のある斜面のベースと成る石材で簡単に入手することができる。A群の石室とは石材の選び方が異なる。またB群においても10～12号墳は棺台があるが礎床はないが、12号墳には存在している。AⅢ群もまた粘板岩を主体に石室が造られるがB群に比べると石材に選択性があると感じられる。A群の石室墳とB群は築造年代の順番を補完する関係にあるが、石材の選択に違いがありそれが谷を挟んだ石材環境にあるのか、造墓集団自体が異なるのか今回の調査では明らかにできなかった。

参考文献

柴暁彦・原田三壽「国道478号バイパス関係遺跡(1)八木嶋遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第62冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995

谷口悌『町内遺跡発掘調査概要—池上遺跡(第9次調査)・木原遺跡—』八木町教育委員会 2002

辻健二郎『園部町小山東町土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書(徳雲寺谷遺跡群)』園部町教育委員会 1997

都出比呂志「農具鉄器化の二つの画期」(『考古学研究』13巻3号考古学研究会) 1967

土井孝則『北ノ庄13・14号墳発掘調査報告書』亀岡市教育委員会 1997

中川和哉「池上遺跡第12次発掘調査概報」(『京都府遺跡調査概報』第108冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003

中川和哉ほか「池上遺跡第5次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第91冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000

森下浩行「畿内周辺の横穴式石室考・2」(『考古学に学ぶ〔同志社大学考古学シリーズⅦ〕 同志社大学考古学研究室) 1999

引原茂治・福島孝行ほか「新光悦村関係遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第97冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001

福島孝行「諸畑遺跡第4次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第119冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2006

平成17年度調査参加者

調査補助員：宮城一木・小森太賀・松井智一・長谷川託布・中田磨可也・古座昭宏・片山直樹・高屋敦史・中川慎也・廣瀬慶典・八木紀彦・松元和也

整理員：寺尾明美・荻野富砂子・荒川仁佳子・小寺明美・出畑歩美・國府恵利

作業員：梅井ゆき子・三村保彦・川勝千代・笠浪恒正・麻田昇司・辻井千恵子・入江千江子・麻田英昭・大内亨・藤林浩一・麻田忠晴・廣瀬洋子・川勝陽子・詫間文治・松田立之助・柚田晋

平成18年度調査参加者

調査補助員：天池佐栄子・宮城一木・田中奈津子・鷲田紀子・安井蓉子・出畑歩美・國府恵利・濱崎範子・岩塚祐治・田中昭美・榊真麻

整理員：松下道子・荒川仁佳子・井上聡・稲垣あや子

作業員：三村保彦・川勝千代・笠浪恒正・麻田昇司・岡崎博信・詫間文治・松田立之助・柚田晋・松本拓・浅田博・齋藤優子・谷尻八重子・平井美登里・吉岡由利子・桑原芳郎・野村治・北尾美穂・國府久容

圖 版

図版第1 城谷口古墳群



城谷口古墳群全景(西から)

図版第2 城谷口古墳群



(1)城谷口古墳群試掘トレンチ(上が北)



(2)城谷口3号墳試掘トレンチ(上が北)

図版第3 城谷口古墳群



(1)城谷口古墳群南向き斜面(上が南)



(2)城谷口古墳群西向き斜面(上が東)

図版第4 城谷口古墳群



(1)土塁状隆起断面(北から)

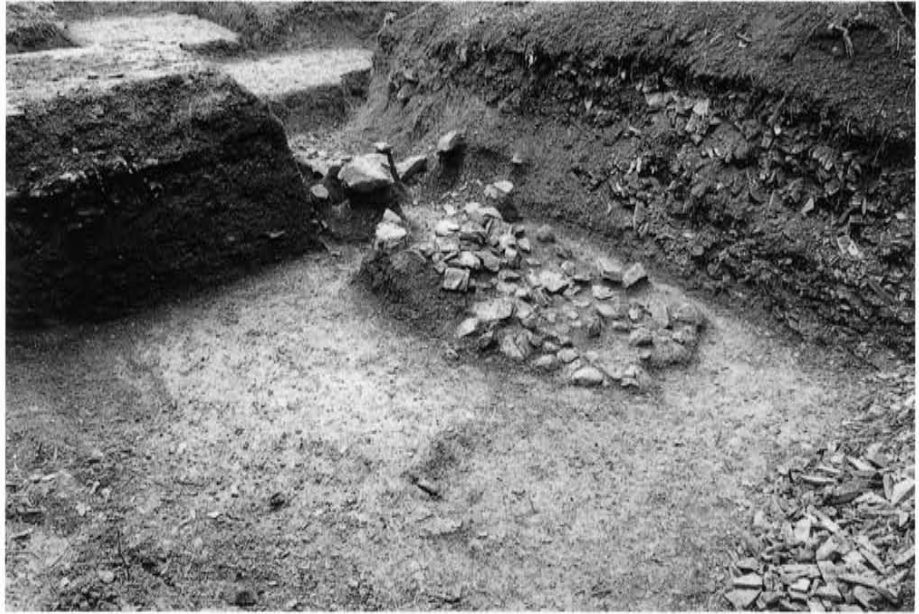


(2)試掘第1～4トレンチ
(南東から)



(3)試掘第4トレンチ(北から)

図版第5 城谷口古墳群



(1)試掘第2トレンチ(南西から)



(2)試掘第5トレンチ(南西から)



(3)城谷口3号墳全景(南から)



(1)城谷口3号墳西面(北西から)



(2)城谷口3号墳東葺石(東から)



(3)城谷口3号墳西葺石(南西から)

図版第7 城谷口古墳群



(1)城谷口3号墳南葺石(南東から)



(2)城谷口3号墳北葺石(北東から)



(3)城谷口3号墳墳丘断面(東から)



(1)城谷口3号墳墳丘断面
(南西から)



(2)城谷口6号墳全景(北から)



(3)城谷口6号墳南葺石(南から)

図版第9 城谷口古墳群



(1)城谷口6号墳東葺石(東から)



(2)城谷口6号墳墳丘頂部(西から)



(3)城谷口6号墳第1主体部遺物
出土状況(南から)



(1)城谷口6号墳第1主体部遺物
出土状況(南から)

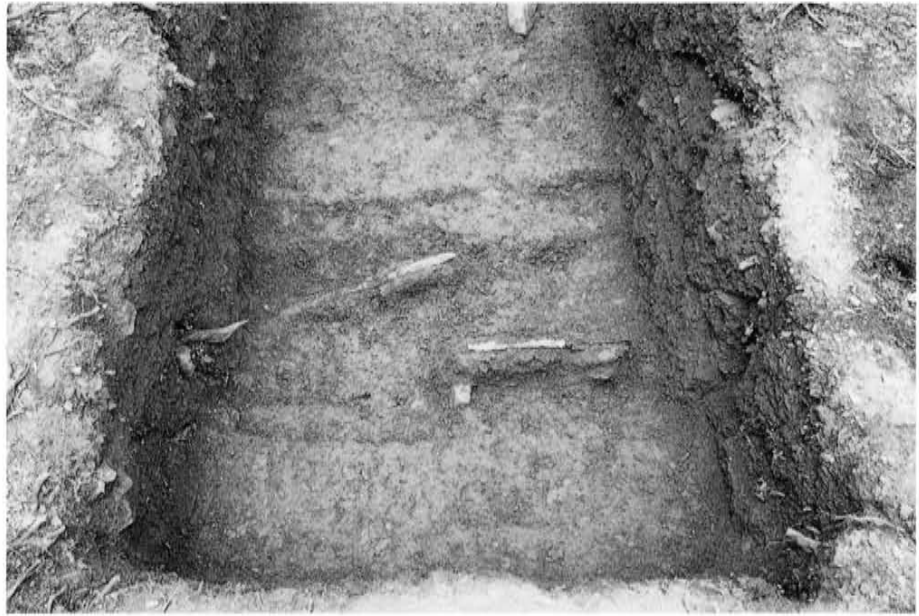


(2)城谷口7号墳(南から)



(3)城谷口7号墳(東から)

図版第11 城谷口古墳群



(1)城谷口7号墳主体部遺物
出土状況(南から)



(2)城谷口7号墳主体部断面
(西から)



(3)城谷口7号墳試掘トレンチ全景
(北西から)

図版第12 城谷口古墳群



(1)城谷口1号墳全景(南から)



(2)城谷口1号墳墳丘(東から)



(3)城谷口1号墳墳丘(南西から)

図版第13 城谷口古墳群



(1)城谷口1号墳石室(南から)



(2)城谷口1号墳石室(東から)



(3)城谷口1号墳遺物出土状況
(南から)



(1)城谷口2号墳全景(南西から)



(2)城谷口2号墳全景(北から)



(3)城谷口2号墳石室3次床面(南西から)



(1)城谷口2号墳石室3次床面
(南東から)



(2)城谷口2号墳石室3次床面遺物
出土状況(南東から)



(3)城谷口2号墳石室2次床面
(南西から)



(1)城谷口2号墳石室1次床面
(北東から)



(2)城谷口2号墳石室1次床面
石障内人骨(北東から)



(3)城谷口2号墳石室1次床面
石障内転用枕(北東から)



(1)城谷口2号墳石室1次床面
石障全景(北東から)



(2)城谷口2号墳石室1次床面
石障内鉄鐸出土状況(上が南西)



(3)城谷口2号墳石室1次床面
石障内鉄器出土状況(北東から)



(1)城谷口2号墳石室1次床面
奥壁遺物出土状況(南西から)



(2)城谷口2号墳石室羨道部
(南東から)



(3)城谷口2号墳北側テラス
試掘トレンチ(西から)

図版第19 城谷口古墳群



(1)城谷口8号墳全景(南から)



(2)城谷口8号墳石室閉塞石周辺
(南から)



(3)城谷口9号墳全景(西から)



(1)城谷口9号墳石室(南西から)



(2)城谷口9号墳石室(南から)



(3)城谷口9号墳遺物出土状況
(南西から)



(1)城谷口10号墳全景(南から)



(2)城谷口10号墳石室(南から)



(3)城谷口10号墳石室(南西から)



(1)城谷口10号墳石室(東から)



(2)城谷口11号墳全景(南から)



(3)城谷口11号墳石室(南から)



(1)城谷口11号墳石室(西から)



(2)城谷口11号墳遺物出土状況
(東から)



(3)城谷口11号墳耳環出土状況
(南から)



(1)城谷口12号墳墳丘(西から)



(2)城谷口12号墳全景(南から)



(3)城谷口12号墳石室閉塞石
(南から)



(1)城谷口12号墳石室(南から)



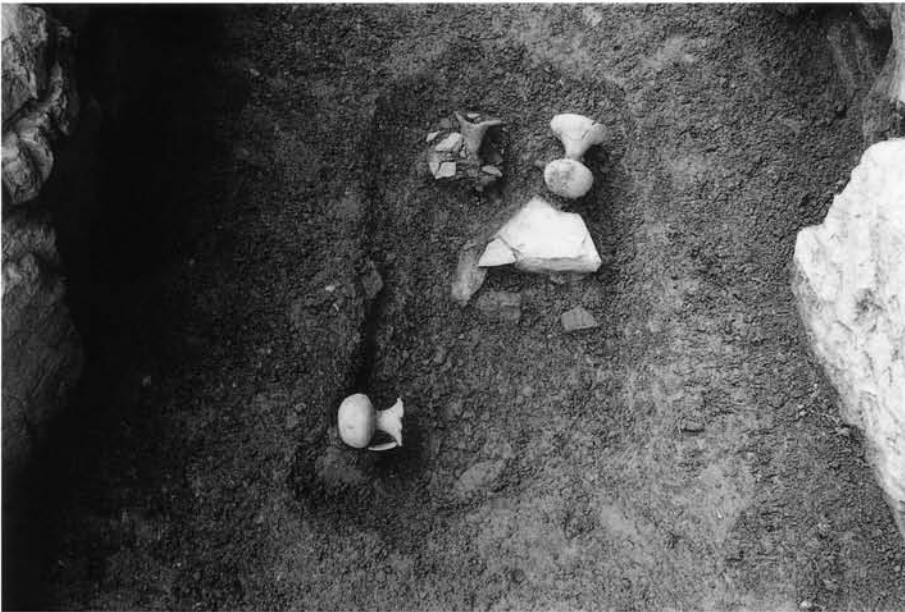
(2)城谷口12号墳石室遺物出土状況
(東から)



(3)城谷口12号墳奥壁部遺物
出土状況(東から)



(1)城谷口12号墳奥壁部遺物
出土状況(上が南)



(2)城谷口12号墳石室閉塞石下層
土坑(南から)



(3)城谷口12号墳耳環・玉類
出土状況(西から)

図版第27 城谷口古墳群



(1)城谷口13号墳全景(南から)



(2)城谷口13号墳主体部
試掘トレンチ(西から)

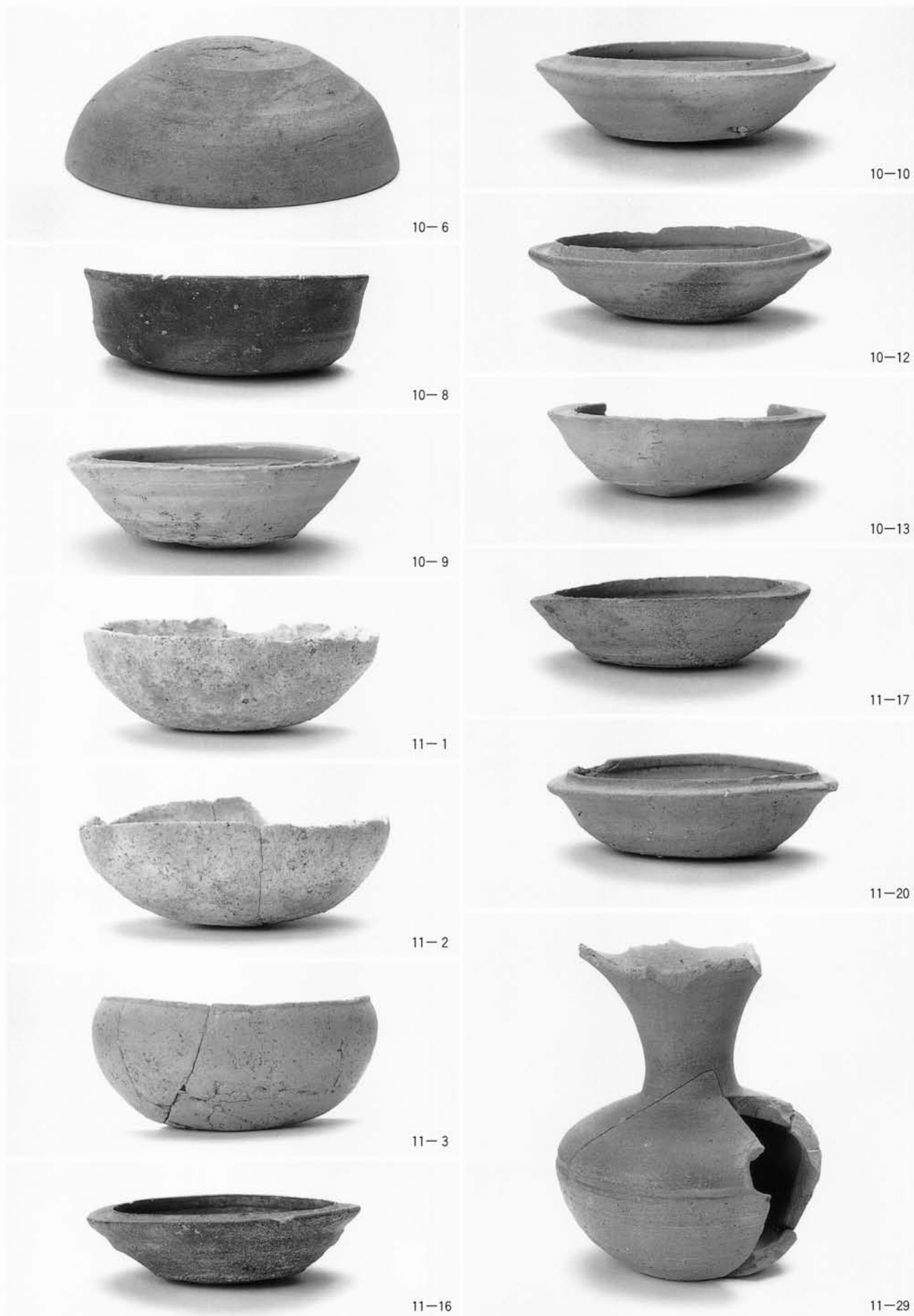


(3)城谷口13号墳墳丘試掘トレンチ
(西から)











11-25



11-32



11-28



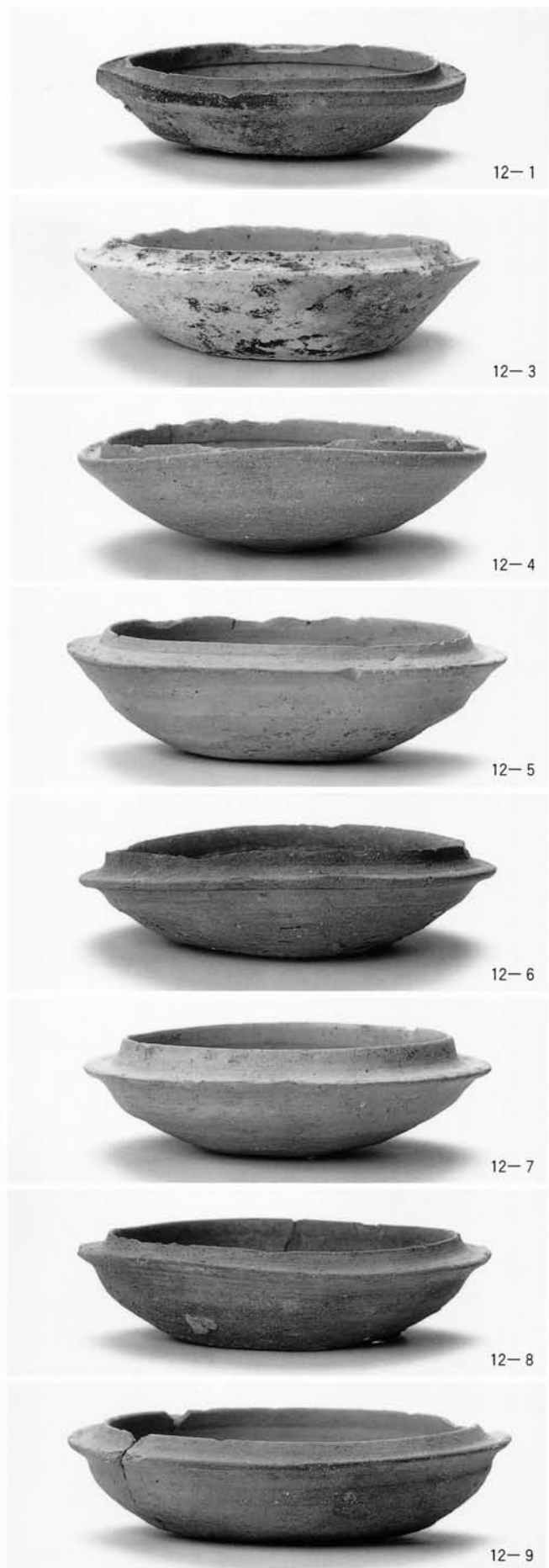
11-33



11-31

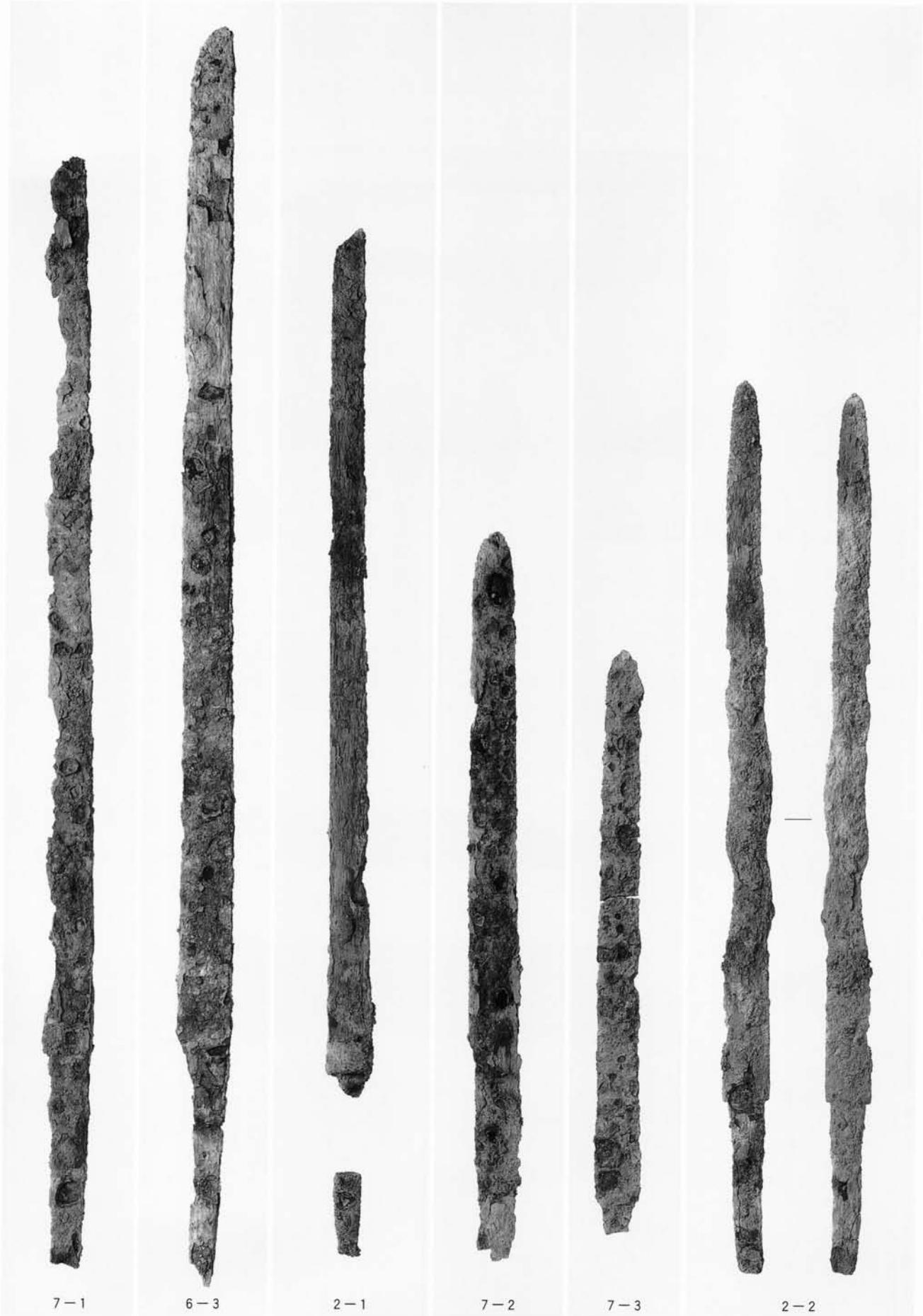


11-30



城谷口12号墳出土土器(1)





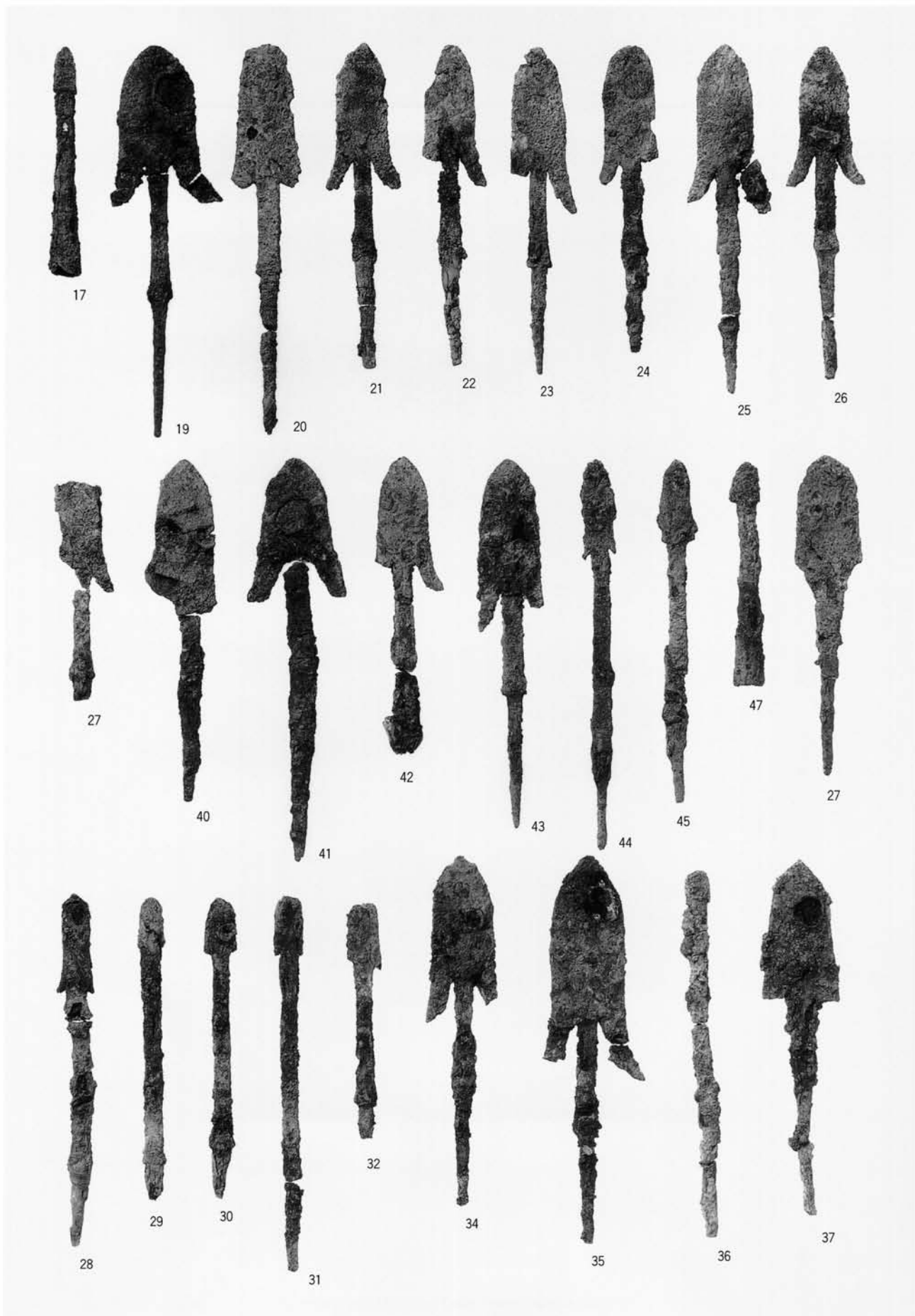
城谷口古墳群出土鉄剣・刀(2・6・7号墳)



城谷口6号墳出土鉄器

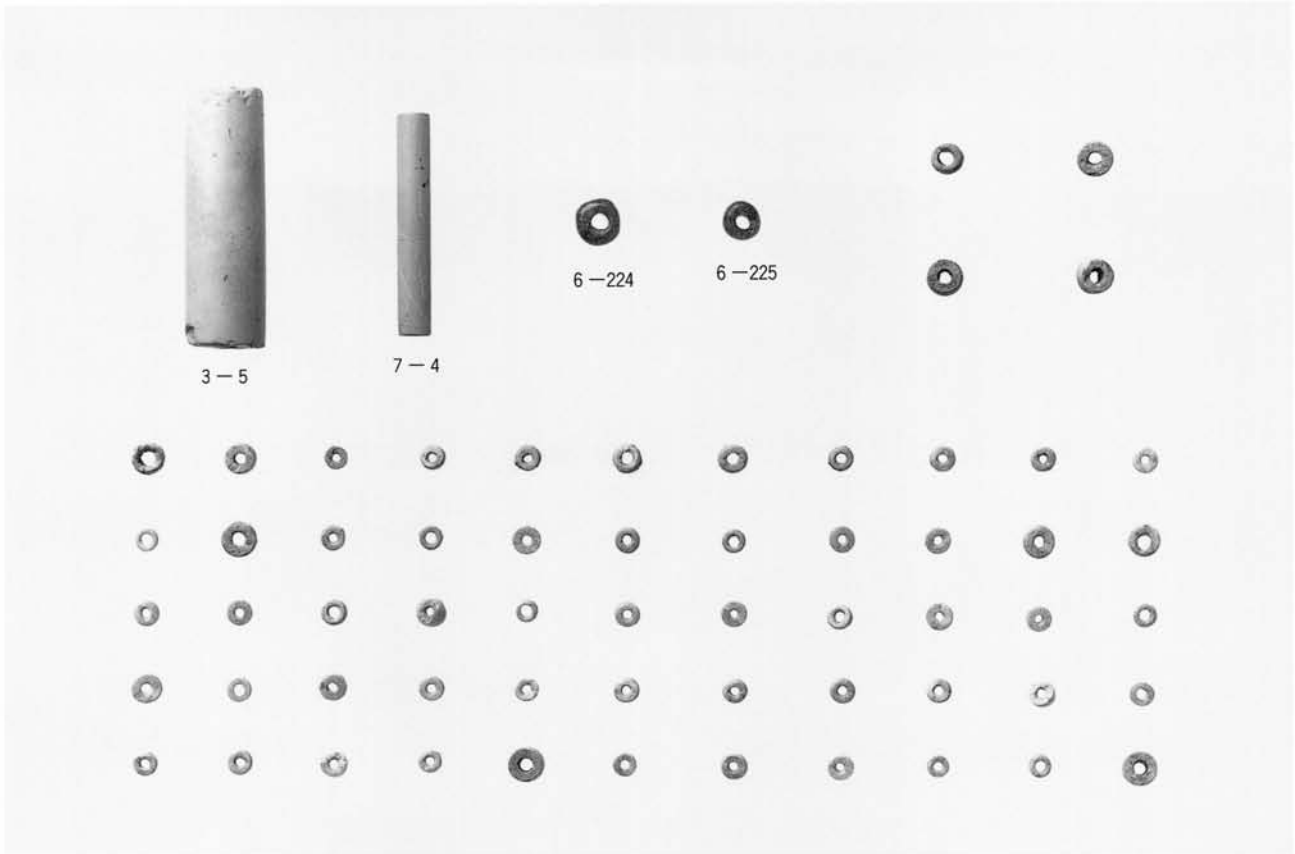


城谷口2号墳出土鉄器

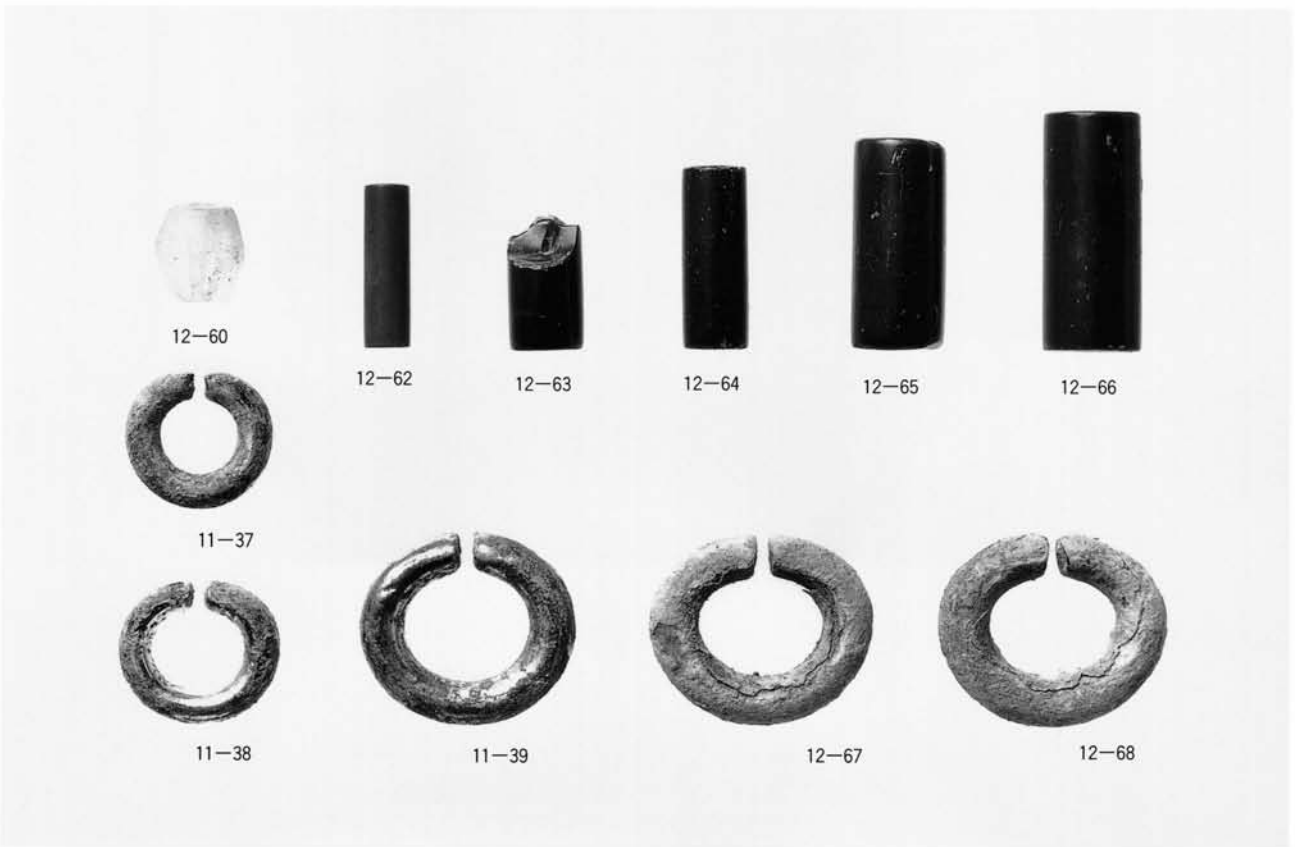


城谷口2号墳出土鉄鏃





(1)城谷口3・6・7号墳出土玉類



(2)城谷口11・12号墳出土耳環・玉類

報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第125冊							
編著者名								
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3				Tel	075(933)3877		
発行年月日	西暦 2007 年 3 月 30 日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
じょうだにぐち こふんぐん	きょうとふなん たんしやぎちよ うきたひろせ							
城谷口古墳群	京都府南丹市八 木町北広瀬	262137	94	35° 05' 04"	135° 31' 20"	20051205 ～ 20060227 20060410 ～ 20060713	620 第1次 900 第2次	工場用地造 成
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
城谷口古墳群	古墳	古墳時代中期及び 後期		古墳時代中期の方墳3基 古墳時代後期の円墳8基(横 穴式石室8基)		蛇行剣ほか鉄器類 (鉄刀、鉄剣、鉄 鏃等) 装身具(耳環、玉 類) 須恵器、土師器		南丹地域の 導入期横穴 式石室の確 認。蛇行剣 の出土。

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

『京都府遺跡調査概報』第125冊正誤表

頁	場所	誤	正
1	下から7行目	概報作製に当たって	概報作成にあたって
3	上から8行目	未製品	未成品
	上から9行目	製品	完成品
	上から24行目	かつてな	かつては
	上から27行目	桂側	桂川
4	下から3行目	直行する	直交する
6	上から11行目	地域で	地域に
7	上から10行目	それを示す特徴は	削除
11	上から3行目	対象形	対称形
13	上から4行目	土納	土囊(土のう)
15	上から5行目	割竹形木棺あったように	割竹形木棺があったように
18	上から7行目	刃部には峰があり	刃部には鑄があり
31	上から11行目	遺失している	失われている
35	第30図	図面の訂正	添付図
36	第31図	図面の訂正	添付図
	下から10行目	鉄鏃18 不明鉄製品	鉄鏃16 鏃状鉄製品
41	上から3行目	類型不明鉄鏃片(21)	類型不明鉄鏃片(18)
	上から5行目	不明鉄製品	鏃状鉄製品
43	上から6行目	鏃状鉄器	鏃状鉄製品
	上から10行目	鉄鏃5	鉄鏃3
		鏃状鉄器	鏃状鉄製品
	上から17行目	鏃状鉄器	鏃状鉄製品
	下から1行目	(33・48)	(34・49)
		33は	34は
48は		49は	
62	第57図	図面の訂正	添付図
下から4行目	鉄鏃3	鉄鏃2	
63	上から5行目	鉄鏃10	鉄鏃11
	上から18行目	類型不明鉄鏃3	類型不明鉄鏃2
		不明鉄製品1	不明鉄製品2
	下から14行目	鉄鏃片で	49は鉄鏃片で
67	下から5行目	横穴式石室8基	横穴式石室を持つ円墳8基
68	下から2行目	墳丘の作り方	墳丘の造り方(文頭の禁則処理)

京都府遺跡調査概報 第125冊

平成19年3月30日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141